静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第65集

遠江国分寺跡の調査

— 平成６年度県立磐田南高等学校埋蔵文化財調査 —

1995

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第65集

遠江国分寺跡の調査

— 平成6年度県立磐田南高等学校埋蔵文化財調査 —

1995

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

遠江国分寺跡周辺航空写真

国分尼寺講堂跡

国分尼寺金堂跡基壇

軒丸瓦・軒平瓦（奈良時代）

軒丸瓦・軒平瓦（奈良～平安時代）

隅木蓋瓦

土器（奈良時代～平安時代）

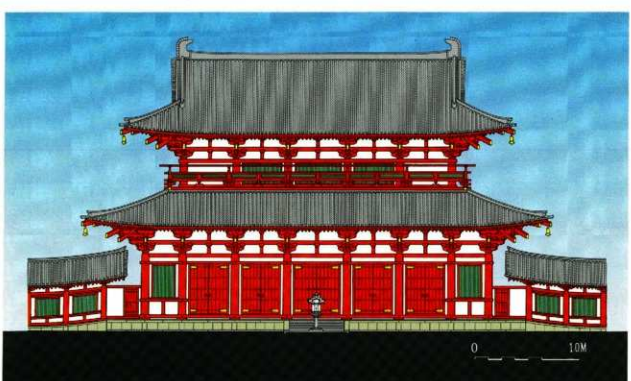
墨書土器「金寺」＝国分僧寺を意味する

墨書土器「講院」＝講堂を示す

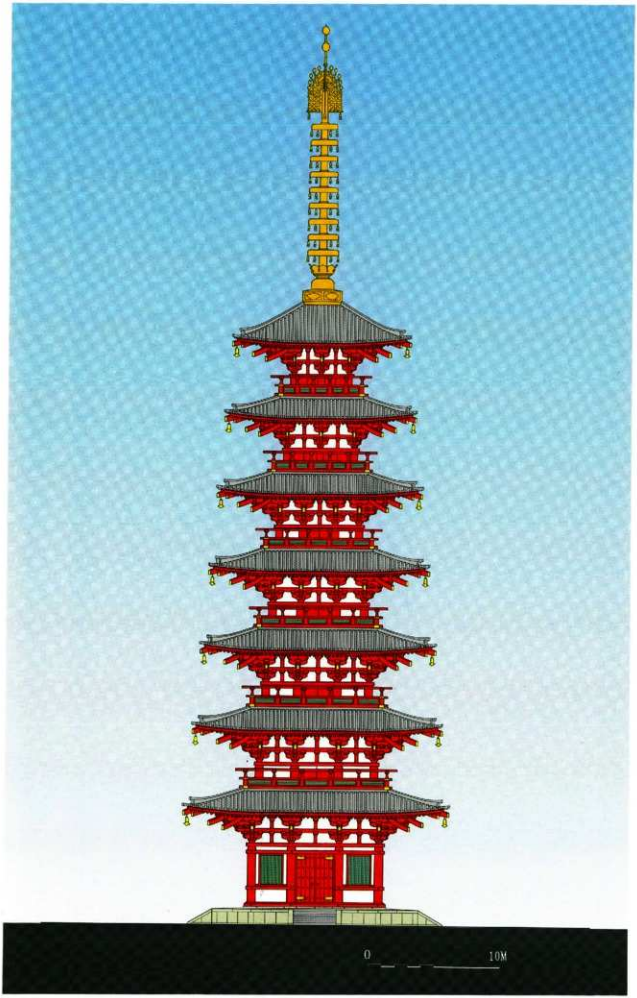
墨書土器（記号か？）

風字硯（すずり）

遠江国分寺の推定復元模型



遠江国分寺　金堂推定復元図［提供：㈱大林組］



遠江国分寺　七重の塔推定復元図［提供：㈱大林組］

序

「遠江」は、都の近くの琵琶湖をひかえた地「近江」に対し、遠く浜名湖をひかえた地として名付けられたという。その遠江の中心であった磐田原台地の南端に遠江国分寺は建立された。遠江国分寺の創建については、他の国分寺同様に正確に解ってはいない。いずれにしろ天平13年に聖武天皇により発せられた「国分寺造立の詔」の前後には始まっていたと考えられている。

遠江国分寺は国分寺遺構としては、日本で最初ともいえる本格的発掘調査が昭和26年に実施され、その保存状態の良さが調査により立証された。その結果、昭和27年には全国数ある国分寺の中で特に「特別史跡」に指定された記念的国分寺である。

日本の寺院建築は、飛鳥朝に建立された飛鳥寺式を最初に、四天王寺式、法隆寺式、興福寺式、薬師寺式、そして東大寺式などと呼ばれるように南大門・中門・塔・金堂・講堂の配置が天平年間までの期間に多彩な変遷を経てきた。その中で、遠江国分寺は当時としては最新の東大寺式伽藍配置を有した国分寺であった。

昭和26年に、石田茂作氏らを中心に実施された第１次調査で、塔・金堂・講堂・回廊・中門・南大門・十塁などの伽藍配置が確認され、その伽藍地は100間（180m）四方と推定された。その後、磐田市教育委員会を中心に100回を越える調査が実施されている。中でも、昭和58年に実施された磐田南高等学校の同窓会館建設に伴う第５次調査で大型の掘立柱建物跡が検出され、国分寺の伽藍域の再考を促す契機となった。平成元年の調査では、布掘り遺構を持つ基壇跡が検出され、その南側で行なわれた平成４年度の調査区でも、布掘り遺構と版築や掘り込み地業が施された基壇跡が確認された。これらが確認された地域の字名は「尼寺」であり、遠江国分尼寺の講堂跡や金堂跡と考えられている。現在まで実施された数多くの調査で、遠江国の国分寺と国分尼寺は、中心建物である金堂・講堂の中軸線がほぼ同一上になり、北に尼寺、南に僧寺が配置されていたことが判明してきた。また、第１次調査で推定された伽藍地100間四方も、さらに北側や東側にのびる可能性も高まっている。

これらの状況を受けて、今回の調査は国分寺の伽藍地の範囲が確認されることが予想される重要な調査であった。今回の調査で、伽藍地の西側を区画する築地と溝が、磐田南高等学校の中で確認されたことは伽藍地がさらに北側にのびていることが確実となった重要な出来事であった。これにより伽藍地の南北幅がほぼ２町で確定されたといえよう。

調査の実施及び報告書の作成にあたっては、遠江国分寺調査委員会・静岡県教育委員会・磐田市教育委員会・磐田南高等学校の各位に、深い理解と協力をいただいた。ここに関係各位に深い感謝の意を表するとともに、調査及び資料整理に従事した本研究所員及び作業に参加された多くの人々の労苦に感謝するものである。

1995年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　斎藤　忠

例　言

1　本書は、静岡県磐田市見付3084に所在する遠江（とおとうみ）国分寺跡の調査報告書である。県立磐田南高等学校用地内で実施した寺域確認のための第112次調査の発掘結果を報告するとともに、昭和26年の第1次調査から平成6年度第111次調査までの発掘調査成果等を集成しその成果をとりまとめたものである。

2　調査は、当研究所が「平成6年度県立磐田南高等学校埋蔵文化財調査」として静岡県教育委員会から委託を受け「遠江国分寺調査委員会」を組織し実施した。

3　調査体制は次のとおりである。

〈遠江国分寺跡調査委員会〉

	氏　名	所　　属
調査委員	斎藤　忠	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所　所長
	森　郁夫	京都国立博物館　学芸課　考古室長
	大脇　潔	奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二室長
調査員	山崎克巳	磐田市教育委員会文化財課　調査係長
	安藤　寛	同　　主査
	佐藤達雄	静岡県教育委員会文化課　文化財調査担当　主席指導主事
	山田成洋	同　　同　　指導主事
	栗野克巳	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所　調査研究部次長
	及川　司	同　　主任調査研究員
	加藤理文	同　　調査研究員

4　調査関係機関等

〈静岡県教育委員会〉

財務課	課長	友田忠昭
	課長補佐	岩倉睦弘
	主幹兼施設係長	栗田　隆
	施設係主事	望月孝一
文化課	文化課長	鈴木吉勝

〈磐田市教育委員会〉

教育長	磯部保文
文化財課長	八木邦雄

〈静岡県立磐田南高等学校〉

校　　長　柴田和洋
教　　頭　桑原允嗣
事 務 長　鈴木正明
主　　任　松浦克介

〈事 務 局〉

財静岡県埋蔵文化財調査研究所
常 務 理 事　鈴木　勲
調査研究部長　小崎章男
総 務 課 長　山梨弘志
総務課会計係長　八木利眞

5　発掘調査遺構図集成は、第51次と第52次については静岡県教育委員会文化課、その他については磐田市教育委員会発行の調査報告書等より抜粋した。

6　昭和59年度に国庫補助事業で公共座標を設置し、この座標軸にそった区画を設け、第9次調査から利用している。(P12 第4図、P13 第5図)

7　参考文献等は一括して集録（P126～127）したが、第Ⅴ章の文献については文末に掲載した。

8　本文中で引用した図面・写真・文献等の表記の方法は下記のとおりである。

第○○図……本文中の挿図
集成図○○……付編2．発掘調査遺構図集成
図版○○……写真図版
文献○○……付編3．参考文献
注○○……各節末の注一覧

9　巻頭カラーの金堂と七重の塔推定復元図は、大林組より掲載許可をいただいた。

10　本書の編集は、財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

目　次

序
例言
第Ⅰ章　調査に至る経過 …… （佐藤達雄） …… 1
第Ⅱ章　位置と環境 …… （安藤　寛） …… 2
　第1節　地理的環境 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　調査の方法・経過 …… （栗野克巳） …… 8
　第1節　遠江国分寺調査委員会 …… 8
　第2節　試掘調査 …… 9
　第3節　資料収集・整理 …… 9
第Ⅳ章　調査の成果 …… 11
　第1節　今までの調査 …… 11
　はじめに（調査の方法） …… （安藤） …… 11
　(1) 主要伽藍について（第1次調査） …… （栗野） …… 14
　(2) 伽藍地区画施設について …… （山崎克巳） …… 16
　(3) 伽藍地北東部建物群について …… （山崎） …… 20
　(4) 伽藍地外西側部分の遺構について …… （及川　司） …… 24
　(5) 国分尼寺周辺遺構について …… （山崎） …… 25
　(6) 主要遺物について …… （安藤） …… 29
　第2節　試掘調査の結果（第112次調査） …… （加藤理文） …… 35
　(1) 経過 …… 35
　(2) 検出された遺構 …… 35
　(3) 出土遺物について …… 41
　(4) まとめ …… 55
　第3節　磐田南高等学校校地内の遺構のあり方 …… （加藤） …… 56
第Ⅴ章　考　察 …… 60
　第1節　寺院地と伽藍配置の復元 …… （大脇　潔） …… 60
　はじめに …… 60
　(1) 調査略史 …… 61
　(2) 土居の調査 …… 61
　(3) 寺院地の復元 …… 63
　(4) 伽藍配置の復元 …… 64
　第2節　遠江国分寺の瓦と寺の造営 …… （森　郁夫） …… 66
　はじめに …… 66
　(1) 軒瓦の分類 …… 66
　(2) 軒平瓦C・D類 …… 69
　(3) 国分寺造営 …… 70
第Ⅵ章　まとめ …… （斎藤　忠） …… 73
付編　1．遠江国分寺周辺の主な発掘調査一覧表 …… 76
　2．発掘調査遺構図集成 …… 85
　3．参考文献 …… 126
写真図版
抄録
付図　遠江国分寺周辺　遺構分布図（1/1,000）
　遠江国分寺周辺　地籍図合成図（1/1,000）

第Ⅰ章　調査に至る経過

県立磐田南高等学校は、国の特別史跡である「遠江国分寺跡」の北側に隣接する。磐田南高校は大正11年に開校され、本年度末で創立73周年を迎える長い伝統を誇る高校であり、地域の方々の学校に寄せる思いは大きい。ところで、現在の校舎はいずれも昭和30年代後半から昭和40年代の建築で、校舎改築の希望が強く、その計画がここ数年の間に具体化する可能性が高くなってきている。

磐田南高校の敷地内では、昭和58年の生活館建設（第５次）、60年の自転車置き場建設（第13次）、63年の仮設校舎建設（第51次）、プール・給食棟建設（第52次）などに先立ち、発掘調査が実施されている。これらの調査の成果の中で注目されるのは、昭和63年の調査（第51次、第52次）で確認された溝状遺構である。国分寺の西側と北側に検出された幅２～３ｍ程の溝は、本来の国分寺の寺域を示すものであり、国分寺の寺域は北に拡大する可能性があると考えられる様になってきた。すなわち、磐田南高校の敷地、中でも現在校舎が建設されている部分は、遠江国分寺の寺域に含まれることとなる。

県教育委員会では、このような状況に対応して校舎建設に関わる財務課と文化財保護の立場である文化課と協議を重ねた結果、この遺跡の重要性にかんがみ、「遠江国分寺跡」に係る基礎資料を収集し、これらに基づいて校舎改築など学校整備の基本方針を策定していくこととした。そこで、試掘調査を実施するとともに、過去に行われてきた100次以上にわたる発掘調査の成果を総合して基礎資料の収集と専門研究者による総合的な検討を行う調査を計画した。そしてこれらの調査を、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託した。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

遠江国分寺跡は、ＪＲ磐田駅の北方約１㎞、磐田市役所北側の磐田市見付字境松（通称は中央町）に所在する。市のほぼ中央にあたり、周辺は市街地となって住宅等が建ち並んでいる。

磐田市は静岡県の西部、遠州地方のほぼ中央に位置し、南には遠州灘を望む。西は天竜川を挟んで浜松市と、東は太田川を挟んで袋井市と接している。その中心には旧東海道の宿場町として発達した見付と、東海道本線磐田駅の玄関口として発達した中泉の街並みが広がっている。台地上には茶畑が、沖積平野部には水田が広がっている。また、市街地の周辺には磐田市の基幹産業である輸送関連産業を中心とした県内有数の工業地域を形成している。

磐田市域の地形は、磐田原台地を中心に、天竜川・太田川という２つの河川によって台地の西側と東側に形成された沖積地（平野部）、旧河川の自然堤防と磐田原台地に挟まれた台地南側の低湿地帯、遠州灘に面して砂堆が発達する海岸地帯で構成されている。

磐田原台地は、古天竜川によって形成された洪積台地（丘陵）である。北から南にほぼ形に広がり、南北11㎞、最南端で東西５㎞の規模を有する。北端の豊岡村神増原（かんぞうばら）付近での標高は130ｍ、ゆるやかに南へと傾斜して標高2.5ｍの東海道新幹線付近で沖積平野に没している。台地の西縁辺部はきわめて直線的で急峻な崖状を呈し、東縁部は大小の谷が台地を浸食して、変化に富んだ地形を呈している。近年、全国有数のトンボ生息地として知られるようになった桶ケ谷沼や植物の宝庫・鶴ケ池はこの台地東縁部に位置している。台地南縁部は開析が著しく進み、４つの大きな丘陵部を形成している。これらの段丘は西から中泉丘陵、見付丘陵、城之崎丘陵、鎌田・西貝塚丘陵と呼ばれている。各丘陵にはいくつかの浅谷が入り、複雑な地形を呈している。

遠江国分寺跡は、中泉丘陵の北東縁辺部に立地し、東には低湿地帯の今之浦を望む。この今之浦は、奈良時代には大之浦の名で、天皇と遠江国司桜井王との間に交わされた歌に詠まれている。

「大の浦のその長浜に寄る浪の寛けく君を念ふこの頃」（万葉集巻八）

現在、今之浦は新市街地として近代的な様相を呈しているが、近年まで一部は沼地として残り、その周辺地は深田として土地利用されていた。また、縄文時代にはこの今之浦を中心にラグーン（潟湖＝入江状の湖）が形成され、海水と淡水が混りあう状態であったと考えられている。このため、海産物に恵まれ、第２節で述べるように、その縁に沿って縄文時代後期を中心とした貝塚が残っている。

国分寺付近の標高は17～19ｍで、今之浦との比高差は約17ｍを測る。また、磐田駅から国道１号線に至る県道磐田停車場線は、国分寺の伽藍中軸線にほぼ平行して走っており、江戸時代の旧東海道もこの道路の方向で見付と中泉を結んでいた。

第２節　歴史的環境

磐田市には、700か所あまりの遺跡が知られている。このうち古墳は600基あまり確認されており、そのほかが集落跡や官衙跡、寺院跡、古墳以外の墳墓あるいは墓群などである。このうち律令時代の遺跡としては10か所ほどが知られている（古墳１基は遺跡数１と数え、その他の墳墓は一の谷中世墳墓群のように900基近くあっても全体で１遺跡と数える）。

1　旧石器時代～古墳時代

磐田原台地は旧石器時代の遺跡の宝庫として知られている。磐田市内だけで約60か所、台地全体では80か所以上あり、愛鷹山麓・箱根西山麓と並んで静岡県でも有数の分布地域となっている。匂坂中遺跡群や京見塚遺跡(7)などいずれもナイフ形石器文化期から細石器文化期（約15,000年～20,000年前）に属する。当国分寺・国府台遺跡(1)でも第24次調査地点で、礫群を伴ってナイフ形石器が出土しており、現在遺構が確認されているものとしては市内最南端の旧石器時代遺跡となっている。

縄文時代の遺跡では、匂坂中遺跡群で早期（約8,000年前）の押型文土器が出土し、市内で最も古い土器とされている。また、縄文時代中期以降、海水準の低下によって台地の南端にラグーン（潟湖）ができる。そしてこれをとりまく台地末端部に、見性寺貝塚(5)や石原貝塚(3)など後期を主体とした貝塚が形成される。

米作りが始まる弥生時代では後期に集落の最盛期を迎える。この時期の遺跡としては、二之宮貝塚を含む御殿・二之宮遺跡(17)、城之崎１丁目遺跡(23)などがあり、浅谷を挟んで丘陵の末端部に対峙するように位置し、帯状に分布する。

弥生時代の集落は、古墳時代になると一様に終えんを迎え、前期から中期の遺物が出土する集落遺跡は現在発見されているものは、御殿・二之宮遺跡(17)などごく少数である。ところが台地東南部を中心に松林山古墳（新貝）や経塚古墳（新貝・消滅）、庚申塚古墳(12)、連福寺古墳（(16)の古墳・消滅）等の大型の前方後円墳が出現する。中期も前方後円墳の堂山古墳を初め、兜塚古墳(6)や京見塚古墳(8)等の大型の円墳が築造される。このように磐田原台地周辺は遠江でも有力な豪族の勢力地域となったのである。そして、古墳時代後期には多数の円墳等が群集墳として磐田原台地上に築造される。

2　律令時代

古墳時代終末期の７世紀末（白鳳期）には仏教文化が磐田地方にももたらされ、古墳がまだ多数築かれているのと同じころに市域には瓦を葺いた古代寺院が建立される。現在の天竜から中泉（石原町）地内に建てられた大宝院廃寺(18)、北方の台地西下の寺谷地内に建てられた寺谷廃寺である。大宝院廃寺からは近年の調査で山田寺様式の軒瓦や薬師立像塼仏が出土し、遺構の一部も確認されている。また、寺谷廃寺からは川原寺様式の軒丸瓦が出土している。これらの寺院は奈良時代を通じて営まれ、その後も存続していた可能性がある。

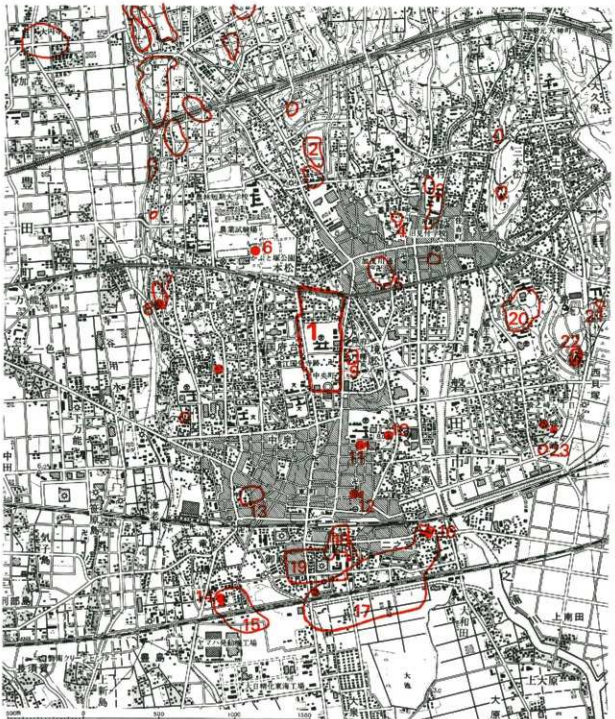
そして、奈良時代前半には鎌田廃寺（大草寺：鎌田・鍬影遺跡）が造られ、中頃に遠江国分寺が創建される。府八幡宮(9)の創建も同じころといわれる。このほか式内社も多数分布する。

遠江国分寺に関する史料はほとんど無く、『類聚国史』の弘仁10年８月(819年)に相模・飛騨の国分寺と共に焼失したという記載と、『延喜式』に「遠江国正税二八万束……」の記載が散見できる程度である。ここ数年の調査では、奈良時代よりむしろ平安時代中期の遺物が多く出土することから、焼失後も（一部焼失か）その機能を果たしていたものと考えられる。

また、古墳時代末から奈良時代にかけての官衙的な遺跡として、国府推定地の御殿・二之宮遺跡(17)のほか長者屋敷遺跡（寺谷）、大間道跡（鎌田）、野際遺跡（東貝塚）などがある。

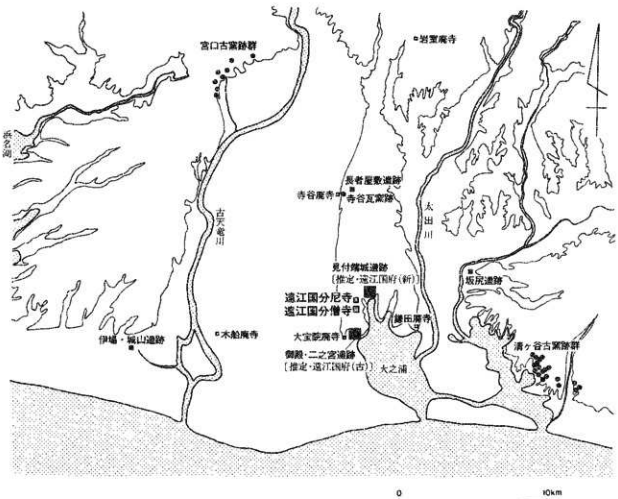
このうち御殿・二之宮遺跡からは、多量の墨書土器とともに６点の木簡が出土している。木簡には、「大郷」「久米郷」という旧磐田郡内の郷名が記載されており、墨書土器には「綾生（りょうせい）」「豊穀（とよき）」という国府に相応しいものが含まれている。最近の発掘調査では大型の掘立柱建物跡が検出され、二彩も出土していることから、御殿・二之宮遺跡に奈良時代の国府が所在していたことはほぼまちがいないと思われる。

一方、見付端城遺跡(3)は、藤岡謙二郎氏が遠江国府と推定した場所にあたる。昭和57年～58年の発掘調査によって、平安時代中頃の灰釉陶器とともにまとまった緑釉陶器が出土しているが、墨書土器が１



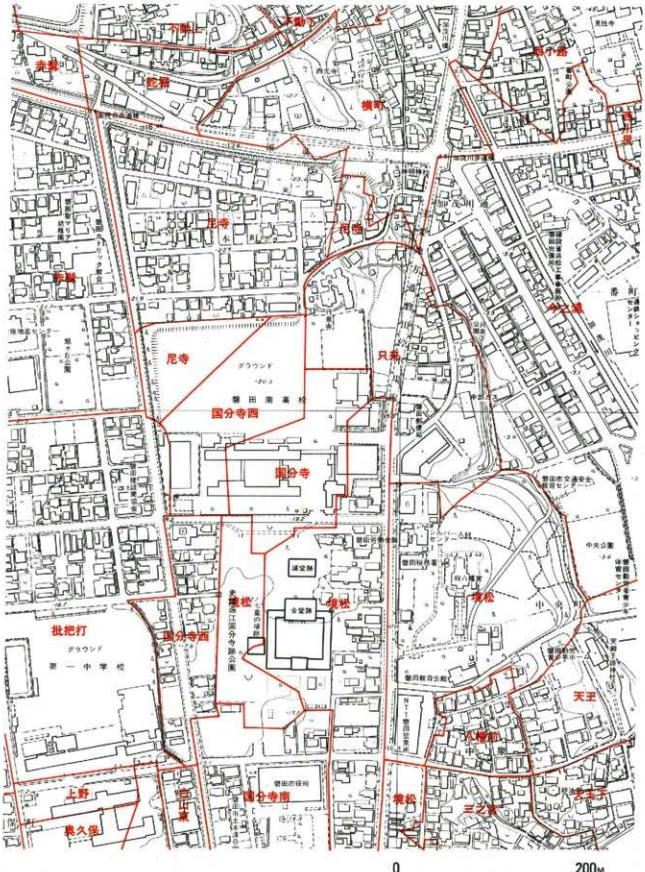
1．国分寺・国府台遺跡〔旧石器・古墳(後)～中世〕（遺江国分寺跡）
2．一の谷中世墳墓群〔中・近世〕
3．見付端城遺跡〔平安・中世・近世〕
4．塔之壇経塚〔平安後期〕
5．見性寺貝塚〔縄文(後・晩)・弥生～近世〕
6．兜塚古墳〔中期〕
7．京見塚遺跡群〔旧石器・縄文(中)・弥生～近世〕
8．京見塚古墳〔中期〕
9．府八幡宮
10．丸山古墳〔中期〕
11．澄水山古墳〔中期〕
12．庚申塚古墳〔前期〕
13．石原貝塚〔縄文(後)・弥生(中)〕
14．観音山古墳〔中期〕
15．大宝院廃寺遺跡〔古墳・奈良・平安〕
16．連福寺古墳〔前期〕
17．御殿・二之宮遺跡〔弥生(中・後)～近世〕
18．中泉代官所跡〔近世〕
19．中泉御殿跡〔近世〕
20．城之崎城跡〔中・近世〕
21．安久路古窯〔古墳(後)〕
22．城之崎西山遺跡〔弥生(後期)〕
23．城之崎Ⅰ丁目遺跡〔弥生〕

第１図　周辺遺跡分布図



第2図　奈良・平安時代の地形（推定復元）

（文献㉓掲載図を一部改変）


不動
東裏
蛇神
横町
尼寺
前田
新屋
尼寺
グラウンド
只光
国分寺西
国分寺
中央公園
体育館
北松
北松
国分寺西
批把打
グラウンド
第一中学校
天王
八幡前
上野
東裏
長久保
国分寺南
北松
三之宮

第3図　字の図

点もなく、また遺構の面からも大きな建物の群立は確認されていない。そして、10世紀後半には衰退していく（文献⑷）。しかし、鎌倉時代の『十六夜日記』にも「見付の国府」の記載があり、見付の西北の丘陵上に一の谷中世墳墓群が所在することから、見付端城遺跡周辺に平安時代中期から中世の国府・守護所があった可能性は極めて高いといえる。ただし、『十六夜日記』には「里あれて物恐ろし」という表現がなされており、相当に荒廃していた状況ないしは、騒乱の状況が考えられる。

磐田原台地南側に広がる沖積地は、平安時代後期には荘園化していく。鎌田地区は伊勢神宮の所領、鎌山御厨（かまたみくりや）となり、天竜川の沖積地は京都松尾神社の所領、池田荘となる。

3　遠江国分寺周辺の字名

第3図に周辺の字名を示した。国分寺は「境松」に所在する。磐田駅周辺は中泉と呼ばれるが、「境松」は見付と中泉の境に松が植えられたことからその名が付いたとされる。また、県立磐田南高校の北側には「尼寺」の地名が見られる。従来国府台遺跡と呼ばれてきた地域が国分尼寺ではないかといわれてきた理由は、国分寺とほぼ同じ瓦が多量に出土することと、この字名による。また、この「尼寺」の北には「蛇堀」という字があり、このあたりが堀、すなわち谷状の地形となっていたことを示している。ここには、現在国道1号線が通っている。

4　瓦の生産地

遠江国分寺に使用された瓦のほとんどは、国分寺から約10km東に位置する大須賀町の清ケ谷古窯跡群で生産されている。当時の地形環境としては、国分寺の所在する台地の東下は大之浦（今之浦）が広がり、ラグーンの状態であったと推定される。清ケ谷窯から国分寺への瓦の運搬は舟で行ったと考えられている。

また、葺き替え用の瓦の生産地には、市内寺谷の寺谷瓦窯が知られている。このほかに、一部であるが、浜北市の宮口古窯跡群（東ノ谷窯）の製品が含まれている。

また、遠江国分寺と同じ瓦が出土する遺跡として、市内では大宝院廃寺遺跡⑺、鎌田・鍬影遺跡、見性寺貝塚遺跡⑸、見付端城遺跡⑶、市外では豊岡村の岩室廃寺、掛川市の六ノ坪遺跡、静岡市の宮川古窯（片山廃寺の瓦供給地）が知られている。

第Ⅲ章　調査の方法・経過

第１節　遠江国分寺調査委員会

調査委員会を組織し、遠江国分寺の検討を行うこととした。調査委員には学術経験者３名をお願いするとともに、調査員は、県及び磐田市教育委員会と当研究所職員等の埋蔵文化財調査経験者７名をあて、合計10名で調査委員会が構成される。(「例言」参照)

なお、教育委員会の関係者及び、事務局関係者も随時参加の上、３回の委員会を開催した。また、委員会とは別に、事務的な打ち合わせや、調査員の打ち合わせ等を実施した。

(第１回委員会) 平成６年７月20日 (水) ：磐田市埋蔵文化財センター
【議題】調査の基本方針の検討と現地確認。
(１) 調査計画の概要
県教育委員会から、磐田南高校の校舎建て替え等の計画に対応して、埋蔵文化財の取り扱い基本方針をまとめるための基礎資料を得るための調査を実施したいので協力していただきたいとの説明があった。(調査計画書)
(２) 遠江国分寺周辺の過去の調査
第１次調査以来実施されてきた、第108次調査までの主な発掘調査の概要を、発掘調査担当者が説明し、現在までの状況を確認する。(遠江国分寺周辺の主な発掘調査)
(３) 調査方法
調査方法としては、遠江国分寺の実体を把握するために、資料の収集を中心として、一部寺域確認のための試掘調査を行う。調査結果は、報告書にとりまとめる。
①基礎資料の収集
・遠江国分寺関係文献の収集
・全国国分寺・国分尼寺関係文献の収集
②発掘調査資料の集成・整理
・全体図の作成 (1/500都市計画図に調査資料を記入)
③試掘調査
・西側土塁または築地の延長部分の確認 (校舎南)
・西側溝の延長部分の確認 (グランド南)
・グランド部分の遺構残存状況の把握 (グランド北)
④報告書の作成
(４) 現地視察
特別史跡に指定された伽藍地を視察するとともに、発掘予定地を確認した。

(第２回委員会) 平成６年８月25日 (水) ：磐田南高等学校現地
【議題】試掘調査結果の検討、国分寺寺域の検討。

(第３回委員会) 平成７年２月21日 (水) ：たちばな会館
【議題】国分寺寺域の検討、報告書の検討。

（調査員打ち合わせ、事務打ち合わせ等の経過）

平成６年

６月15日＝事前打ち合わせ：磐田市埋蔵文化財センター

県教育委員会（県文化課）、磐田市教育委員会（市文化財課）

６月28日＝準備会：磐田市埋蔵文化財センター

県文化課、市文化財課、研究所【磐田南高等学校関係者との打ち合わせ】

７月上旬＝調査委員の依頼

７月20日＝第１回調査委員会：磐田市埋蔵文化財センター

８月19日～29日＝試掘調査

８月23日＝試掘調査状況打ち合わせ：磐田南高等学校発掘調査現場

８月25日＝第２回調査委員会：磐田南高等学校発掘調査現場

８月26日＝学校側への調査状況説明：磐田南高等学校発掘調査現場

８月29日＝県教育委員会財務課との協議：磐田南高等学校発掘調査現場

平成７年

２月16日＝調査員検討会：磐田市埋蔵文化財センター【試掘調査結果の検討】

２月21日＝第３回調査委員会

３月９日＝調査員検討会：磐田市埋蔵文化財センター【報告書の内容検討】

３月24日＝調査員検討会：磐田市埋蔵文化財センター

【磐田南高等学校グランドにおける遺構残存状況の検討】

第２節　試掘調査

試掘調査は、学校用地内であるため学校行事等との調整上夏休みの後半の８月19日から29日まで実施した。第Ⅳ章第２節に試掘調査の結果（第112次調査）を報告している。第１回調査委員会で設定された３項目に対して、現地の状況に合わせた若干の微調整を行い、６か所の試掘抗を設定した。

①西側上段または築地の延長部分の確認（校舎南）

校舎南側の第１トレンチで築地の位置を確認するとともに、校舎の中庭部分の第２トレンチまで西側築地が延長していることを確認した。

②西側溝の延長部分の確認（グランド北）

樹木、盛り土、防護ネットの柱などの制約があり、限られた範囲に第３トレンチから第６トレンチまで４本の試掘抗を発掘したが、確認できなかった。

③グランド部分の遺構残存状況の把握（グランド北）

前記②のトレンチの土層観察データと、他の調査による土層観察データをあわせてグランドの地形復元を行い、遺構の残存状況を検討した。その結果グランドの南側とグランドを囲む土手には遺構の残存している可能性が高いことが判明した。

第３節　資料収集・整理

遠江国分寺関係の発掘調査資料の集成・整理を実施した。第112次までの調査結果のデータを収集し、本報告書に次のような【成果物】として報告する。

（１）全体図の作成（1/500都市計画図に発掘調査地点の資料を記入）

【付図遠江国分寺周辺　遺構分布図（1/1000）】

（2）遠江国分寺関係文献およびデータの収集

【遠江国分寺周辺の主な発掘調査一覧】

【発掘調査遺構図集成】

【参考文献一覧】

【写真図版】

なお、全国の国分僧寺・国分尼寺関係文献の収集については、入手し難いものが多く短期間でもあり満足に収集できなかったが、伽藍配置のわかる遺構図について集成を行い、遠江国分寺の検討を実施する上での参考資料として活用した。

塔跡の現状

塔心礎

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　今までの調査

はじめに（調査の方法）

遠江国分寺跡は、静岡県磐田市見付字境松（通称は中央町）に所在している。大正12年（1923年）、旧内務省から史跡として指定を受け、昭和26年（1951年）９月には、石田茂作氏らを中心に、全国に先駆けて国分寺の発掘調査が行われた（第１次調査）。この調査はトレンチによるものであったが、塔・金堂・講堂・回廊・中門・南大門・土塁などの伽藍配置が確認され、その寺域は100間（180ｍ）四方と推定された（文献④）。第１次調査は都市計画による道路建設を契機として行われたものであったが、この調査結果に基づいて計画は変更され、翌昭和27年（1952年）には国の特別史跡の指定を受けた。現在その大部分は史跡公園となり、磐田市教育委員会によって管理されている。

一方、従来国府台遺跡と呼ばれてきたところは、遠江国分寺の北方に接する磐田市国府台（本町）に所在する。昭和30年代半ばの区画整理中に瓦等の遺物が多量に出土し、昭和39年（1964年）と昭和40年（1965年）にトレンチによる発掘調査が行われた（第２次調査）。この調査では「基壇状の遺構」を４か所で検出したとされ、出土した瓦から奈良時代から平安時代にかけての遺跡であることが判明した（文献③）。（当時、この遺跡を国府とする説があり、「国府台（こうのだい）」という地名はそれにちなんで区画整理地に付けられた名称である。）

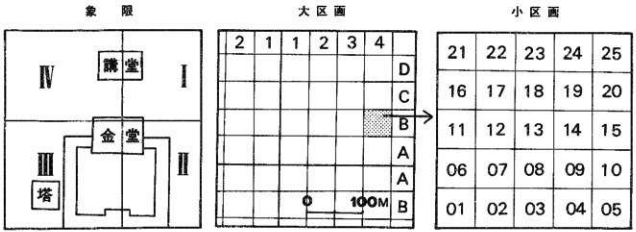
その後、第２次調査の一部にあたる地点を再調査した平成元年（1989年）の第57次調査では、布掘り遺構を持つ基壇跡が検出されている（文献㊾）。そして、そのすぐ南側で行われた平成４年（1992年）の第99次調査では、やはり布掘り遺構をもち、散築や掘り込み地業が施された基壇跡が確認された（文献㊿）。この地域は字名を「尼寺」ということから、これらの遺構は、遠江国分尼寺の講堂跡や金堂跡と考えられている。

このほか、昭和58年（1983年）に実施された県立磐田南高校の同窓会館建設にともなう第５次調査では大型の掘立柱建物跡が検出され、国分寺の寺域（伽藍地）の再考を促す契機となった（文献⑬）。このように遠江国分寺の周辺には、国分寺に関連する遺構が広く分布している。また、一方で遺跡の周辺は市街地であり、住宅の新築や増改築などにより、開発が進んでいる。このため、磐田市教育委員会では、その遺跡確認と範囲・内容を明らかにすることを目的に、昭和58年度から主に国庫補助事業で発掘調査を実施している。その対象は遺構検出面が現地表面下20～40㎝程度のところが多いことから、個人住宅も本調査の対象としている。その成果についてはすでに調査報告書が刊行されている（付編１を参照）。

調査区画と座標軸

遠江国分寺跡の特別史跡の指定範囲は東西105ｍ、南北156ｍある。寺域（伽藍地）は従来100間（約180ｍ）四方と考えられてきたが、最近ではその外側からも関連の遺構が検出されている。また北側には国分尼寺が存在している。このため検出遺構の位置関係を明確にするため、昭和59年度に国庫補助事業で公共座標を設置した。現在はこの座標軸にそって区画を設け、調査を行っている。

寺院の調査で座標軸を設定するにあたっては、伽藍配置（主軸）に則った方位で設定するのが本来である。しかし、遠江国分寺の場合は昭和26年の調査の後、翌27年に特別史跡の指定を受け、全容は明らかとはなっていない。そして、昭和43～45年度の環境整備事業で現在ある姿となっている。このため、現地でそれを知ることができないため、公共座標を用いている。

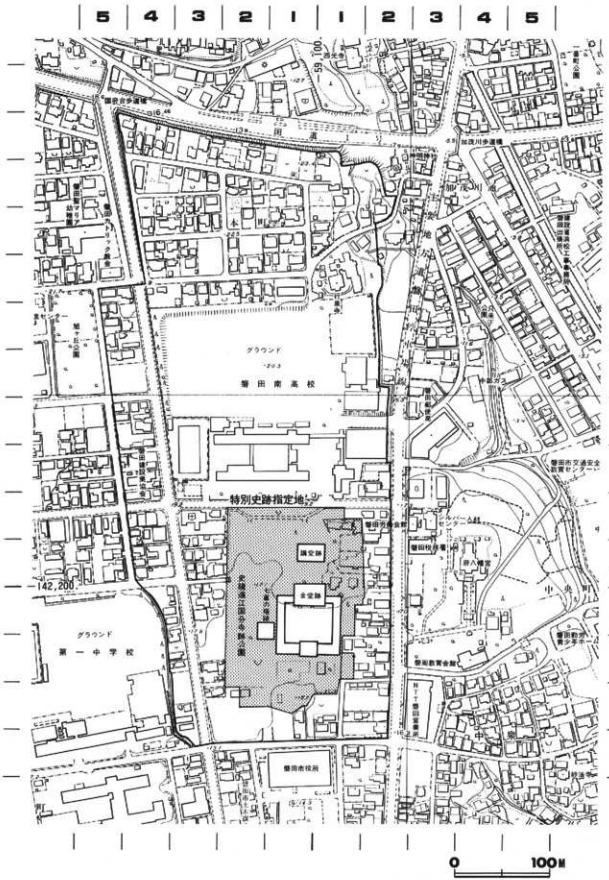


第4図　調査区画模式図

調査区画の基準は、金堂・講堂を南北に通るY＝－59,000.00 ラインと、金堂を東西に通るX＝－142,000.00ラインの交点を原点としている。これにより4分割した北東隅から時計回りにⅠ～Ⅳと大区分する（象限の設定）。次に、周辺域を50m四方の枡目で区切り、東西に1・2・3の算用数字を付し、南北にはA・B・Cとアルファベットの大文字を付して、1A・2Bなどという具合に表現される大区画を設定する。小区画は大区画の50m四方の区画をさらに10m単位に区画し、その南西隅を基準として01から番号を付ける。これでそれぞれ25の小区画が設定される。

以上のような、象限－大区画－小区画の枡目で周辺域を覆い、1－2A－06区、Ⅱ－3B－22区などのように表記する。

なお、国土座標を用いての調査は、昭和59年度の第9次調査からである。



第５図　特別史跡指定地の範囲と調査区画

（1）主要伽藍について（第1次調査）

当地には、古くから塔の礎石や土壇等が存在し、瓦類が散在することから、遠江国分寺跡（国分僧寺）と推定され、大正12年（1923年）3月3日付けで旧内務省から「史蹟」に指定された。戦後、都市計画による道路が計画されたことから昭和26年（1951年）9月に石田茂作氏が中心となり斎藤忠氏も加わって13日間の発掘調査が行われた（集成図1・2・3、文献④）。国分寺跡の発掘調査として、全国で最初のものであるという学史上の意義をもつ調査であった。13日間という短期間のトレンチ調査であり、「全寺域の徹底的な調査とはかけ離れたものであった。」（文献⑲）と述べられているように小規模な調査であった。この結果、主要建物跡等の調査により伽藍配置が確認され、昭和27年3月29日付けで、約25,000㎡の範囲が文化財保護委員会により国指定文化財の「特別史跡」として指定されるにいたった。昭和42年から3か年にわたる環境整備事業が行われ史跡公園となった。

第1次調査等により調査された主要伽藍の概要は、石田茂作『遠江国分寺の研究』1962年、斎藤忠『特別史跡　遠江国分寺跡』『静岡県史　資料編2　考古二』1990年にくわしい、ここでは要点を引用させていただく。

主要遺構　第1次調査で調査対象となった遺構は、金堂・塔・講堂・中門・廻廊・南大門・土塁である。講堂、金堂、中門、南大門が南北の主軸線上に配置され、金堂と中門を廻廊でつないでいる。塔は西側に1基あり、この伽藍配置は、東大寺式あるいは金光明寺式とされる。なお土塁は塔の西側にあり、寺域の西限とされた。

金堂跡　基壇は、粘土積層であり、間口112尺（33.9m）奥行き71尺（21.5m）高さ約3尺（0.9m）の規模と確認された。南縁正面の中央に右段があり、全体の幅15尺（約4.5m）奥行き8尺5寸（2.58m）である。右段は現状では三段検出された。各段の高さは4寸（12cm）、根込み幅は1尺2寸（約36cm）ぐらいであり、8尺5寸÷1尺2寸＝7.08≒7とし、復元すると本来は七段。4寸×七段＝28寸≒3尺ということで、基壇の復元高さは3尺という計算がなされた。礎石は原位置を動いていたが4個ほど確認され、根固めの栗石によって、間口7間×奥行4間の柱間と考えられた。東西約27.9m（10尺＋14尺＋14尺＋16尺＋14尺＋14尺＋10尺）×南北約15.76m（10尺＋16尺＋16尺＋10尺）。

塔跡　伽藍中軸線より西へ28間＝168尺（約50m）のところに塔心礎が存在する。1辺50尺（約15.15m）の正方形の基壇が確認され、塔心礎と南東隅の礎石1点が残存し、調査で根石1か所が検出された。塔心礎は東西長7尺（約2.12m）、南北約6尺（約1.8m）の不整形を呈するもので、上面に直径5尺6寸（1.7m）、高さ約3寸（9cm）の円形柱座を造り出したもので、柱座の中央に径1尺7寸（約51.5cm）ぐらいの円形の出枘が造り出されている。いわゆる出枘式心礎の好例とされている。建物は32尺（9.7m）四方（10尺＋12尺＋10尺）で高さ224尺（約68m）の七重の塔であったと推定されている。

講堂跡　金堂の基壇北辺から北へ79尺（約24m）で、講堂の南縁に達する。基壇は粘土積層が認められ、間口98尺（約29.7m）奥行61尺（約18.5m）で、基壇上面の調査はしていないので建物の規模は明らかでない。なお、金堂・講堂は石田茂作氏により黄金分割の規法によったものと考えられた。

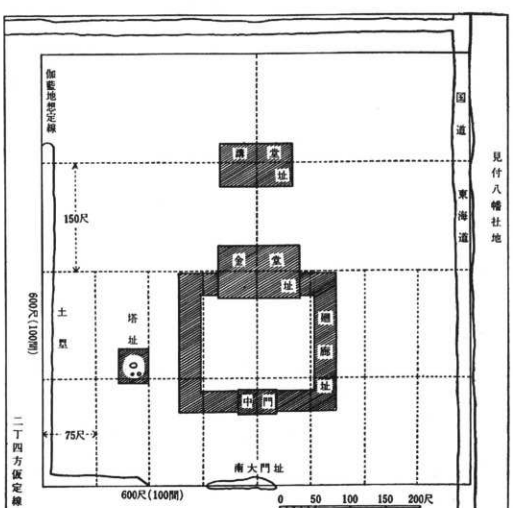
中門跡　金堂中心から南に掘ったトレンチで、155尺（約47m）から162尺（49m）のところに瓦の堆積層がみとめられ、その南が粘土と砂の互層となり、198尺（60m）の地点から瓦の堆積層となり、中門跡の基壇と推定された。瓦の堆積や廻廊との関係から、間口55尺程度（約16.7m）奥行36尺（約10.9m）の基壇と推定された。

廻廊　昭和26年の発掘前には、「国分寺跡には廻廊はなく、したがって中門もない」という考えが定説的であったが、この発掘で初めて西側の廻廊跡が明かにされ、その後の国分寺跡研究に刺戟をもたらした。金堂跡に接する西の廻廊跡で礎石2基と根固め栗石10か所が検出され、10尺2間の複廊とされた。基壇は粘土と砂の互層で、26尺（約7.9m）の幅をなして金堂から派出し中門に接続している。

南大門跡　中門跡中心から南に116尺（約35m）のあたり、金堂跡中心から南292尺（約88.5m）付近に芝地があり、周辺に瓦が散布し、そこから南は急に土地が下がっている。南大門跡と考えられたが、規模等は明らかでない。

土塁跡（築地跡？）　塔の心礎から西22間＝132尺（約40m）に、幅8尺（約2.4mぐらいの土塁の跡がある。南北に延びているもので特別史跡指定地の西境界線とされている。旧地籍図によると、北にものびていたことが考えられる。なお、新たな調査により、その西側に瓦を大量に含む堀があり、また建物跡なども検出されている。

寺域の問題　主要伽藍の配置や西に残る土塁跡等により、一応推定されている。石田茂作氏は『遠江国分寺の研究』で、西にある土塁は、北は磐田南高校の南の辺に沿って東に曲り南は南大門の見透し線で東に曲り、また金堂中心から南大門は50間＝300尺（90.9m）、北も50間、西も50間あり、東は東海道路心まで50間と算定し、100間四方すなわち600尺（181.8m）四方となした。そして、南北に4等分され、その中心に金堂があり、整然とした配置を示しているとなした。「この発表は、その後遠江国分寺寺域の定説として現在に至ったが、寺域の地域の発掘はなされず、金堂が中心という考えにもとづき、西の土塁等を根拠として考定したものであり、必ずしも正鵠を射ているといわれない。」（参考文献⑲）といわれ、寺域の見直しが検討されつつある。今回の調査により、本報告書の中でとりまとめられることとなる。



第6図　遠江国分寺復元図

(2)伽藍地区画施設について

遠江国分寺の寺域は、昭和26年の発掘調査の報告の中で、2町四方の寺地を選定し、その内側に600尺四方の伽藍地が設定されたと述べられている（文献④）。その根拠として、伽藍配置からみた地割りが指摘されている。この時、西側、北側及び南側の地境の指標となったのが土塁であった。「尚、此の土塁は、もと北は高等学校南の道に沿って東に曲り、南は南大門の見通し線で東へ曲ったらしく、今も南は、畦畔沿に断続して芝生が残り、北は宅地にはなっているが、その不自然な地境は、往時の土塁址を思わせるものがある。」と述べられているように、東辺を除く3辺に土塁が存在した状況が、昭和20年代まで確認できたようである。

しかし西側の土塁については、昭和13年に鴇田忠正によって書かれた「遠江国分寺」に注目される記載がある（文献③）。少し長くなるが引用すると、「土塁の北限、南限を見るに、北側にあつては半島より半米、平地より1米高く更に北に延びて巾2米、長さ40米の土塁の存するを見、その延長は現在見付中学校の敷地に続き約90米の長さを有して居たものと云われ、－中略－されば寺域の西限を限る一線は、その西南隅を基点として、略々長さ270米、巾3米、高さ1米の表面平坦な土塁が南北に縦走して居た事になる。」とあり、南辺の推定150mとともに、寺域を東西150m、南北270mの長方形の土塁で廻らしていたと述べられている。また、この部分だけ作物の成育が悪いことから、「柴垣も土塁にあらざるかの学的興味極めて深きものあるを覚ゆる」と結んでいる。

表面的観察という制限もあったが、その形状から伽藍地の区画は土塁と考えられていた。しかし、昭和55年に株式会社大林組によって復元された際には、土塁周辺から瓦が出土していないこと、官立の寺院であること、他の堂塔とのバランスなどの要因から判断されて、木板葺きの築地塀として復元された（文献⑦）。

昭和59年に土塁西側の地点で発掘調査した第9次発掘調査では、初めて土塁に接する部分での発掘調査であったばかりでなく、一部指定地である土塁の断ち割りも行っている（文献⑨）。まず、土塁西側には幅4m前後の溝が土塁に平行して掘られている。瓦を多量に含む土坑と重複することから、形状は不明な部分が多いが、深さ50cm前後を測り、底面には重層して瓦が堆積していた。特に調査区中央では完形の平瓦や丸瓦を含んだ、大量の瓦が出土している。瓦は上下2層に分離して出土しているが、概して下層のものは破片が多く、上層では大形品が目立つ。下層の瓦も溝底面からは若干浮いた状態で出土しており、ある程度溝が埋没した後に堆積したのであるか、あるいは瓦を伴わない溝が下層に存在し、掘り直しが行われた可能性も考えられる。

溝が埋没した後には、多量の瓦を伴う大形土坑が開削されている。この瓦の中には、磐田市寺谷で発掘調査された瓦窯の製品（文献⑥）も含まれていることから、この土坑の開削時期は平安時代と考えられる。

平成元年度には、第9次調査地点の北90m地点で第60次発掘調査が行われた（文献⑩）。ここでも土塁に平行する南北の溝が2条検出された。2条の溝には新旧関係がみられ、溝底中央部がやや東西にずれるが、古いSD2を掘り返すようにSD1が設けられている。SD1の規模は、検出面での幅3.1m、深さ75～95cmを測り、急峻な立ち上がりを示す。SD1からは多量の瓦が出土している。瓦は溝の底面に接して出土するものは少なく、また中位に希薄となる間層を挟んで出土している（図版18上）。伴出遺物から、上位の堆積時期が平安時代後期から末期にかけて、下位の堆積時期が平安時代中期と考えられている。積極的根拠ではないが、SD2は奈良時代から平安時代前期にかけてのものと考えられようか。溝内における瓦の包含状況から、SD2の段階では築地塀に瓦が用いられていなかったと考えられようか。

なお、第9次調査地点と第60次調査地点の中間に位置する第43次調査地点においても、削平が深くま

でおよび状況としては良好ではなかったが、２条の溝下底部が検出されている（文献㉔）。

次に、東側の状況であるが、現在までのところ良好な調査例はない。昭和58年第６次調査地点において、幅0.7ｍと非常に狭い範囲であったが、形状から南北に延びる溝と推定される落ち込みが検出されている（文献㉙）。検出面での溝幅2.9ｍ、深さ0.6ｍを測り、西側に犬走り状の平坦面がみられる。形状は西側で検出している溝のものとは異なる。少量の瓦が出土している。かつて寺域の東側を限る溝とも考えたが、伽藍中軸線からの距離が75ｍと西側溝より15ｍ近いこと、調査面積が狭く全体の形状が不明瞭な部分があること、また、周辺地における下水道管埋設工事において、同じような溝が検出されていないことなどから、疑問視もされている。

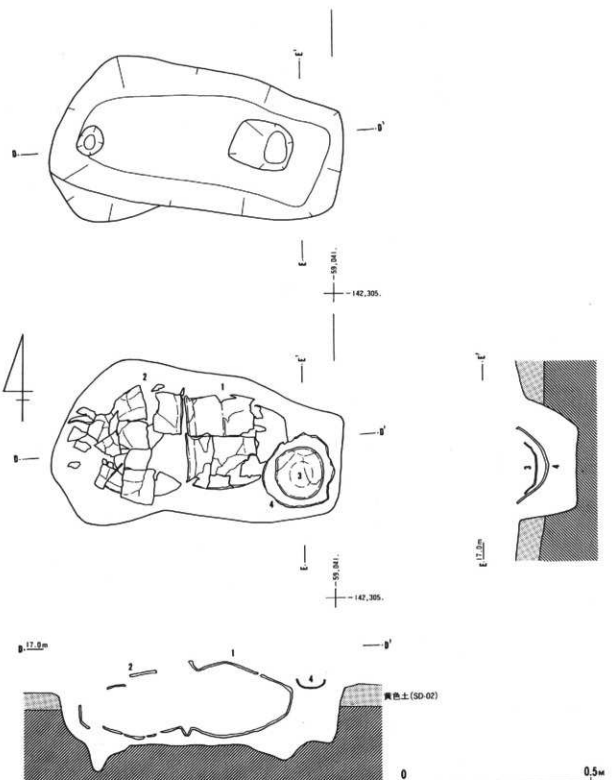
北側の状況は、昭和63年に実施された第51次調査において、伽藍中軸線に直交するように東西方向の溝が確認されている（文献㉝）。金堂の中心から約146～150ｍを測る。溝は３条確認されており、約３ｍの間隔をおいて、北に１条、南に２条あり、うち南２条は重複する。南側の古段階の溝から奈良時代の須恵器・土師器と10世紀代の灰釉陶器が出土し、北側の溝からは奈良時代の土師器と12世紀代の山茶碗の小碗が出土している。ここで注目されることは、幅約２ｍの間隔をおいて溝が平行していることである。西側では寺域外側の溝に重複関係がみられ、第51次調査地点では寺域内側の溝に重複関係がみられるという異なった状況を示すが、溝のあり方には共通性がみられる。溝と土坑が重複するが、土坑の方が先行する。この状況は、西側での溝と土坑との関係とは異なる。

南側の状況は、平成６年に行われた第104次調査において溝が検出されている（文献㊱）。溝は２条が検出されており、掘り直しが確認されている。ここで興味ある遺構が検出されている。古段階の溝が埋没した時点で、土師器の甕２個体が合わせ口の状態で横位に置かれ、その傍らに土師器の坏を埋納した土師器の甕が正置の状態で出土した土坑である（第７図）。平城京や多賀城の調査で同様の遺構が検出されており、地鎮に伴う遺構と考えられている（文献㊲）。本例は、奈良時代に溝の掘り直しが行われ、その際に執り行われた祭祀であろうと、報告されている（文献㊱）。

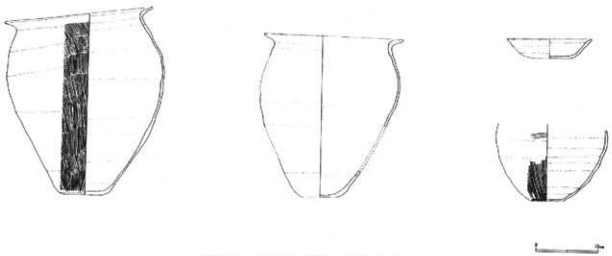
ここで伽藍地を限る施設について、まとめてみよう。発掘調査によって確認されている遺構には、伽藍地を限る４辺で検出されている溝と、西側の現土塁下部の版築状遺構、北辺の２条の溝に挟まれた空白部がある。このことから伽藍地は溝によって囲繞されていたことは明らかである。調査例の多い西辺の状況から考えられることは、溝は掘り直しが行われており、初期の溝がある程度埋没した段階で瓦が堆積したことになる。瓦は大半が平瓦と丸瓦で構成されるが、少量の軒瓦も含まれている。なお、溝の最上層からは、13世紀代の山茶碗が出土している。しかし、瓦が多量に出土するのは西辺での状況であり、他の３辺では出土量は顕著ではない。

次に土塁下部の状況であるが、土塁は現状で幅3.25ｍ、高さ伽藍地寄りで1.4ｍを測り、頂部は平坦面をなす。土塁を断ち割った土層観察によると、地山を削り出した後基底幅3.2ｍ、上面幅2.6ｍの断面台形状の基壇を地山上を主体に築き、その上に1.8ｍの厚さで盛土が行われている（第９図）。盛土の両サイド基壇面には内側で35㎝、外側で45㎝の平坦部が形成されている。盛土は黄褐色系の土と黒色系の土を交互に積み重ねられており、版築状をなす。残存部での高さは55㎝を測る。寄柱痕など築地塀に付属した遺構は検出されていないが、断面形から築地塀であった可能性は充分考えられよう。基壇内側寄りで溝が確認されているが、掘削時期については不明である。

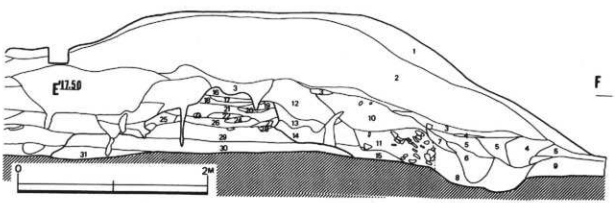
第51次調査地点で検出された、２条の溝によって挟まれた幅約２ｍの空白部の存在であるが、規模に相違はみられるものの、築地塀の基壇跡とは考えられないだろうか。北側に尼寺の存在を考えた場合、僧尼令の規定から北側にある程度しっかりした遮へい物を設置する必要があったものと考えたい。



第７図　土器埋設遺構実測図



第８図　土器埋設遺構出土土器実測図



1．表土層
2．小礫混りの黄褐土、暗褐土の盛土
3．暗灰色粘土
4．埋土、ふわふわの黒土で礫も含む
5．３層に類似するが粘土質が弱い
6．暗褐色土、やわらかい
7．暗褐色土、青灰色粘土を含む
8．暗褐色土
9．暗色土、地山ブロックを含む
10．14層と同類、黒ボク粒子は少なく、しまりない
11．淡暗褐色土、少量の黒ボク粒子を含む、しまりあり
12．14層と同一
13．淡暗褐色土、地山粒子炭化物を少量含む
14．淡黒褐色土、少量の地山粒子と黒ボクブロックを含む
15．11層と同類、よりしまりがあり炭化物、酸化鉄を少量含む
16．暗黄褐色土、黒ボク粒子白色粒子を含む
17．黒ボク土、地山ブロック粒子を含む
18．淡黒黄褐色土、地山ブロックを多量に含む
19．黒ボクと地山ブロックの混合
20．地山ブロックと黄褐色土粒子
21．暗黄褐色土、地山ブロック、黒ボク粒子を含む
22．暗黄褐色土、地山ブロックを多く含む
23．暗黄褐色土
24．黒ボク土、少量の地山粒子を含む
25．暗黄褐色土、地山ブロックを多く含む
26．黄褐色土、少量の黒ボク粒子を含む
27．黒ボク土
28．茶褐色土
29．淡黒黄褐色土、ベースは暗褐色土にて、地山ブロックと黒ボクブロックを含む
30．白黄褐色土、地山ブロック、酸化鉄を多く含む
31．白黄褐色土、粒子細かく酸化鉄少ない

第９図　土壌断面実測図

(3)伽藍地北東部建物群について

伽藍地の中で東半部は、早くから住宅地として利用されてきたことから、指定地の境界は複雑な形状をなしている。このような状況から、伽藍地内にはいくつかの民家が存在する。これら民家の新・改築に伴う発掘調査も回数を重ねてきている。これらの小規模な発掘調査によって得られた所見から、伽藍地北東部における掘立柱建物遺構についてまとめることとする。

この部分で最初に検出された建物遺構は、昭和58年に実施した第5次調査によるものであった（文献⑬）。結果的に、この建物遺構の検出は、その後の伽藍地見直しの契機となるものであった。掘立柱建物遺構は、国分寺講堂北辺から北に65mを測る。また、掘立柱建物遺構の西辺は、伽藍中軸線から東に45mを測る。掘立柱建物遺構は南北に柱穴が8か所並び、北へは柱間寸法から考えると延長しないが、南へは調査区外へ広がる可能性がある。東西には柱穴が3か所並ぶが、東辺の側柱穴が検出されていないことから、東へ延長することは確実である。柱穴の掘方は隅丸長方形を呈するが、内部構造から少なくとも2回の建て替えが行われたようである。13基確認された柱穴のうち、1基からは長軸75cm、短軸50cm、厚さ10cmの偏平な砂岩を利用した礎石が検出され、1基からは軒平瓦が礎石替わりに用いられた状態で検出されている。また、柱痕の根固めとして用いられた瓦ないしは礫が出土した柱穴もある（図版9）。

礎石を伴う柱穴は、検出された柱穴群の中では南西隅に当たる。平面形は方形に近く、二段に掘り込まれ、深さは60cmを測るが、下部の大半には礫を含まず土が充填されるが、二段掘りの上部には多くの礫が栗石状に詰められ、その上部に砂岩の礎石が置かれている。柱穴の掘方内の構造から、礎石は新しい段階で設置されたものと思われる。

次に根固め用と考えられる瓦及び礫の出土であるが、検出された5例すべてが新しい柱痕に伴うものであった。特に5例の柱穴の配列に規則性はみられない。出土した瓦から年代を特定しうる資料は出土していない。しかし、軒平瓦が礎石替わりに用いられた柱穴では、軒平瓦の一部を掘り込むように柱痕が設けられていたことから、軒平瓦を用いた柱痕は古段階のものと考えられる。この軒平瓦は中央の「コ」の字文様を挟んで左右にそれぞれ5個の「S」字文が右偏行で施されるものであり、国府台地内も含めた広い範囲から不偏的に出土するものである（第10図1）。平野吾郎氏は、「主要伽藍の建設に次いで周辺の建物を含め伽藍が整備されるのに伴って使用された」時期のものと考えられている（文献⑭）。まさにこの時期に建設された建物と考えられよう。従って、根固め用の瓦が用いられた柱痕は、それよりも後の建て替えということになる。

また、調査区の南西部でも南北に3か所の落ち込みが検出されているが、平面形に規則性がなく、柱穴とは認めがたい。

ここからは2点の墨書土器が出土している（第10図2・3）。うち1点には文字が半分欠けているが、「金寺」と書かれている。まさに国分僧寺の正式名称である「金光明四天王護国之寺」の頭字と末字を書いたものであり、この地点が僧寺の一角であることを証明するものである。

柱穴内からは、量的には限られるが須恵器の坏や折戸53号窯式期の灰釉陶器碗が出土している。

第44次調査地点と第101次調査地点は隣接する場所で、第5次調査地点の南東方向にあたる（文献⑮）。ここでは東西4間以上、南北1間以上の南に廂を有する建物跡が確認されている。柱間は東西で4.5m、南北で2.5mと幅広であるが、柱間には規則性がみられる。建物本体柱穴の掘方は平面隅丸方形を呈するものが多く、中には平瓦を主体的に用いた根固めが検出されている。これに対して、廂部分の柱穴は平面形が不整円形を呈するものが多く、深さも建物本体柱穴に比べて概して浅い。一部の柱穴から根固め瓦が出土していることから、第5次調査地点の建物跡と比較すると、新段階に平行する時期のものと考えられようか（第11図）。

柱穴内からは、須恵器片や黒笹90号窯式期、折戸53号窯式期の灰釉陶器が出土しているが、直接建物

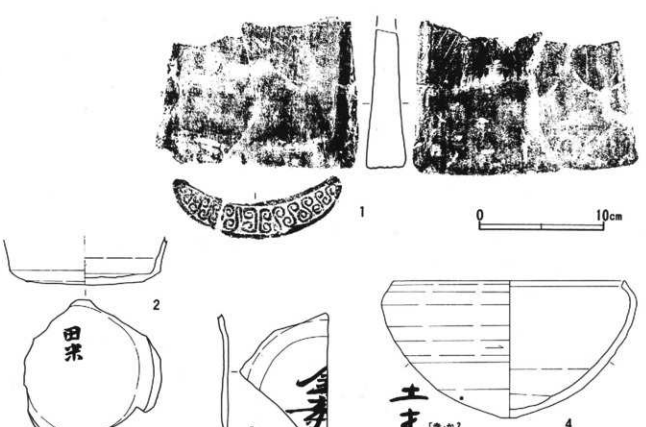
の時期を表す資料は出土していない。

他の柱穴との組み合わせは捉えられていないが、1つの柱穴内から隅木蓋瓦が出土している(第13図)。遠江国分寺跡からは初めての出土例である。また、周辺には規模は一回り小さくなるが、平面円形を呈した多くの柱穴が検出されている。

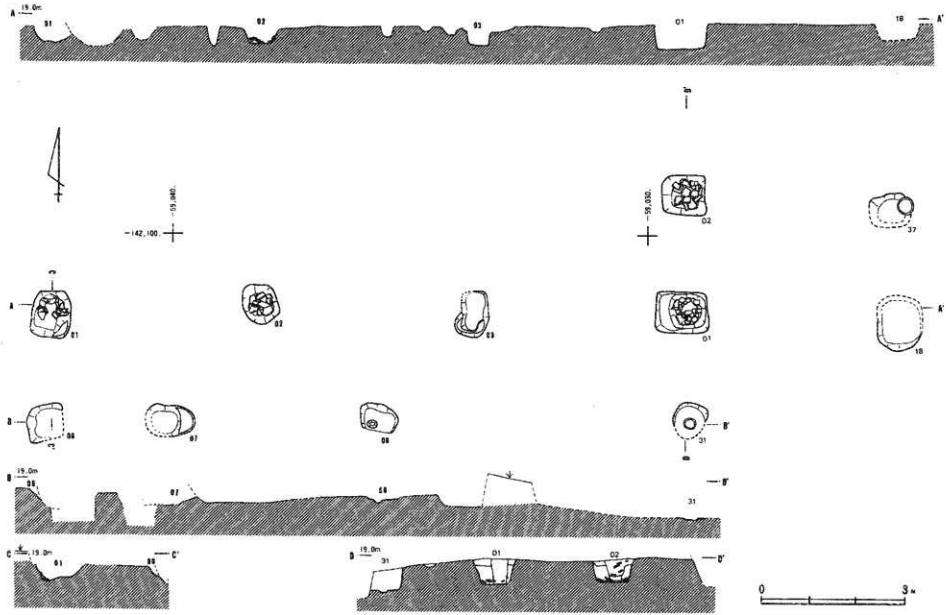
昭和62年に発掘調査した、第36次・第38次調査地点は講堂の東北東50m地点に位置する（文献㉝)。いずれも個人住宅の新築に伴う発掘調査のため、面積的には限られた範囲であったが、柱穴と思われる多くの小穴群とともに、1棟の掘立柱建物跡が確認されている。建物は東側で調査区外へ広がることから、東西についての規模は不明であるが、南北は3間であったものと考えられる。柱穴は東西4か所、南北は未調査区の存在から3か所が確認されているが、東柱および廂の存在は確認されていない。柱間は東西で2.3～2.4mを測り、南北は2.9mの間隔を測る。柱穴の1か所からは、栗石が検出されている。なお、柱穴の南北ラインは、伽藍中軸線に平行する（集成図10)。

柱穴内からは、須恵器片や黒笹90号窯式期の灰釉陶器が出土しているが、直接建物の時期を表す資料は出土していない。なお、同調査地点土坑内から、「寺」と判読できる墨書土器が出土している（第10図4)。

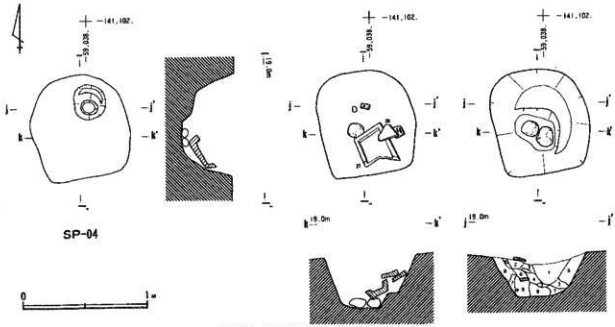
以上概観してきたように、伽藍北東部からは多くの柱穴が検出されているが、柱穴の組み合わせが捉えられ、建物として確認されたものは3棟である。いずれも調査区外へ建物が広がることから、建物の規模については不明な部分が多い。しかし、第5次調査で確認された1棟は、建物の規模や柱穴の掘方が他の2棟に比べて大きく、また建物の西辺が伽藍地の東西を四分割したライン上に一致することから、主要伽藍と密接な関係にあった建物と考えられよう。



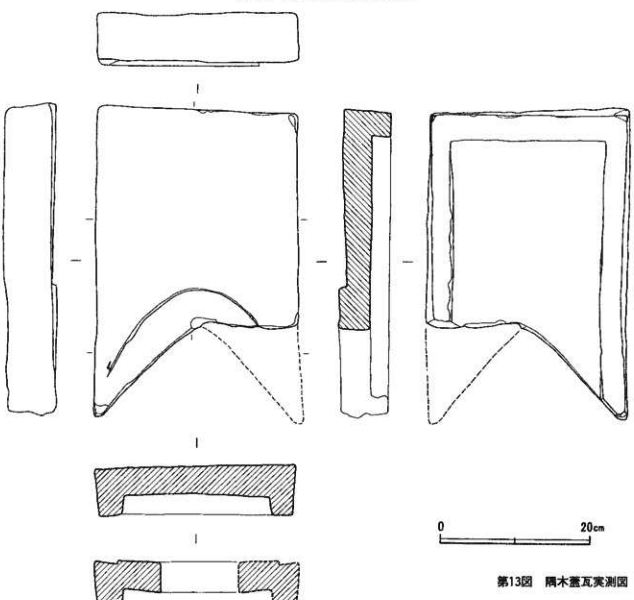
第10図　出土遺物実測図



第11図　掘立柱建物遺構実測図



第12図　隅木蓋瓦出土柱穴実測図



第13図　隅木蓋瓦実測図

（4）伽藍地外西側部分の遺構について

昭和63年、磐田南高等学校のプール改築に伴い、国分寺伽藍の北西部分が発掘調査された（第52次調査　文献㊳）。その結果、南北に走る溝状遺構と掘立柱建物跡及び柵列が検出され、伽藍の外側部分の遺構のあり方に注目が集まった。第52次調査で検出された溝状遺構は、国分寺の想定中軸線から西へ約145mの位置を平行する形で南北に延びている。その大半が後世の道路側溝や配水管敷設等により撹乱されているが、その残された部分を見ると、幅2.5m前後、検出面からの深さ50～60cmを測る。底面は平坦に近い形を呈している。覆土は上層が黄褐色粒子や砂を含む茶褐色土であり、下層が少し粘性のある暗褐色土である。遺物としては、瓦・土師器・須恵器・土師質土器など出土しているが、少量であるため遺構の年代についてははっきりしないものの平安時代頃かと考えられる。この溝状遺構は、国分寺の中軸線とほぼ平行しており、その時期などからみて国分寺に関連するものと思われるが、伽藍の西辺と考えられていた土塁より約50m西に存在する。調査の時点では国分寺の寺域？を区画する溝ではないかと考えた。この溝の南の延長上約160m程の所に昭和62年の第40次調査で溝状遺構が検出されている（文献㊴）。調査区内でその北端が認められ、南の調査区外に延びている。検出面での幅2.6～2.9m、底面の幅1.4～1.8mで、立ち上がりは西が急峻、東側はやや緩やかである。覆土の状況を見ると初期の段階での西側からの流れ込みが認められる。時期的には出土遺物の状況などから平安時代中期まで遡る可能性もあり、国分寺との関連性が指摘されている。この第40次調査部分で一旦途切れるものの、第52次調査の南北に延びる溝状遺構と同様の性格を持つものと考えられる。

第52次調査では、大型の掘立柱建物跡が検出されている。その位置は伽藍地の外、北西部分にあたるがその西辺は先述の南北に延びる溝状遺構より18m程東へいった所に位置する。磐田南高校の旧プールの造成によりその西側3分の1程が壊され、また東側の一部が未調査ではあるが、桁行9間×梁間3間（推定21.6m×6.6m）で、北と南にそれぞれ1間（2.4m）の廂をもった建物と想定した。柱掘方は80～130cm×80～140cmの規模の方形のプランを持ち、それぞれに径25～30cmの柱痕が確認されている。完掘した掘方について見てみると、深さは検出面より60～80cmを測るが、柱を据えたと思われる部分には礎板・瓦・石などの類は検出されなかった。検出された掘方の位置関係から見て南および北側に廂を持つ二面廂の建物を想定したが、さらに東西にも廂を持つ四面廂の建物である可能性も否定できない。建物の主軸方向はN－89°－Eの東西棟であるが、その方向は国分寺の中軸線方向とほぼ直交しており、国分寺と関連する建物であることは間違いないと考えられる。時期を推定する手がかりとなる遺物はほとんど出土していないが、周辺にまったく瓦がみられず、また柱掘方内に石や瓦を入れていないなど古い様相が窺われる。また、廂付きの建物であるという点や廂部分をいれて東西9間（推定21.6m）×南北5間（11.4m）という規模の点においても、それまで発見されている掘立柱建物跡とは異なる様相を示している。時期的には国分寺の創建以前に遡る可能性も指摘されており、あるいは国分寺の前身的な性格を持つものではないかとも考えられる。

なお、この掘立柱建物跡の中心を南北に横切る形の柵列が検出されている。平面的に重複する形となるが、直接切りあう部分はなくその新旧関係ははっきりとしない。しかしながら、その柱穴の埋土の状況などをみると、柵列のほうが新しい感じを受ける。この柵列の柱穴は径25～30cmのものであり、検出面からの深さは5～13cmを測る。柱穴はほぼ1.9～2.0mの間隔で一直線に並んでおり、その方向はN－0.5°－Wとほぼ国分寺の中軸線と平行している。南側は調査区外へ、北側が撹乱によりその全容がはっきりしないものの国分寺に関連するものと考えてもよいだろう。

このように、伽藍地の外の状況の一端が次第に明らかにされており、国分寺の寺域の問題について再検討する必要が生じるとともに、国分寺の変遷―特に遺構の変遷―について、創建期以前の状況を含め明らかにしていく必要が迫られている。

（5）国分尼寺周辺遺構について

国分寺跡の北側周辺には、「尼寺」という小字がみられる。古くから瓦が出土することでも知られていた。ここに初めて発掘調査が行われたのは昭和39年と40年であった。これは、昭和30年代に行われた区画整理事業の際に、多量の遺物が出土したことが契機であった。この調査で、4か所から溝を巡らした基壇状の遺構が検出された。東西に長辺をとった3棟の建物が南北に並び、その西に方形の基壇状遺構が配されるものであった。この時点では、建物の規模や配置から寺院跡とは考えられないことから、官衙遺跡であるという考え方が主体をしめ、地名も「国府台（こうのだい）」と名称が新たに付けられた。しかし基壇状遺構を巡らした溝は、後世の畑地地境をなす溝であったことが、その後の発掘調査あるいは地籍図などから近年確かめられている。

最近の一連の発掘調査によって、わずかずつではあるが国分尼寺に関連した遺構の分布や配置が明らかになりつつある。まず平成元年に調査した第57次調査地点では、方形に巡ると考えられる布掘り状遺構が、調査範囲にも限定されたこともあり「コ」の字状に検出された（文献⑲、集成図17下）。調査範囲内では東西14ｍ、南北17ｍを測る。布掘りは幅60～70㎝、深さ50㎝を測り、掘方は途中で平坦面をつくって内側が一段深くなる二段掘りされる。この内側の二段掘りされている所を中心に、径40～50㎝、深さ70㎝の円形を呈した小穴が、芯々で140㎝間隔で穿たれている。これらの状況は、愛知県三河国分寺塔跡で確認されている構造と同じもので、本遺構も木製基壇であった可能性が高い。なお南辺の柱穴列に沿って北側に径約20㎝の小ピットが穿たれており、これらは傾斜角70度をもって北に傾く。控え柱の存在も考えられようが、木製基壇との関係は不明である。

建物全体の規模はどのくらいであったのであろうか。まず本遺構は真北方向に直交して設けられている。これは国分僧寺の伽藍配置に共通するもので、僧寺と同じ設計のもとに建設されたと考えられよう。本調査区の約50㎝東に国分僧寺の中軸線延長ラインが通る。次に述べる金堂基壇の規模から類推すると、東西24ｍが布掘り状遺構の規模と考えられる。従って布掘り状遺構の規模は、東西24ｍ、南北17ｍを測ることとなる。全国の国分二寺における講堂基壇の桁行と梁間の寸法比較をすると、やや桁行寸法の比率が低くなる傾向にあるが、講堂基壇の範疇から逸脱するものではない。基壇規模から推定される建物の規模は、他の国分二寺における講堂の一般的な規模である桁行7間、梁間4間では少し狭いが、桁行5間、梁間4間であれば充分であろう。布掘り状遺構からは年代決定をしうる資料は出土していないが、周辺からは国分僧寺創建期の軒丸瓦や折戸53号窯式期新段階の灰釉陶器碗が出土している。

さて、第57次調査地点で検出された遺構を講堂基壇と考えた理由には、平成4年に行われた第99次調査地点から検出された遺構との関係から判断したものである。

第99次調査地点は、第57次調査地点に隣接した南側に位置する（文献⑳）。ここではフェンス工事部分だけの限られた面積における調査であったが、第57次調査で検出された布掘り状遺構と同様の遺構が検出された。規模は、その後の発掘調査成果を踏まえて考えると、南北22ｍ、東西推定34ｍとなる。この大きさは、国分僧寺金堂基壇と同じ大きさである。第57次調査地点検出の遺構とは、12ｍの間隔がある。基壇築成施設の共通性、配置、規模から第57次調査の講堂基壇に対して、金堂基壇と考えられる。この布掘り状遺構には、掘り込み地業が確認されており、その内側には版築層が広がる。僧寺も含めて版築層が確認されたのは本遺構だけである。なお、版築層内からは土器や瓦などの遺物が出土していないことから、版築遺構は建物創建時のものと考えられる。

第99次調査地点で確認された金堂跡の東側では昭和61年の第18次調査において、大型の川原石14個を一列に配した遺構が検出されている（文献㉑、第14図）。この石列は西面がそろえられており、主体となる遺構は東に展開するのであろうか。しかし、東側は自然地形によって傾斜が始まる地点でもあり、果して遺構が存在したのか疑問である。また、石列は真北に対して14度西に傾く。寺院に関連

する遺構がほぼ真北に対して、平行ないしは直交するものが多い中で、異質な存在である。右列の紹介に留めておきたい。

昭和61年の第21次調査地点は、国分僧寺伽藍地西側を限る溝の延長上に位置する（文献㉝）。ここにおいて南北方向の溝が検出されている。溝は幅約3.6m、深さ0.42mを測り、南北はそれぞれ調査区外へ延びるが長さ18m検出されている。溝の掘り直しは行われていないが、西側の掘削ラインが直線的であるのに対して、東側の掘削ラインは蛇行し、特に下場は複雑な形状をなす。遺物は瓦や土器が出土しているが、散漫な状態であり、国分僧寺伽藍地西側を限る溝のあり方とは異なる。鬼瓦片が出土しているが、これは国分僧寺出土のものと同一意匠である（第15図）。

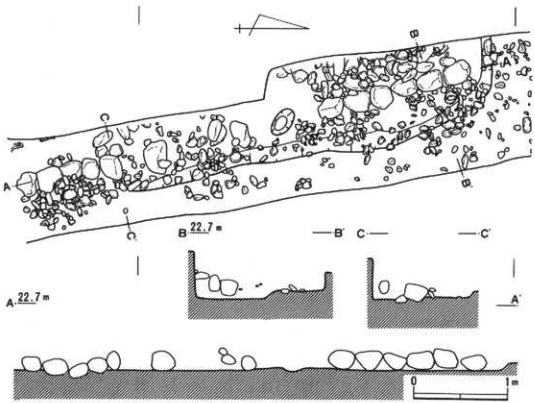
第21次調査地点より西側においても数回の発掘調査が行われているが、これまで寺院に関連したと思われる溝や建物跡などの遺構は検出されていない。また瓦などの出土量も激減することから、第21次調査地点検出の溝を、尼寺の西を限る施設と考えられよう。なお平成元年調査の第66次調査地点は、第21次調査地点の北東方向にあたるが、ここで南北方向の溝が検出されている（文献㊲）。幅2.7～3.1m、深さ0.55mを測り、直線的である。第21次調査地点での溝とは4.5mの間隔を有する。覆土下部から青磁片が出土しているが、掘方や覆土の状況から調査者は奈良時代の所産と考えている。2条1対で区画をなしていたのであろうか。

国分尼寺の西限は溝によって限られるが、東限は自然地形によって限られる。中軸線を中心に東半のスペースが狭小となる。主要伽藍の配置を企画する際に、地形的条件よりも国分僧寺との関係が強く意識されたのであろう。

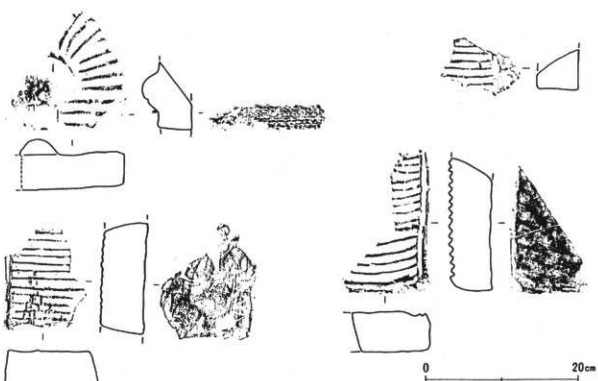
国分僧寺と同一中軸線を基準に展開された国分尼寺も、鎌倉時代になると寺院としての姿を変貌させていく。平成2年に実施した第72次・81次調査地点では、幅3m強、深さ1mを越える溝が検出されている（文献㊶）。覆土中には多量の礫が混入し、寺院に伴うと思われる溝に対して、規模が一回り大きくなる。瓦片とともに灰釉陶器や山茶碗が出土しており、13世紀初頭を中心とした時期のものである。この溝は一部で橋状の立ち上がりを示し、また他の調査所見を参考に考えると、1辺60mの正方形に巡ることが推定されている（第16図）。溝の形状から、排水機能を有した防御的色彩の強い「堀」的性格を考えることができる。中世における居館跡とも考えられよう。明治時代の地籍図においても、「堀」部分の区画は小さく矩形を呈しているのに対し、その内側は整然とした長方形区画をなし、地割りに相違のあることが認められる。

また、東側斜面地においても中世の堀割りが確認されており（文献㊹・㊷）、中世にいたって寺院とは異なった施設の営みによる土地利用が行われたことを示している。

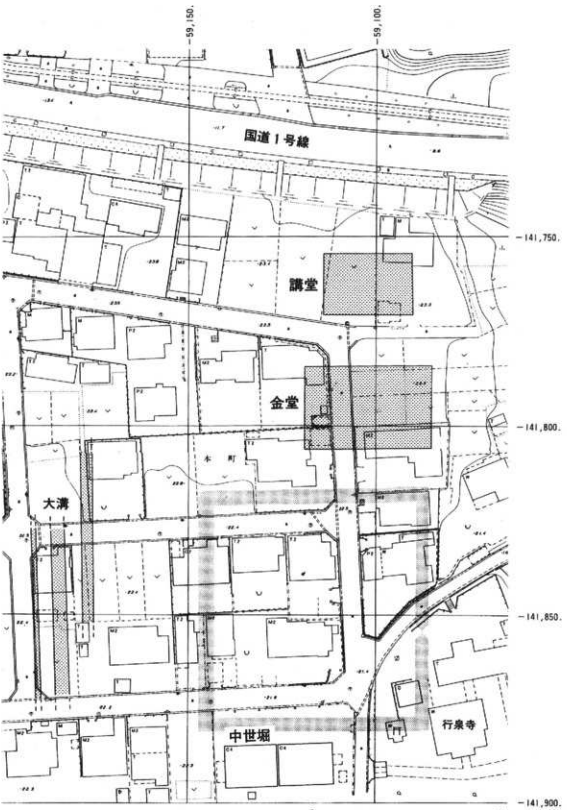
13世紀という時期は、国分僧寺伽藍地西側を限る溝が埋没した最後の時期とも符号するものであり、官営寺院としての機能停止時期は定かではないが、国分二寺は時期を同じくして終焉を迎え、少なくとも13世紀にはかつて国家の華として偉容を誇った面影も姿を消していったのである。



第14図　石列検出状態実測図



第15図　鬼瓦実測図



第16図　遠江国分尼寺跡遺構配置図

（6）主要遺物について

第1次調査から現在まで多数の遺物が出土している。その大半は瓦であるが、そのほかに墨書土器を含む土器類、塼・陶硯（風字二面硯）などの土製品、鉄釘・鉄金具などの鉄製品がある。

①瓦

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦などがある。僧寺と尼寺とではほとんど違いは見られないが、創建期の軒平瓦が尼寺では見られないことやごく一部それぞれの地域でしか出土しないものがある。なお、現在のところ文字瓦は確認されていない。

国分寺の瓦の生産は、一般的にはその近辺に窯を設けて生産するが、遠江の場合は今のところ付近では窯の存在は知られていない。ほとんどが大須賀町の清ケ谷古窯跡群で生産され、葺き替え用の瓦の一部が市内北部の寺谷にあった寺谷瓦窯で作られている。また、ごく一部は浜北市の東ノ谷窯と思われる製品がある。

A．軒丸瓦・軒平瓦

軒丸瓦は、石田茂作氏が「八葉素弁蓮花文鐙瓦」と呼んだものが大半で、軒平瓦は「S字文」が特徴的で、創建瓦の「均整蕨手唐草文」から系列的に変化している。軒平瓦は周縁が三日月形を呈し、その文様とともに他の国分寺には見られない独特のものとなっている（第17・18図）。

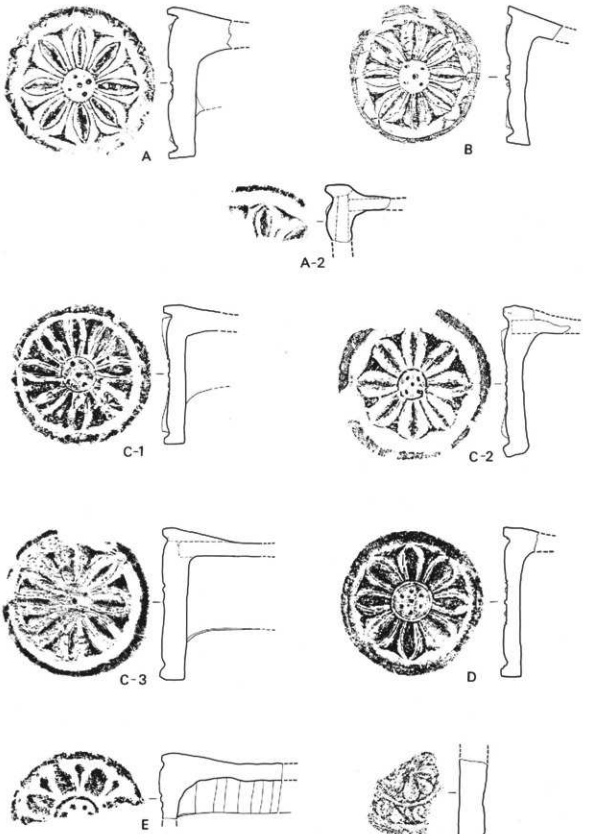
軒丸瓦・軒平瓦については、石田茂作氏や平野吾郎氏が分類を行っている。軒丸瓦は、蕨弁の太さ・輪郭縁の有無や太さ・間弁の形状・蓮子の数・中房の凹みや大きさ・周縁の鋸歯文の数などによって、軒平瓦は文様によって分類される。最も新しい平野氏による分類は、全体を次の4期に分けている（文献㉒、ただし第18図ではこの論文に含まれていないものも含んでいる。）

Ⅰ期　軒丸瓦・軒平瓦ともA類が創建瓦である。軒丸瓦A類は輪郭縁が太く肉厚で、中房がやや小さい。軒丸瓦D類は同A類に比べて蕨弁が丸みを持ち、中房が大きく、二重円圏を持って蓮子の数も7になる。D類もⅠ期に含まれるか、少なくともⅠ期に近い奈良時代のものとされる。軒平瓦ではA類が「均整蕨手唐草文」で、主に金堂跡周辺で出土しており他では出土量は少ない。軒平瓦B類はA類が変形したもので、A類の補修用の瓦とされる。

Ⅱ期　軒丸瓦はB・C類、軒平瓦はC～G類がⅡ期とされる。軒丸瓦B類は、同A類に比べて蕨弁や輪郭縁が細く、瓦当面の径も小さい。同C類は同B類と文様構成は同じであるが、瓦当面の径は同A類とほぼ同じである。このC類には瓦当面に笵木のキズが顕著に見られるものがあり、長期間使用された軒丸瓦と考えられている。軒丸瓦B・C類は次のⅢ期と共通し、現在のところⅡ期とⅢ期の区分はなされていない。軒平瓦C～G類は、いわゆる「S字文」と呼ばれる文様を持つものである。このうちC～F類の変化は時間的変化を示すものと考えられている。同D類は軒平瓦中最も出土例が多いものである。また、F類はそれまでの「S字文」が印刻されたもので、F－2類は文様の一部が欠失したものとなっている。軒平瓦G類は同D類ないしはE類の後に位置する可能性があり、次のH類としたものの直前に位置することも考えられる。

Ⅲ期　軒丸瓦はB・C類でⅡ期と区別されていない。軒平瓦はH～J類が該当する。「S字文」がさらに退化したもので、I類は弧状の文様となっている。

Ⅳ期　軒丸瓦はE・F類、軒平瓦はK～N類が該当する。この時期は軒丸瓦・軒平瓦ともそれまでのものとは文様系譜が異なるものとなる。軒丸瓦E類は蕨弁が丸くなり、間弁も丸みをもつ。また、丸瓦部分を粘土板からではなく粘土紐の巻き上げで作っている。軒平瓦は、K類が変形した重弧文、L類は蕨手状の唐草文、M類は唐草文を持つものである。M類は国分尼寺のみで出土する。軒丸瓦F類と軒平瓦N類は、築地西側の第43次調査で各1点ずつのみ出土しているもので、遠江国分寺の軒瓦の流れとはまったく異質な瓦当文様を持つものである。生産地も不明である。軒平瓦N類は、周縁が三日月形では



第17図　遠江国分寺・国分尼寺の軒丸瓦

第18図　遠江国分寺・国分尼寺の軒平瓦

なく方形を呈している。

B．丸瓦・平瓦

丸瓦は、ほとんどが玉縁式（有段式）で、側面は分割後未調整のものである。凸面の縄目はナデ消され凹面には布目が見られる。行基式（無段式）の出土量は少ないが、粘土紐巻き上げ成形のものも見られる。玉縁式で粘土紐巻き上げ成形のものも若干認められる。

平瓦は、粘土板素材で、ほとんどが1枚作りであり、凸面にLの縄目叩き痕、凹面には布目痕が見られる。一部に凸面の狭端部に横位の縄目叩きを施すものや狭端面や側面にも布目が残るものがある。このほかに凸面・凹面ともにナデ調整されるものが若干量認められる。第112次調査では凸面に格子目文様の叩きが施された瓦が出土している。桶巻作りのものは数点が確認されているのみで、凸面はナデ調整されている。

平瓦では、国分尼寺周辺のみで出土するものがある。凸面にRの縄目叩きが施されるものとカキメ状の粗い叩きが施されるものの2種類で、後者は軒平瓦M類の叩きと同じである。

C．鬼瓦

鬼瓦については、全体像がわかる出土例がなくいずれも小片である。絵柄構成はシンプルで、頬あるいは目と思われる半球形状の突起があり、周囲に弧線で髭が表現されている。市内中泉（石原町）の大宝院廃寺で遠江国分寺と同じ絵柄の鬼瓦が出土している。

D．隅木蓋瓦

隅木蓋瓦は、第104次調査地点で、掘立柱建物の柱穴の可能性がある土坑から1点出土している（第22図）。形態としては被蓋式（文献㉛）にあたる蓋形のもので、釘穴がなく文様は施されていない。内法の幅は19.1cmあり、この瓦がのっていた隅木の1辺が19cm近くあったことが推定できる。

②土器・墨書土器

土器は灰釉陶器が最も多く、須恵器・土師器がこれに続く。このほかに若干量であるが緑釉陶器・青磁が出土している。さらに中世の山茶碗等の陶器類がある。年代的には、国分僧寺では平安時代中期のものが多く、奈良時代後半から平安時代初頭のものも含まれる。これに対して国分尼寺では奈良時代のものはごく微量で、ほとんどが平安時代中期のものである。土器の形式では、灰釉陶器の折戸53号窯式期のものが多く、次の広久手C－3号窯式期のものがこれに続き、これ以降は少ない。灰釉陶器の生産地は瓦と同じく清ケ谷古窯跡群と思われるのものが多く、猿投窯の製品も少量であるが見られる。

墨書土器は現在10点ほどが知られている。国分僧寺では、国分僧寺の正式名称である金光明四天王護国之寺を示すといわれる「金寺」、講堂あるいは講師院（宮本敏一氏教示　文献㉜）を示すとされる「講院」（表面採集品）、ほかに「田米」「寺」「高」などがあり、第43次調査では梵字あるいは記号かと思われるものが出土している。国分尼寺では、役人の出勤日を示すといわれる「大上日（？）」がある。

③塼

塼は、国分僧寺では金堂跡や塔跡の周辺で、国分尼寺では金堂跡や講堂跡周辺などで出土している。いずれも無文で、土師質のものが多い。

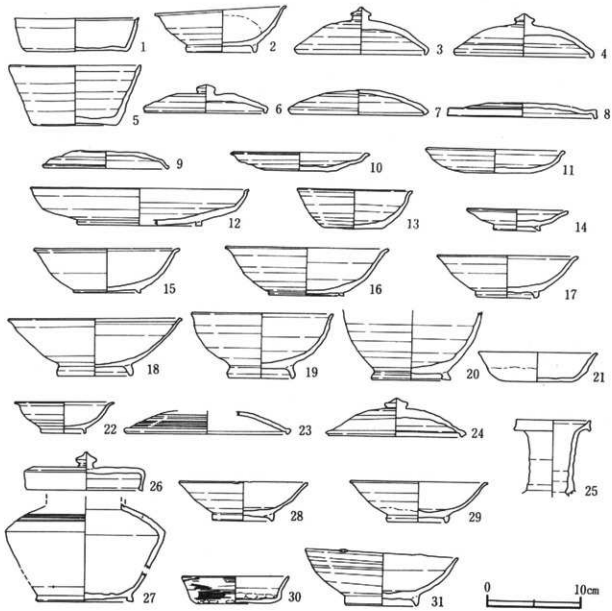
④陶硯

陶硯は、国分僧寺で風字二面硯の破片1点が表面採集されている。須恵質で灰色を呈する。

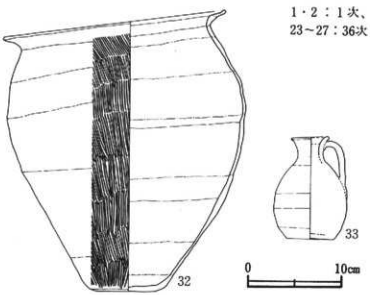
⑤鉄製品（鉄釘・鉄金具）

鉄釘は、国分僧寺・国分尼寺で数点が出土している。断面は方形を呈し、第1次調査で出土したものの一部には木片が付着していた。国分僧寺・金堂跡周辺からの出土が目立っている。

鉄金具は、第1次調査で1点出土している。半球形状の隆起を持つ小片である。扉に用いられた乳状金具の一部と推定されている。

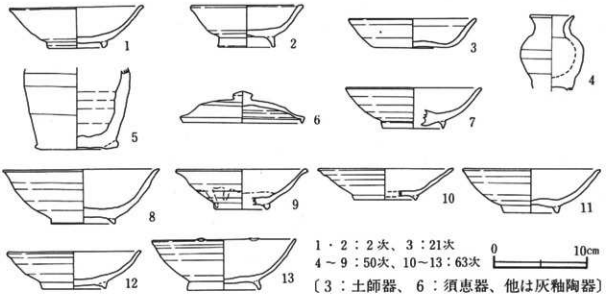


1・2：1次、3：3次、4～21：5次、22：7次、
23～27：36次　28・29：38次、30：51次、31：60次

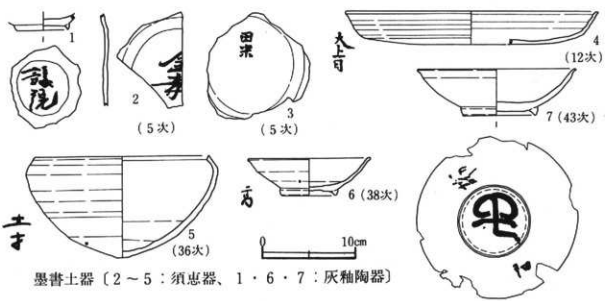


32：104次（土器埋設遺構）
33：表面採集品

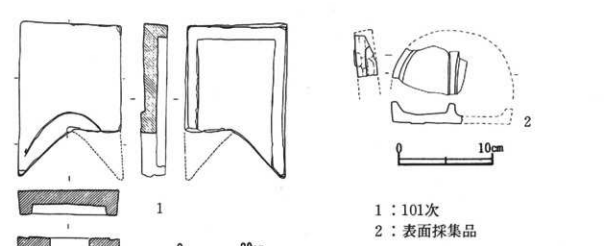
第19図　国分僧寺出土土器



第20図　国分尼寺出土土器



第21図　墨書土器



第22図　隅木蓋瓦・陶硯

第２節　試掘調査の結果（第112次調査）

（１）経過

第112次調査は、校舎建て替え計画に対応して、事前に校地内の埋蔵文化財の取り扱いについての基本方針をまとめるための基礎資料を得るために実施された。調査は、校地内に６か所のトレンチ（試掘溝）を設定（第23図）し、各か所ごとの遺跡の残存状況を確認した。第１トレンチ、第２トレンチは、過去の調査により伽藍地の西境を区画している築地と溝が確認されているため、この区画が校地内に伸びているのかを確認するために設定した。第４トレンチ、第６トレンチは、上記トレンチの目的と同様で西区画の北限界を求めるためと、第21次調査で確認された西区画の境溝と推定される南北方向の溝の南限界を求めるために設定した。第３トレンチ、第５トレンチは、第52次調査で確認された寺域の西限界を区画すると推定される南北方向に延びる溝が、グランド北側にまで延長されているかを確認するために設定した。今回の調査面積は、合計で約85㎡であり、８月19日から29日まで現地調査を実施した。各トレンチともまず、重機により校地造成時の盛土および旧耕作土と考えられる土を除去した。その後、人力で遺構検出面である黄褐色土層上面まで掘り下げた。

（２）検出された遺構

遺構としては、中世から近世と考えられる溝状遺構、遠江国分寺に伴うと考えられる築地跡及び溝状遺構などがある。以下、トレンチごとにその概略を述べる。

第１トレンチ（第24図）

国分寺伽藍地西境を区画していると考えられる築地跡と両脇の溝及び中世以降の開墾のために造られたと考えられる溝が検出された。

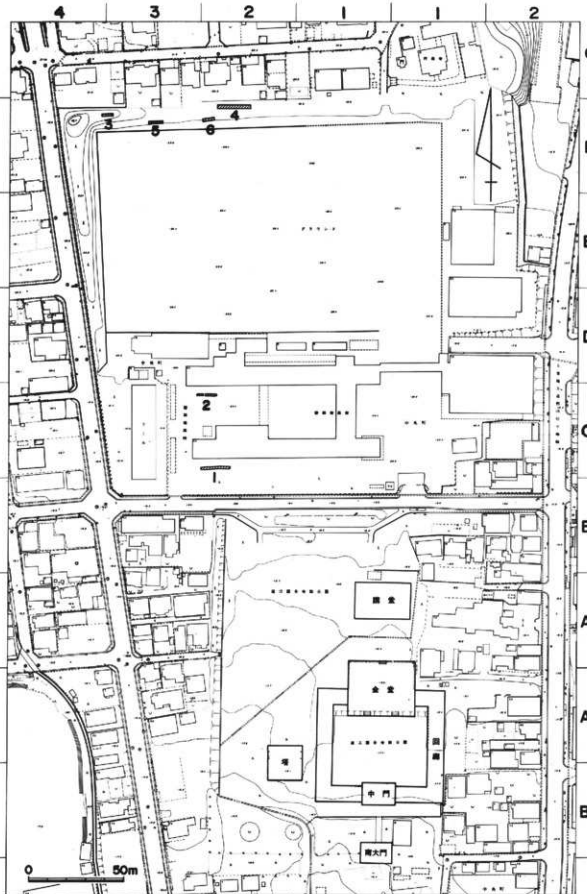
築地跡

左右に溝を持つ築地跡は、確認面で幅約1.5mを測り、東西ほぼ水平である。調査区北側の第２トレンチでも確認でき、南北に続いていると考えて間違いあるまい。築地西側の溝底より50cm東側の溝底より25cmを測る。断面で確認すると、本来築地を形成していたと考えられる土の流れこみが西側溝の埋没土内に観察でき、また築地確認面の上25cmほどまで残存が推定される。築地に対して直行する調査幅が約１mと短いためか、築地造成に伴う柱穴跡は確認されていない。この築地跡の左右の溝より瓦が大量に出土する状況から判断して、築地塀と考えたい。

ＳＤ１

築地跡西側を南北方向に走る溝である。検出したのは東西幅約３mで、調査区北側の第２トレンチ、南側の第60次調査区ＳＤ０１に続いていると考えられる。断面で観察すると、上面の幅は約３m、深さは約75cm前後である。断面は深皿状を呈し、最下部は幅約１m、断面は皿状となっている。下底面の標高は約18.90mである。最下部西端に時期の異なる溝の痕跡らしきものが断面で確認できたが、含土等に変化はなく、確実に溝とは断定しがたい。

ＳＤ１からは、大量の瓦が出土した。覆土を観察すると、瓦を含んだ土層の最上層は暗灰色土でややしまりにかける土である。瓦は、細片化したもので耕作その他により移動したことをうかがわせる。瓦が集中するのは淡灰色土と黄色粒子を含む褐色土で、瓦はこの層の中で上面と下面で折り重なるような堆積をしている。上面の瓦は大形品が多く、何らか理由で東の築地屋根から滑り落ちたようにも見える。下面の瓦は、大形品も混ざるが崩れ落ちたような状況ではない。溝の最下部では、瓦の検出はない。



第23図　第112次調査地点位置図

ＳＤ２

築地東側を南北に走る溝である。検出したのは東西幅約75㎝で、調査区北側の第２トレンチでも確認され、南北に続いていると考えられる。断面で観察すると、１度に埋まったと考えられ深さは25㎝前後を測る。断面は、碗状を呈し、下底面の標高は約19.20mである。遺物の出土はない。

ＳＤ３

ＳＤ２の東側を南北に走る溝である。検出したのは東西幅約2.30ｍで、調査区北側の第２トレンチでも確認され、南北に続いていると考えられる。断面は深碗状を示すが、西側落ち込みは非常に不整形である。また、校舎側から池への排水施設がこの溝上を横切っているためかなりの部分が撹乱をうけている。最下部は幅約１m、下底面の標高は約18.75mである。

瓦が出土しているが、大部分が小破片であり、意図的に溝東端に棄てたような状況を示す。陶磁器の小破片が混入するため、近世の耕作に伴う畑の境溝と考えられる。

第２トレンチ（第24図）

国分寺伽藍地西境を区画していると考えられる築地跡と両脇の溝及び中世以降の開墾のために造られたと考えられる溝が検出された。

築地跡

左右に溝を持つ築地跡は、確認面で幅約２mを測り、東西ほぼ水平である。調査区南側の第１トレンチでも確認でき、南北に続いていると考えて間違いあるまい。築地西側の溝底より70㎝東側の溝底より30㎝を測る。断面で確認すると、本来築地を形成していたと考えられる土の流れこみが西側溝の埋没土内に観察できる。第１トレンチ同様調査幅が約１mと短いためか、築地造成に伴う柱穴跡は確認されていない。

ＳＤ１

築地跡西側を南北方向に走る溝である。検出したのは東西幅約３mで、調査区南側の第１トレンチ、さらには第60次調査区ＳＤ０１に続いていると考えられる。断面で観察すると、上面の幅は約３m、深さは約60㎝前後である。断面は深碗状を呈し、最下部は幅約１m、断面は皿状となっている。下底面の標高は約18.90mである。旧校舎の基礎コンクリートがあるため、溝の完掘は行なっていない。

第１トレンチと同様に瓦が出土しているが、旧校舎の基礎入れのためにかなり撹乱が見られ、瓦も小破片が多い。第１トレンチで見られた瓦の堆積状況とはかなり異なり、下底部の最下層のみが旧状を保っていると考えられる。土器の出土は１点で灰釉陶器（碗）が出土している。

ＳＤ２

築地東側を南北に走る溝である。検出したのは東西幅約１mで、調査区南側の第１トレンチでも確認され、南北に続いていると考えられる。断面は碗状を示し、深さ約25㎝前後である。最下部は幅約30㎝を測り、下底面の標高は約19.20mである。遺物の出土はない。

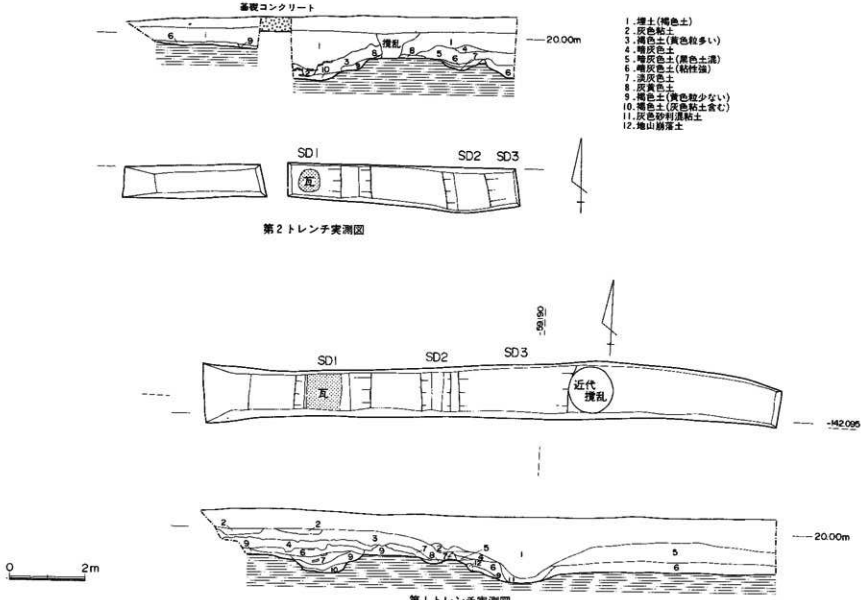
ＳＤ３

ＳＤ２の東側を南北に走る溝である。検出したのは東西幅約１mで、調査区北側の第１トレンチでも確認され、南北に続いていると考えられる。第１トレンチに比べ残存状況は良好であるが、調査区限界であるため、底部まで到達していない。

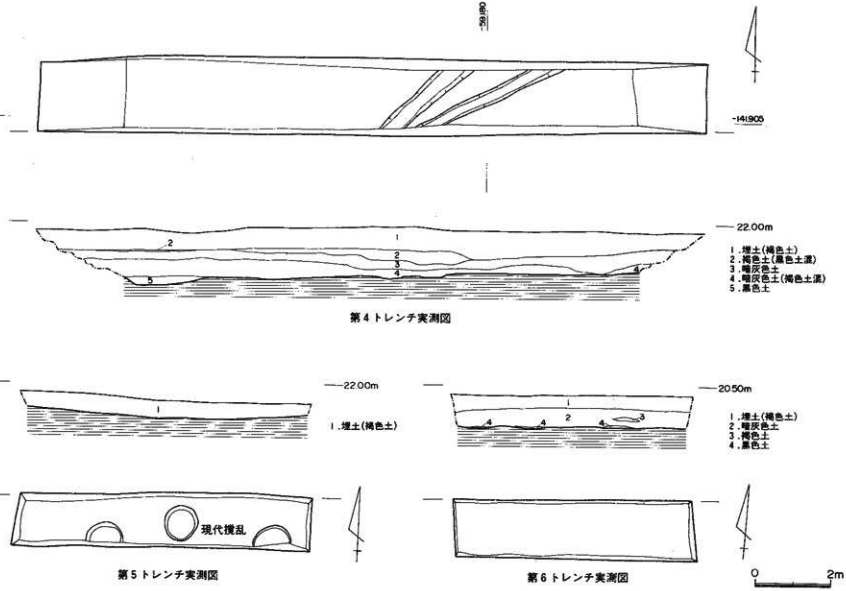
瓦が出土しているが、大部分が小破片であり、さらに調査区外東側に続いている。

第３トレンチ

グランド北側に設定し、重機で調査を開始したが校地造成に伴う埋土が約３mもあり、排土置場の問



第24図 第1・2トレンチ実測図



第25図　第4・5・6トレンチ実測図

題、作業に伴う危険度を考え中途で調査を中止し埋め戻した。なお、造成により埋め立てられ整地されているため、遺構面は傷つけられていない。

第４トレンチ（第25図）

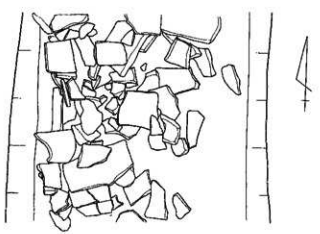
中世から近世にかけてと推定される溝状遺構が２条確認された。溝は、東北より西南方向に延びている。覆土は、灰色粘土で深さ約15cm前後を測る。底面の標高約20.50mである。

第５トレンチ（第25図）

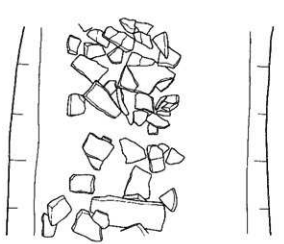
遺構・遺物の検出はない。基盤層の標高は、19.45mである。

第６トレンチ（第25図）

遺構・遺物の検出はない。基盤層の標高は、約21mである。



第１トレンチ　ＳＤ１瓦出土状態実測図(上層)



第１トレンチ　ＳＤ１瓦出土状態実測図(下層)

第26図　第１トレンチＳＤ１瓦出土状態実測図

（3）出土遺物について

今回の第112次調査においては、遺構及び包含層中から、灰釉陶器1点と軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。以下、その概略を記す。

灰釉陶器（第27図1）

第2トレンチSD1より灰釉陶器の碗が1点出土している。口縁部約4分の1、体部約2分の1が残存し、高台部はわずかに欠けている。底部には糸切り痕が残り、一部板状圧痕も観察される。高台は三日月高台の特徴を残している。灰釉は刷毛塗りで、内側には重ね焼き痕による色調の違いが見られる。時期は、折戸53号窯式に比定されるもので、10世紀前半～中頃と考えられる。産地は、浜北市が考えられるが、確実とは言い難い。

瓦（第27図～39図）

瓦は、今回の調査で約コンテナ10箱分出土している。大部分は、第1トレンチのSD1からの出土で次いで第2トレンチSD1、第1トレンチSD2、第2トレンチSD2となっている。軒丸瓦・軒平瓦は1点ずつの出土しかなく、大部分は丸瓦・平瓦である。図化にあたっては、残存状況の良好のものを中心に、小破片でも特徴のあるものについてとした。

軒丸瓦（第27図2）

1点のみ第1トレンチSD1より出土している。表面が摩滅しているが、瓦当文様の4分の1破片である。瓦当部の直径は約25cmを測り、文様は従来より知られている八葉素弁蓮花紋である。国分寺出土瓦については、蓮弁の太さや長さ・輪郭線の有無や太さ・間弁の形状・蓮子の数・中房の凹み・周縁の鋸歯文の有無や数などによりA～Eに大きく分類されている。今回の出土品は、B分類に属するものと考えられ、創建瓦に後出するものとされている。

軒平瓦（第27図3）

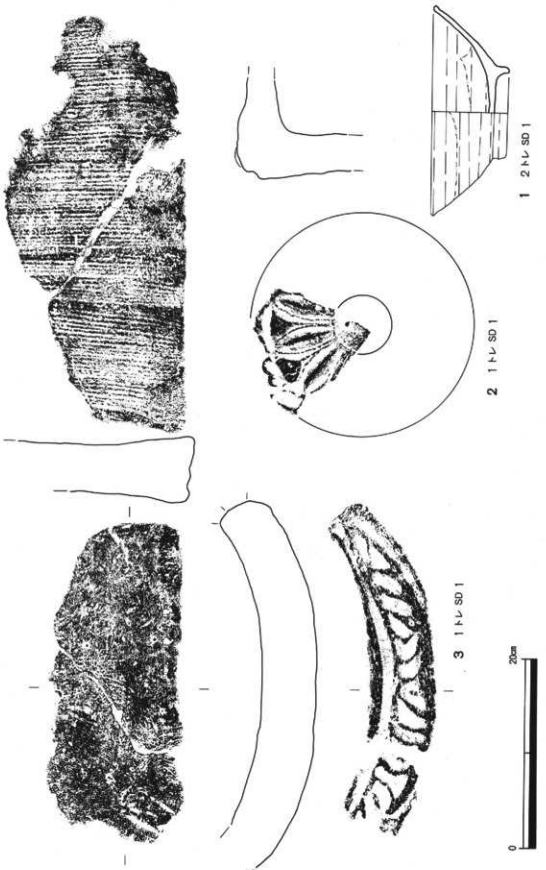
1点のみ第1トレンチSD1より出土している。表面が摩滅しているが、瓦当文様は一部欠けているだけである。瓦当部の直径約37cm・幅約7cmを測る。文様は、退化したS字が陰刻されたもので、重弧となる弧線紋を配している。年代的には、平安時代前期～中期に比定される瓦である。

丸瓦

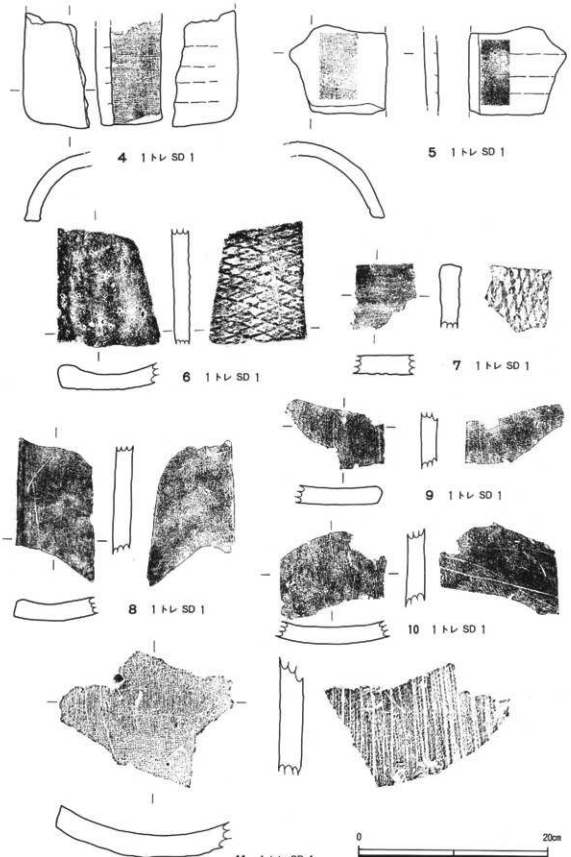
20点図示する。玉縁を有するものと有しないものがある。国分寺周辺域で玉縁の有しない丸瓦が出土している地点は第60次調査地点のみで、今回の地点が2か所目の確認地となる。

粘土積み上げにより成形されている瓦（第28図4・5）が2点出土している。厚さは共に約15mmと薄く、凸面に丁寧なナデが施され、縄目叩きの痕は確認出来ない。側面・端部ともケズリの後ナデにより調整されている。凹面には、布目痕が残る。胎土は小石・長石・黒色粒子・雲母・砂粒の含みが見られるが緻密である。同質の瓦は、第60次調査地点と御殿・二之宮遺跡（磐田市）で出土している。産地は特定できないが、浜北市の東ノ谷窯の可能性が高い。

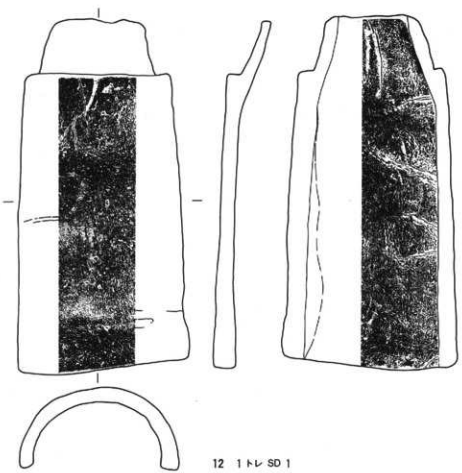
玉縁を有しない瓦（第31図17）が1点出土している。粘土板桶巻き作りで、全長30.7cm、厚さ3cmを測る。凸面は、縄目叩きの後ナデ調整が施されている。凹面は、細かい布目痕が残る。側面・端部ともにヘラ削りである。胎土は、砂粒が含まれ、焼成はあまく黄褐色を呈する。



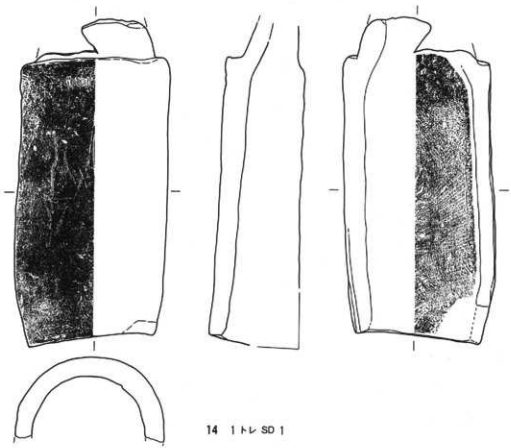
第27図　出土遺物実測図（1）

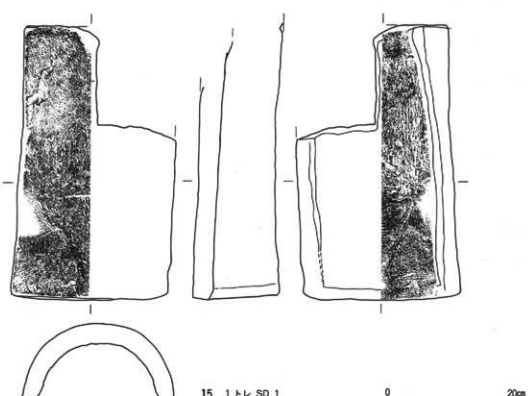


第28図　出土遺物実測図（2）

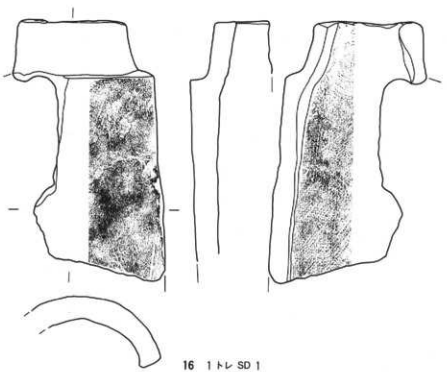


第29図　出土遺物実測図（3）

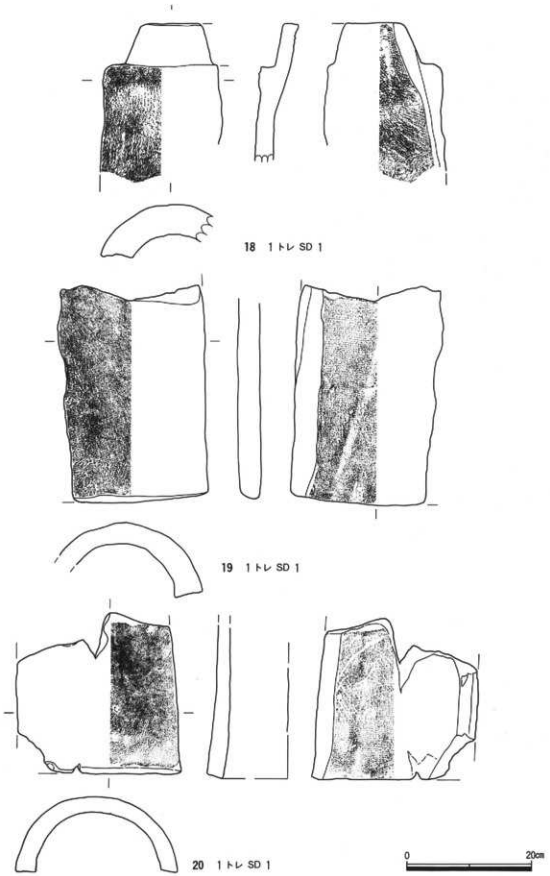




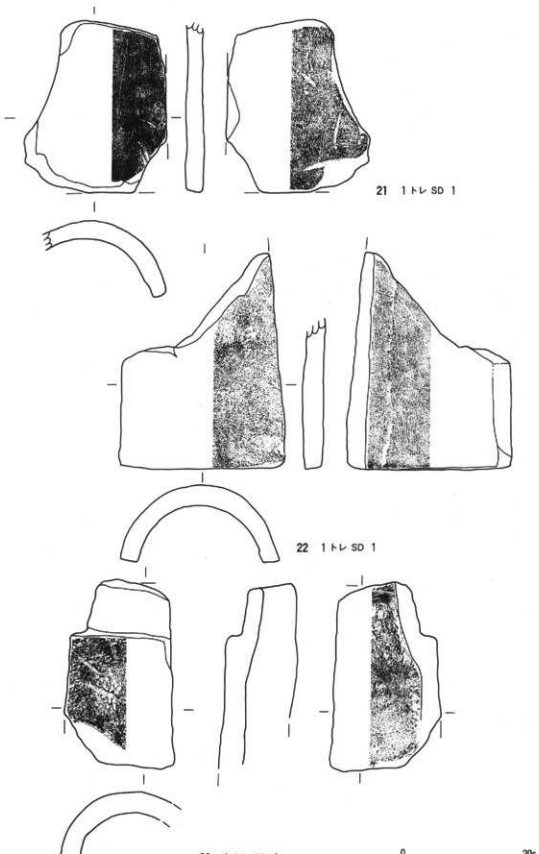
第30図　出土遺物実測図（4）



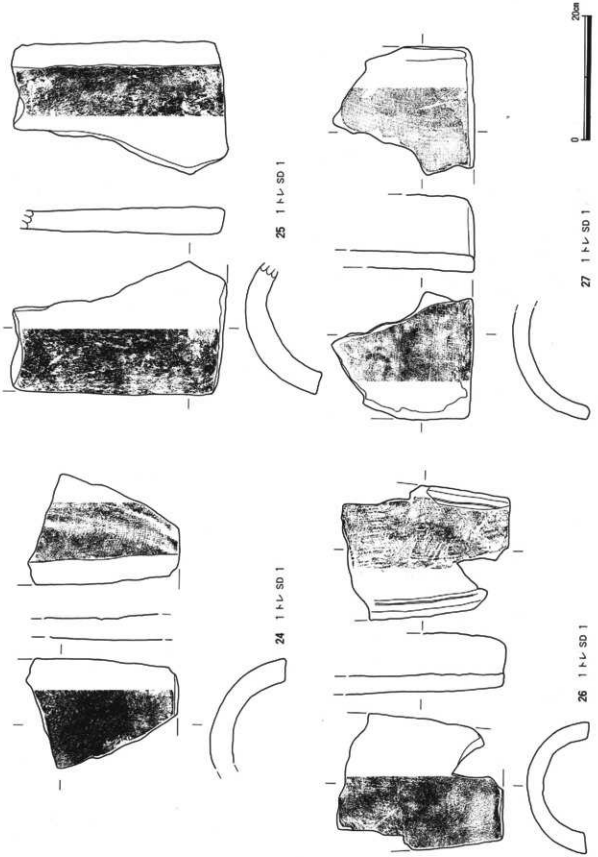
第31図　出土遺物実測図（5）



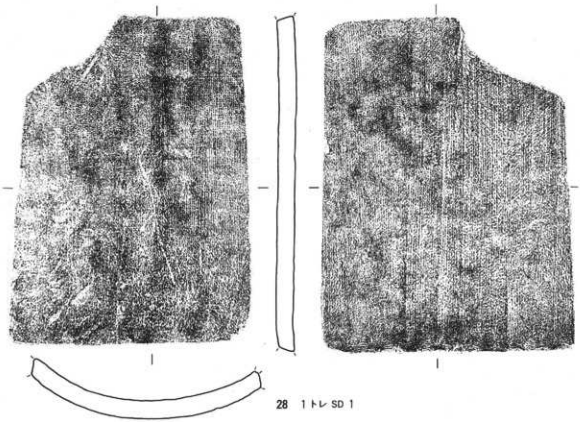
第32図　出土遺物実測図（6）

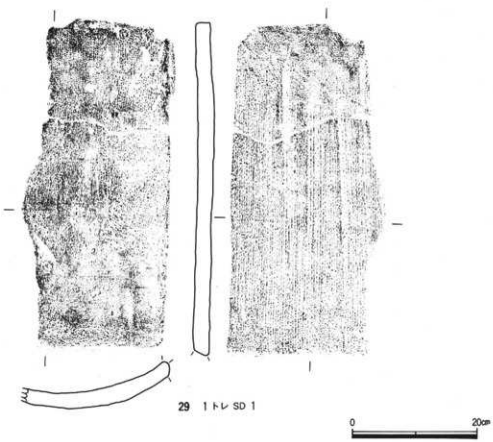


第33図　出土遺物実測図（7）

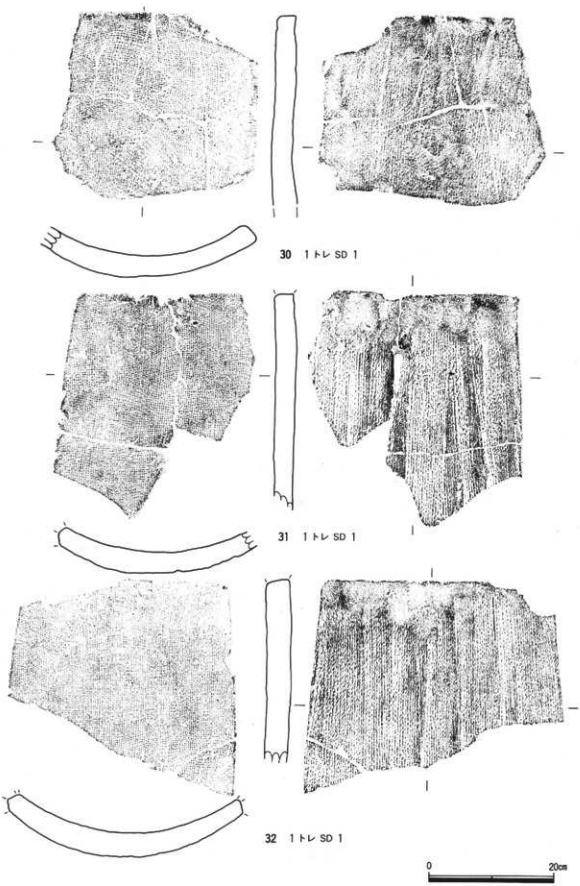


第34図　出土遺物実測図（8）

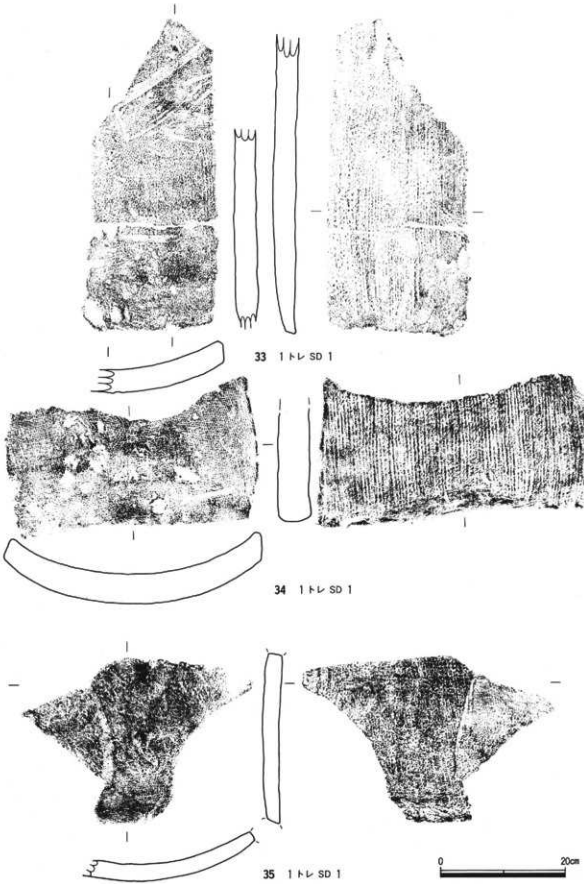




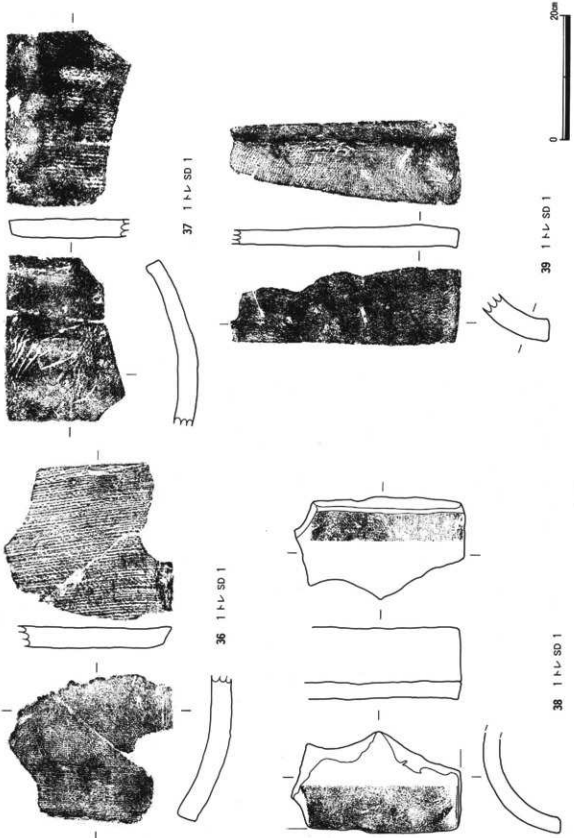
第35図　出土遺物実測図（9）



第36図　出土遺物実測図（10）



第37図　出土遺物実測図（11）



第38図　出土遺物実測図（12）

第39図　出土遺物実測図（13）

その他の瓦は、過去の調査で出土しているものと同様である。すべて粘土板桶巻き作りで、凸面には縄目叩きの痕とナデ調整が見られる。凹面には布目痕が残る。

平瓦

22点図示する。いずれも粘土板素材であるが、1枚作りのものと、1点だけだが桶巻き作りのものが出土している。国分寺周辺で桶巻き作りの平瓦が確認されたのは、第60次調査に次いで2例目である。

格子目叩き痕が観察できる瓦（第28図6・7）が2点出土している。厚さは約18～21㎜を測る。成形台を使用した1枚造りで、凸面に格子目叩き痕が確認できる。格子目は、直行しておらず菱形にひしゃげている。凹面には、肉眼に布目は観察されないが、薄く確認できるか所もある。全体的にナデ調整が見られる。側面・端部ともヘラ切りの後、ナデている。胎土は、白色・灰色の2～4㎜の小石と砂粒が含まれている。焼成は良好である。国分寺周辺域で格子目叩きの瓦が出土したのは当調査地点が初めてである。産地は不明である。周辺地域では、森町の陣家峠窯で格子目叩きの瓦が確認されているが、1枚造りではなく、桶巻き作りである。伊豆国分寺にも類例があるが、同年代とは思えない。

桶巻き作りと思われる瓦（第28図8）が1点出土している。凹面には、わずかに布目痕が確認できるが縦方向による丁寧なナデ調整により消されている。凸面には縄目叩きの痕は見られず、丁寧な横方向のナデ調整の痕が残る。側面の調整も丁寧で二段にヘラ切り後、縦方向にナデている。胎土は、非常に密で、焼成も良好で凸面は、灰色に発色している。

その他の瓦は、遠江国分寺周辺では一般的な平瓦で、凹面に布目痕、凸面には縄目叩きの痕が残るものである。厚みや胎土・布目・焼成の状況が若干異なる程度である。

（4）まとめ

今回の調査により、伽藍地が北側に伸びていたことが確認された。第1・2トレンチとも第60次調査の延長にあたる溝を確認したが、多少溝の在り方、瓦の出土状況に違いが見られた。溝については、幅・深さ等は共通する。第60次調査において検出された最下部の2条の溝は、今回の調査では確認できなかった。ただ、溝西端の下部で本来の溝より新しい掘り込みの痕跡らしきものは見られた。第60次調査の溝の瓦出土状況は、中間層を挟んで上層、下層からまとまって出土している。上層に大形品が含まれ、年代的にも奈良時代に遡る可能性が高いものが含まれている。下層については、密な堆積の部分があるが、中程度の破片が多い。今回の溝の瓦についても、上層で大形品が多く、下層では中程度の破片が多いことは共通している。レベル的に見た場合、第60次調査の溝の最下層は18.4ｍで、今回が18.8ｍである。瓦が集中するのも60次が19.0ｍを中心に50㎝内外で、今回が19.2ｍを中心に40㎝内外である。瓦の堆積状況も明らかに東側築地から崩れ落ちた状況を示す部分が見られた。第60次調査の結果と今回の結果を考えれば、西境は土塁ではなく築地であったと断定できよう。年代の問題であるが、第60次調査で瓦を含む上層を出土遺物から10世紀後半に比定していたが、今回同レベルの地点で出土した灰釉陶器の年代は9世紀後半のものであった。幅が非常に狭い調査であったため、詳しい検討は今後の調査にゆずりたい。今回の調査で特筆されることは、築地の内側の調査が初めて実施されたことである。内側には溝（雨落ち状）が存在していたことは確実であるが、伽藍内と築地を挟んだ外側では、地形的にどのような違いがあるのかが不明なままである。ただ、残念なことに築地内側溝の周辺が後世の改変をかなり受けていることである。溝の廃絶時期を含め、伽藍中心部より北側に外れているにもかかわらず8世紀中頃に比定される瓦が出土していることも問題となろう。いずれにしろ、遺構の残存状況が非常に良好であるため、今後の調査ではさらに大きな成果が期待されよう。

第３節　磐田南高等学校校地内の遺構のあり方

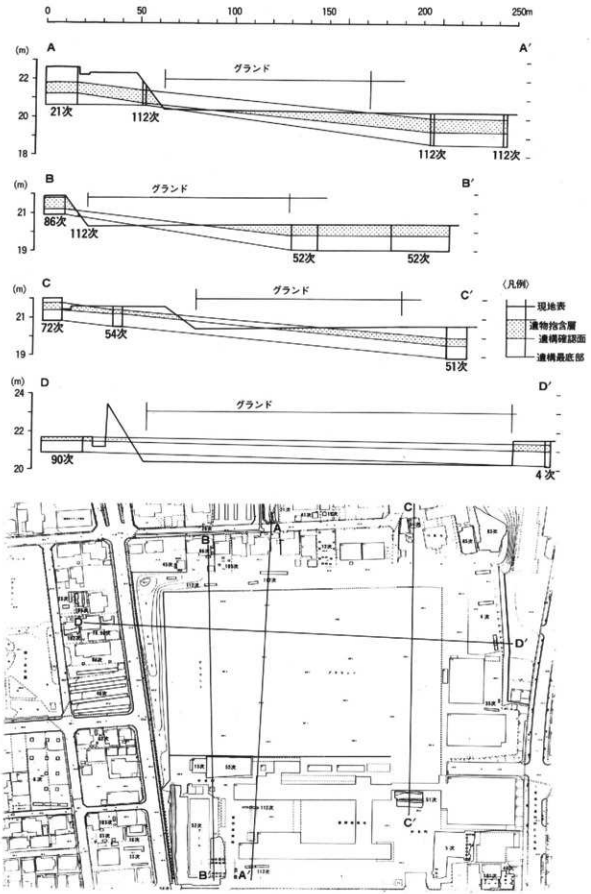
今回の調査及び過去の校地内の調査により、ほぼ現校舎下の遺構のあり方については判明したと考えられる。遠江国分寺の中心地（金堂・塔・講堂などの建物がある場所）である伽藍地の西境を区切ると考えられていた築地及び溝が第１トレンチ、第２トレンチで確認され、それは第51次調査で確認された東西方向の溝へと続くと推定できる。従って現校舎の下は、遠江国分寺の中でも最も重要地点である伽藍地内と確定された。さらに、今回の調査地点の西側でも大型の掘立柱建物が確認（第52次調査）されており、校地境で確認された南北に続く大溝との間が伽藍地に次ぐ重要地点と考えられる。現校舎の前の建物による遺構の破壊については、第２トレンチでほぼ確認でき、基礎は遺構面の全てを破壊していないことが判明した。従って、現校舎下は非常に良好な状態で遺構が残存していると考えられる。

グランド下については、現実に学校が機能している状態のため、試掘調査は実施していない。グランド下の遺構の残存状況を推定するためにグランド北側に４か所トレンチを設定し遺構の残存状況の確認を行なった。それだけで、グランド下の遺構状況を把握するには困難なため、校地周辺で実施された過去の調査のデータ等をもとに南北３か所、東西１か所のエレベーション図を作成し、グランド下の遺構残存状況の推定を試みた。

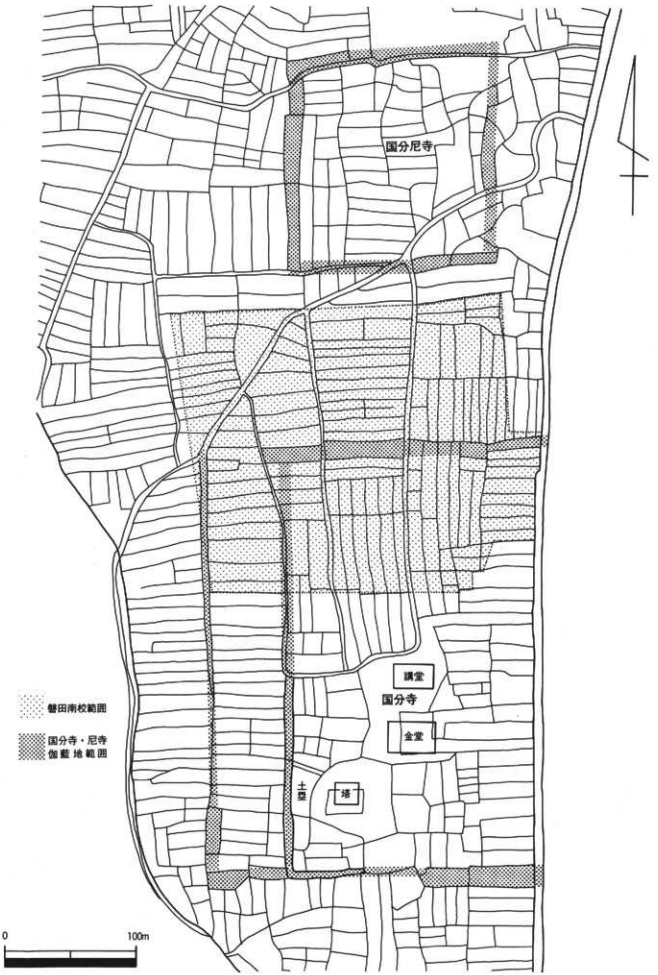
エレベーションＡは、北から第21次調査・第112次調査６トレ・同２トレ・同１トレを縦断するラインで設定した。検出面のレベルは北から21.2m・20.7m・19.3m・19.3mで、遺構最底部は20.6m・20.6m・18.6m・18.6mである。国分寺創建時は、北側から南側にかけてゆるやかに傾斜を持った自然地形であったと思われる。エレベーションＢは、北から第86次調査・第112次調査５トレ・第52次調査北側・南側を縦断するラインで設定した。検出面のレベルは北から21.2m・削平・19.8m・19.8mで、遺構最底部は20.9m・20.7m・19.0m・19.0mである。Ａ同様北から南へゆるやかに傾斜している。エレベーションＣは、北から第72次調査・第54次調査・第51次調査を縦断するラインを設定した。検出面のレベルは北から21.4m・21.2m・19.6mで、遺構最底部は20.8m・20.5m・18.9mである。このラインもＡ・Ｂと同様で北から南へかけ緩やかに傾斜している。エレベーションＤは、西から第90次調査・第４次調査を縦断するラインで設定した。検出面のレベルは西から21.5m・21.0mで、遺構最底部は20.9m・20.2mである。

４か所のエレベーション図から推定される磐田南高校グランド内の遺構のあり方は、北から南へかけ緩やかに傾斜していることから、グランドを掘む土手については遺構が残存していると考えられる。しかし、グランドについては北側の大部分は造成等に伴う工事によって遺構そのものが削平されている可能性が高い。現校舎に近いグランド南側については、大規模な掘立柱建物や大きな溝について残存が推定される。現グランドの排水のための工事が実施されており、おおよそ１～２m程の深さで碁盤の目状に排水施設埋設のための掘削を受けている。これらの状況を付加するとグランド北側については大部分が遺構残存の可能性が低いとしていいのではないだろうか。

今回の調査を含め、磐田南高校が国分寺の寺域の中のどの部分にあたるかを明治22年頃の地籍図で想定してみたい。昭和26年の第１次調査で、金堂・塔・講堂等の中心域のトレンチ調査（約700m²）が実施されており、この成果をもとに100間四方の伽藍地が推定されていた。その後の調査により、伽藍地西側を区切ると推定される溝等の検出（３・９・35・43・60次）により従来の100間四方では、伽藍地がおさまらないことが確実視されてきた。今回の調査で、伽藍地西境を示す築地及び溝が確認されたことで伽藍地が100間四方ではなく、さらに拡大していたことが実証されたのである。従来の復元案では、僧房の所在が不明であったが、全国の国分寺の伽藍配置を検討すると、ほぼ講堂の北側に僧房が位置し



第40図　磐田南高校内エレベーション図



第41図　地籍図による国分寺・国分尼寺中心域想定図

ている場合が多い。遠江国分寺も５・44・52・101次の４か所で計４棟の建物遺構が確認されており、講堂北側部分に何らかの施設があったことが推定される。短絡的に僧房であるとは言えないだろうが、現校舎下には、国分寺伽藍地の講堂北側の施設群が配置されていたことは確実である。これらの状況から判断して、現校舎下については「国指定史跡」に匹敵する遠江国分寺伽藍の中心的施設が配置されていた場所と考えられる。さらに現プール下周辺域も第52次調査によって、大型の掘立柱建物と伽藍地を区切る築地に平行する大溝が確認されおり、国分寺伽藍地に付随する施設等が推定される。これらの状況から、プール周辺域は伽藍地に次ぐ重要地点と考えられる。

グランド部分については、国分寺と北側に確認された国分尼寺との関連から推定してみたい。国分尼寺は、第21・57・99次調査によってほぼ金堂・講堂の位置と国分尼寺の寺域の範囲が推定できる。推定される寺域は、金堂・講堂を中心に80間四方として考えられている。検出された金堂跡と講堂跡は国分寺の真北にあたり、伽藍中軸線の延長線上に位置すると推定されており、極めて国分寺を意識した位置関係となっている。国分寺と国分尼寺の金堂間の距離は中心間で約415ｍを測る。前述した地籍図を見ると国分寺の金堂・講堂と国分尼寺の金堂・講堂を結ぶ直線状の道があり、創建当時も国分寺の北大門と国分尼寺の南大門を結ぶ道があったことが考えられる。現グランドは、国分寺と国分尼寺の緩衝地にあたり、国分寺と国分尼寺を結ぶ通路を中心に左右に何らかの施設があったことも推定されよう。

時代は異なるが、グランド部分の遺構を考えるにあたって重要な調査結果も出ている。国分尼寺の南側に平安時代後期～鎌倉時代前期と推定される約30間四方の方形館が確認されている。館を取り囲む溝は、幅約２～３ｍ、深さ約１～1.5mを測る。国分尼寺廃絶後、館の建設によって周辺地形が大きく改変を受けている可能性が高い。鎌倉期の館と考えるならば当然館のみでなく周辺部も含めた形で地形等の改変を実施していることが推定される。この改変が国分寺までは及んでいないだろうが、グランド部分にまで及んでいる可能性は高い。

現在まで実施された調査は、中心域は非常に少なく大部分が周辺域の調査である。国分寺の伽藍域、国分尼寺の伽藍域がほぼ確定されたのは大きな成果であるが、過去の調査で検出されている大型の掘立柱建物群の性格等が不明のままである。国分寺の前身建物（国分寺の建設に関わった建物）とする見方もあり、また国分寺に付随する施設であったとも考えられる。いずれにしろ今後の調査に期待されるところが大きい。

第V章　考　　察

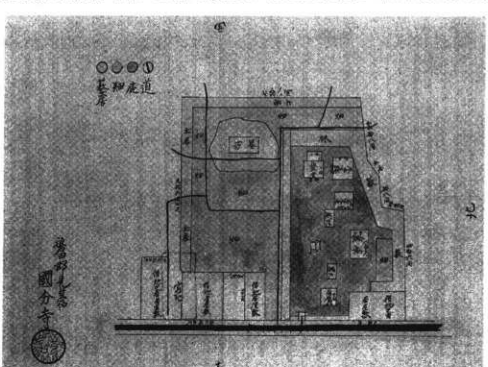
第1節　寺院地と伽藍配置の復元　　大脇　潔

はじめに

古代寺院の範囲を示す用語としては、従来、寺地や寺域などが用いられてきた。しかし最近になって、中心伽藍以外の諸施設の存在が明らかになるにつれ、これを「伽藍地」と「附属院地」に分け、その両者を併せた範囲を「寺院地」と呼ぼうとする動きがある[1]。「伽藍地」とは新しい造語で少しなじみにくいが、大安寺の資財帳や薬師寺縁起で「塔金堂并僧房等院」と称し、またふつう「七堂伽藍」と呼ばれている範囲を指し、その多くは南門からのびる塀や溝といった区画施設をともなう。一方、「寺院地」とは法隆寺や大安寺の資財帳などにもみえる用語で、政所院・太衆院・倉垣院・苑院・花園院・賤院・修理院など、寺の維持と運営に必要な諸院を含めたより広い範囲を指し、いままでの「寺地」・「寺域」に相当する。この範囲も塀や溝で囲み、門を有する例が多いようである。

この関係を図式的に示せば、まず中心に中門からのびる回廊で囲まれた「塔金堂院」があり、そのまわりに南門からのびる塀などで区画された「伽藍地」、その周囲に附属諸院を囲む「寺院地」があるということになる。さらに、そのまわりに山川沼沢を含む「寺地」をもつ例が、東大寺などの大規模な寺院の場合にあり、遠く離れて「墾田地」や「荘園」が存在する場合も多い。関東地方の国分寺の調査から考え出されたこのような分け方が、すべての寺院に無理なくあてはまるかどうか、あるいはもっと適切な用語はないかなど、今後検討を続ける必要はあるが、本稿ではとりあえずこの説にしたがい、寺院地と伽藍地という用語を用いることにしたい。

さらに、今回、石田博士が提唱した「寺域」[2]を、近年明らかになりつつある関東地方の国分寺の寺院地の規模と比較した結果、従来「寺域」と考えられてきた土塁で囲む一郭は、先の分け方にしたがえ



第42図　遠江国分寺古図（寛政2年）

ば実は伽藍地に相当し、その外側により広い寺院地の存在が想定されるに至った。以下、その経緯を示して今後の調査と保存の進展に役立てたいと思う。

(1) 調査略史

『類聚国史』巻173災異部7によると、遠江国分僧寺は、完成からおよそ半世紀後の弘仁10年（819）8月29日に焼失したという[4]。当寺に関する数少ない史料であるが、その後の沿革は、史料もなく詳細にしがたい。しかし、大永2年（1522）銘を刻む鰐口によって薬師堂がこの頃あったことや、寛政2年（1790）に寺が寺社奉行に差しだした古図（第42図）によれば、本堂址・仮本堂・愛染堂・地蔵堂・庫裡・大黒堂・開魔堂などの存在がわかり、法燈が伝えられていたことがうかがわれる。この古図には東海道に面して東に門を開く境内（古図には「庭」として色わけ）と、その南から西にかけてL字状に折れ曲がる「土居」に囲まれた「墓所」と「畑」が描かれており、この一郭も当時なお寺領であったことが確かめられる。なお、図の書き込みによれば、南側の土居は長さ96間（約174m）、高さ4尺（1.2m）、西側の土居は長さ78間（約142m）の規模があったことが知られる。

昭和26年の第1次調査時には、この土居はすでに開墾されて畑地や芝地と化していたが、それでもなお古図に残された頃の姿が偲べたようである。調査を担当した石田は、その様子を「塔址の西方、塔心礎より五十八尺の所において、幅八尺で南北につらなる芝地がある。現存するは三十尺許であるが、戦前までは北方、高等学校の南を走る東西道路にまで及び、そこには粗い松並木があり、私もそれを目撃している。それが戦争中、松は薪に、又、芝地は開墾されて畑に化し、旧観を破壊したが、畑としては不自然の帯状をなし、往時の土塁の名残をとどめている。

尚、此の土塁は、もと北は高等学校南の道に沿って東に曲り、南は南大門の見通し線で東へ曲ったらしく、今も南は、畦畔巾に継続して芝生が残り、北は宅地になっているが、その不自然な地境は、往時の土塁址を思わせるものがある。」と述べている。そして、石田は、この土居を土塁と呼び、その痕跡をもって「寺域」を復元する有力な根拠とし、金堂心から南大門・西土塁・東海道心・北方土塁址までの距離がいずれも50間であることから、100間四方、すなわち600尺四方の「寺域」を復元した。昭和43年から実施された環境整備事業では、この石田説にしたがい、かつての土居の推定線上に盛土して土塁が作られている。

この土居は、遠江国分僧寺の中心伽藍を画した築地あるいは土塁の痕跡として、寺院地の復元を試みる際、欠くことのできない重要な遺構である。しかし、弘仁10年の火災以後、寺院地にも幾多の変遷が予想され、創建当時の区画施設を踏襲したものかどうかについては慎重な吟味が必要である。そこで、土居の調査をふりかえり、その構造と存続年代についてまとめておこう。

(2) 土居の調査

土居の痕跡は境内の南と西に残っていたが、実態がよくつかめているのは西の土居である。そこで、まず西の土居から調査成果を見ることにする。

西の土居　西の土居は、伽藍中軸線から西へ約90m（300尺）の位置にあり、南から数えると第3・35・9・43・60・112次調査区で土居（報告書では土塁と呼ぶ、以下土塁）の基底部と、その東西にある南北溝が検出されている。

この中で、昭和59年に実施された第9次調査では、南北方向にのびる土塁本体（SA−01）とその西側がかなり広く調査されている[5]。SA−01は、幅2mの範囲内で断ち割り調査がおこなわれており、その所見によると、下端幅3.25m、上端幅2.7m、高さ0.25mの規模をもつ基底部のほぼ中心に、黒褐色土系と黄褐色土系の土を交互に積み上げた版築土層が下端幅1.9m，高さ0.55mほど遺存していたと

されている。版築部分の東側には0.35m、西側には0.45mの狭い平坦面があり、版築土層の最下層には摩耗した瓦の小片1点が含まれていたという。また、土塁の東には幅約0.8m、西には幅2～3mにわたって続く瓦の堆積が認められるが、当時の地表面との間に間層をはさむと報告されている。

このSA－01の構造と規模、瓦の出土状態などから考えると、この土居はかつての築地のなごりをとどめるものであった可能性が高い。しかし、断ち割り調査の範囲が狭かったため、残念ながら寄柱の痕跡や、当初のものと思われる雨落ち溝など、築地であったことを証する決定的な証拠は検出されていない。とはいえ、版築土層の両側には軒瓦片や大形の破片を含むかなりの量の丸・平瓦片が多量に堆積していたことなどから推定すると、戦前まで遺存していた土居は、築地が崩壊して形成された土塁に手を加えながら境内を画す施設として利用してきた可能性が高い。

同じような状況は、第60次調査区[5]で検出された土居の西側の南北溝SD01・02周辺でも認められ、SD02より新しいSD01から多量の瓦が出土している。この溝の堆積層は上から大きく1～5層に分けられており、そのうち第2・4層からの出土が多く、とくに第2層の上面と下面では面をなすかのような瓦の堆積が認められ、下面の瓦には大形品が目立つ。出土した土器から考えると、第2層は10世紀後半（平安時代中期）、第1層は平安時代後期～末頃に形成されたと推定されている。したがって、西面築地は、最終的には10世紀後半に崩壊したと推定される。それ以前から築地が築かれていたことは、4層からまとまって出土した瓦の存在や、SD01より古い雨落ち溝とみられるSD02の存在などから疑いないが、残念ながら創建時まで遡るかどうかは確証を欠く。土塁の西側から出土した軒瓦には、創建時に属するものは確認されておらず、Ⅱ期（平安前期～中期）に属すものが多いという[5]。したがって、築地も平安時代に入って建設されたのではないかと考えられる。

以上のような状況は、平成6年度に実施された第112次調査でも追認され、筆者も現地でつぶさに基底部や周囲の瓦堆積の状況を観察する機会を得た。したがって、遠江国分僧寺の中心部は、築地によって区画されていたと考えられる。保存状態が良好な西面築地の調査所見によると、築地本体の平均的な下端幅は1.5～2mほどであり、版築による積土が0.55mほど残る。その外側（西側）には、幅0.2～0.4m程度の犬走り状の狭い平坦面があり、さらに幅1.5m、深さ0.3mほどの溝があり、内側（西側）にも幅0.5～1m、深さ0.2～0.3mほどの溝が築地基底部に並行して走る。本格的な築地であれば、寄柱（須柱）の礎石や柱穴、築地本体を築き上げる堰板を止める柱穴などが残るはずであるが、調査範囲が狭いためか、あるいは後世削平を受けたためか検出されていない。今後、より広い範囲を調査する機会があれば、築造年代や構造の問題は解決されるであろう。

国分寺のなかでは、中心部を築地で画していたことが判明した例のひとつに上野国分僧寺があり、現存する最古の築地としては、法隆寺西院の例が有名である。この両者を参考に、当時の築地がどのようなものであったかを考えてみよう。

上野国分僧寺の南面築地　上野国分僧寺の場合は、『上野国交替実録帳』に「築垣壱処　四面弐町　長参百弐丈壱尺」という記載があり、長元3年（1030）にはこれが崩壊していたことが知られる。この記事から、寺が築垣つまり築地で区画されていたこと、その規模は約2町と（109×2＝218m）推定されてきた。

昭和55年から開始された上野国分寺の発掘調査[6]では、この記録どおり、南大門の東西で南面築地が検出されている。築地の規模は、下端幅4.2m、上端幅2.65mの基底部上に、下端幅2.0m、上部幅1.8m、厚さ3－5cmの単位で積み上げられた版築土が高さ20～30cmほど遺存していたという。一部で寄柱と思われる掘立柱柱穴や凸面に赤色顔料が付着した軒平瓦が見つかっていることから瓦葺であったと推定されている。基底部の下端幅が遠江国分僧寺より1mばかり大きいが、その他はほぼおなじ規模である。なお、南面以外の築地の痕跡は後世の削平が著しかったため検出されていない。

法隆寺西院伽藍の築地　現存する築地の中で最も古く、古式をとどめている法隆寺西院大垣(元禄年間・重要文化財)の規模と構造は、築地本体の下端幅1.43m、高さ2.32m、屋根を含めた高さ3.24mで、2.4mごとに寄柱をたて、本瓦葺きとするものである[9]。

この規模や発掘例[10]を参考に、基底部をのぞく築地本体だけを復元すると、高さは下端幅の1.6倍程度になるので、遠江国分僧寺の場合、下端幅を1.5m（5尺）とみれば、高さは少なくとも2.4m（8尺）以上、屋根の高さを含めた総高は3.3m（11尺）、軒の出は2.8m（9尺）ほどと推定できる。

南の土居　南の土居については、第1次調査で南門と推定された位置から東へ約35m離れた第28次調査区と、同じく約60～75m離れた第104次調査区[11]で、重複する東西溝SD01～03が検出されている。これがかつて土居の南側を画していた溝にあたり、西面と同様に溝の改修が行われていたことが確かめられている。また第104次調査区では溝の一部が途切れて土橋となり、出入口の存在が予想されるとともに、奈良時代の土器埋設遺構が検出されており注目される。

北限の施設　北と東の土居は残っていなかったが、北限を画する施設としては、金堂心から北へ約163m（543尺）離れた第51次調査区[12]で検出されている東西溝2条と築地基底部がそれにあたると考えられる。これが北の築地の痕跡とすれば、寺院地の南北の規模は約253m（843尺）に復元することができる。

東限の施設　東限は、伽藍中軸線から東へ約78m離れた第6次調査区[13]の南北溝が一応候補に上げられている。しかし、この溝は、1　西限の築地が伽藍中軸線から約90mの位置に設けられているのに対して、東限が約12mほど狭くなり、左右対称の区画が形成できない。2　溝の延長部が検出されなければならない第44・53・67次調査区で溝が見つかっていない、などの理由によって東限の施設である可能性は低いと思われる。

したがって、東を限る施設は本発見とせざるをえないが、第1次調査の報告書で推定されているように、伽藍中軸線から東約90mの位置を南北に走る主要地方道磐田停車場線（近世の東海道）がまず東限の第1候補にあげられる（A案　東西180m、南北253m）。

また、南北と東西の規模が等しいと仮定して、中軸線から約163m付近を東限と推定するB案（東西253m、南北253m）、東西の規模が伽藍中軸線から西限の築地までの距離の1.5倍あるとし、中軸線から約180mのラインを東限とするC案（東西270m、南北253m）も可能性としては残されよう。後2者の場合でも東の台地端の崖線の手前で区画はほぼ納まる。主要地方道磐田停車場線の下を調査することはむずかしいが、府八幡宮境内周辺を調査する必要は残る。ここで、東限の施設が発見されない場合は、近世東海道が東の土居に沿って北上していた可能性が高くなるからである。

（3）寺院地の復元

これまでの検討によって、築地で囲まれた範囲は、現状では南北が約253mと考えられるに至った。東西の規模は、伽藍中軸線を中心に左右対称とすれば約180m（A案）、南北と東西の規模が等しいと仮定すれば約253m（B案）、伽藍中軸線から東への距離が1.5倍あったと仮定すれば約270m（C案）という3案が考えられる。この3案の中のA案であった可能性が大であるが、これを最近の調査で確認された諸国分僧寺の寺院地の規模と比較してみよう[14]。

武蔵国分僧寺Ⅰa期　北辺481.6m、東辺580.2m、南辺483.2m、西辺542.8m
武蔵国分僧寺Ⅰb期　北辺627.7m、東辺580.2m、南辺716.0m、西辺534.7m

上野国分僧寺　北辺218m、東辺232m、南辺207m、西辺220m（いずれも推定復元値、最近、これまで寺院地と考えられてきた2町四方の外側から、溝や「東院」と書いた墨書土器などが発見されており、

この範囲は寺院地ではなく伽藍地であり、周辺に広大な寺院地を想定する説が提起されている。）

下野国分僧寺　ⅡA期　北辺232m、東辺251.7m、南辺231.3m、西辺246m
下野国分僧寺　ⅡB期　北辺413m、東辺407m、南辺413m、西辺457m
下野国分僧寺　ⅢA・B期　北辺413m、東辺353m、南辺413m、西辺403m

常陸国分僧寺　東西長約280m、南北長約220m（推定復元値、これも上野国分僧寺と同じように寺院地ではなく、伽藍地を区画する施設である可能性がある。）

下総国分僧寺　北辺360m、東辺340m、南辺252m、西辺333m（いずれも推定復元値。）

上総国分僧寺　東西長340m、南北長480m

従来は、武蔵国分僧寺だけが破格の広さをもっていると考えられてきた。しかし、近年の調査では他の国分寺の規模もかなりの広さをもつことが確認されつつある。遠江の場合は、伽藍地ではないかとする説が最近有力になりつつある上野・常陸国分僧寺の規模よりも部分的に小さく、この両寺とともに、築地で囲まれた一郭は、寺院地ではなく、いわゆる伽藍地ではないかという疑問が生じる。確かにこの範囲内で附属する諸院を配置するとなると、北方に若干の余地はあるものの、南は中心伽藍のまわりに、諸院を配する余裕はほとんどない。

寺の運営に必要な附属諸院を備えた広い寺院地の中に、掘立柱塀や溝で区画された伽藍地があることは、武蔵国分僧・尼寺、上総国分僧・尼寺、上野国分僧・尼寺、下野国分僧・尼寺で近年確認されつつあり、令制下で大国に位置づけられた遠江国の国分僧寺の場合も、南北253m、東西180mほど（A案）の範囲を築地で囲んだ伽藍地があり、さらにその外側に広大な寺院地が存在した可能性の方が高くなったのである。

この寺院地を区画する施設に関する手がかりはまだほとんど得られていないが、関東地方の諸国分僧・尼寺の寺院地のあり方から類推すると、遠江の場合も、僧寺とその北に位置する尼寺を有機的に結ぶ広大な寺院地の存在が想定される。国分二寺は磐田原台地中の中泉丘陵の北東縁辺部に占地するが、寺院地の北と東はこの丘陵崖線一杯まで広がっていた可能性が高いと思われる。南と西については手がかりが少ないが、西では第52次調査で検出されている南北溝と、その延長部ではないかと考えられる第40次調査区[25]の平安時代の溝状遺構ＳＤ01が注目される。

第52次調査で検出された南北溝の詳細は不明であるが、すでに指摘されているように[16]、その位置がかつての小字名「国分寺西」の西の境界にほぼ一致する点は注意されよう。また、小字名を区視的にみれば、「国分寺南」・「国分寺西」・「尼寺」といった寺関係の小字名が磐田南高校の西を走る南北道路をほぼ境とし、その西側にはみられない点も注意される。この道路の西側でも10数回に及ぶ調査が実施されているが、今のところ寺に関する顕著な遺構遺物ともに発見されていないこともこの想定の正しさを裏付けている。とすれば、尼寺を併せた寺院地は、南北およそ700m以上、東西は南の方では約400m以上、北の方では約250～300m程度と推定される。したがって、今後もこれまでと同様の範囲を対象に綿密な調査を継続し、両寺の寺院地をつかむ努力が必要と思われる。

（4）伽藍配置の復元

僧寺の伽藍配置が、金堂と中門を結ぶ回廊によって形作られた金堂院の西に塔を配するものであるこ

とは第１次調査で確定した。もちろん、昭和26年にわずか２週間行われた調査だけに、現在の調査水準から見れば、不足するデータも多く、細部における訂正は今後の調査で見いだされる可能性が高いが、最終的な伽藍配置そのものを疑う必要はない。ただし、最近の関東地方の国分二寺の調査では、中心伽藍の造営が２時期に及んだことが判明しつつある[17]。この現象が関東地方に限りみられるものなのか、それとも全国的な現象であったのかはまだ明らかではない。しかし、国分寺の造営に関する謎を解くためにも、また附属諸院の配置を明らかにするためにも、伽藍地内での再調査が必要となる時期が早晩やってくることと思われる。

さて、当寺と同じように、回廊をめぐらす金堂院の西側に塔を配した伽藍配置を全国に求めると、隣国の三河国分僧寺（回廊からは当寺より離れている）と、上野国分僧寺（西面回廊のほぼ中央）・但馬国分僧寺（西面回廊のかなり北寄り）・伊豆国分僧寺（回廊の南西隅外に塔が位置する）・伊賀国分僧寺（回廊南西隅からかなり離れる）を数えるにすぎない。一方、反対の位置、つまり回廊の東に塔を置く伽藍配置には、下野国分僧寺・佐渡国分僧寺・甲賀寺（塔院をめぐらすか）・陸奥国分僧寺（塔院あり）・山城国分僧寺（塔院あり）・唐招提寺（塔院あり）・尾張国分僧寺（回廊の有無不明）などがある。回廊の西にしろ東にしろ、塔の位置にあまり厳密な規則性はなく、東に配した例の中には塔院をめぐらす例が小数ながらあることが判明した。したがって、遠江国分僧寺の伽藍位置は、国分僧寺の代表ともいえる東大寺の伽藍配置から東塔院を省略し、さらに西塔の塔院を省略した形式とみなすことができよう。

注

1　山路直充「寺院地という用語」『下総国分寺跡　平成元～５年度発掘調査報告書』市立市川考古博物館研究調査報告　第６冊　1994年
2　須田勉「国分寺創建の諸問題」『シンポジウム　関東の国分寺　在地からみた国分寺の造営』関東古瓦研究会　1994年
3　石田茂作『遠江国分寺の研究』　磐田市教育委員会　1962年
4　『類聚国史　後篇』新訂増補国史大系第６巻　吉川弘文館　1933年
5　磐田市教育委員会『遠江国分寺跡周辺遺跡（国分寺西遺跡）発掘調査報告書』1986年
6　磐田市教育委員会『平成元年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』1990年
7　平野吾郎「遠江・駿河における屋瓦と寺院」『静岡県史研究』第６号　1990年
8　群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』1988年
9　奈良県教育委員会『重要文化財　法隆寺西院大垣南面（南大門東方）修理工事報告書』1974年
10　奈良国立文化財研究所「ｃ桑地の問題」『平城宮発掘調査報告Ⅲ－内裏地域の調査－』奈良国立文化財研究所学報第16冊　1963年8月
11　磐田市教育委員会『平成６年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』1995年
12　静岡県教育委員会『国分寺・国府台遺跡　県立磐田南高等学校仮設校舎およびプール・給食棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1989年
13　磐田市教育委員会『匂坂上２号遺跡・遠江国分寺跡周辺発掘調査報告書』1984年
14　前掲注２文献
15　磐田市教育委員会『昭和62年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』1989年
16　前掲注７文献
17　前掲注２文献

第2節　遠江国分寺の瓦と寺の造営

森　郁夫

はじめに

遠江国分寺の軒瓦、とくに軒平瓦の形態と瓦当文様はきわめて特異であり、多くの研究者から関心がもたれているところである。それらの瓦に関しては近年、平野吾郎氏によって研究が進められており、軒瓦の分類・編年が行われている[1]。そして、生産体制を含んだ問題点もいくつか抽出されている。確かに遠江国分寺の瓦には解決しなければならない問題点がいくつも含まれている。主要なものとして次のような事柄をあげることができよう。

1　軒丸瓦の文様構成は、国分寺造営期のものとしてさほど違和感はないが、軒平瓦の形と文様構成がきわめて特異なこと。

2　遠江国内に見られる奈良時代の軒瓦の中には、平城宮系のものが見られるにもかかわらず、当国分寺ではごく一部を除いて独自な文様をもつもので占められていること。

3　片山廃寺（駿河国分寺）所用瓦を生産した、静岡市宮川瓦窯で遠江国分寺軒平瓦の一部が作られていること。

これら3項については、それぞれを検討することによって、遠江国分寺の造営そのものに関わる問題が派生してくるであろうし、他国との造営過程の違いを考える手がかりにもなるであろう。とくに第3項には特殊な事情が含まれているようにも考えられるので、小稿においては第3項を重点に述べる。なお、軒瓦の分類と時期区分に関しては、磐田市教育委員会によって新たな資料に基づいて行われているが、ここでは基本的に平野吾郎氏の論攷「遠江国分寺の造営と地方豪族の動向」に導かれて述べることにする。

（1）軒瓦の分類

まず、軒瓦の分類の概略を述べておこう。遠江国分寺関係の軒瓦は軒丸瓦がAからFまでの6種類に、軒平瓦がAからJまでの10類に分類され、それらはⅠからⅣまでの4期に編年されている。それらの文様構成と生産年代などの概要は以下のとおりである。

軒丸瓦

基本的な瓦当文様は単弁蓮華文である。

A類　線鋸歯文縁単弁8弁蓮華文で、中房の蓮子は1＋4である。蓮弁の長さの違いによって2種類に細分されている。

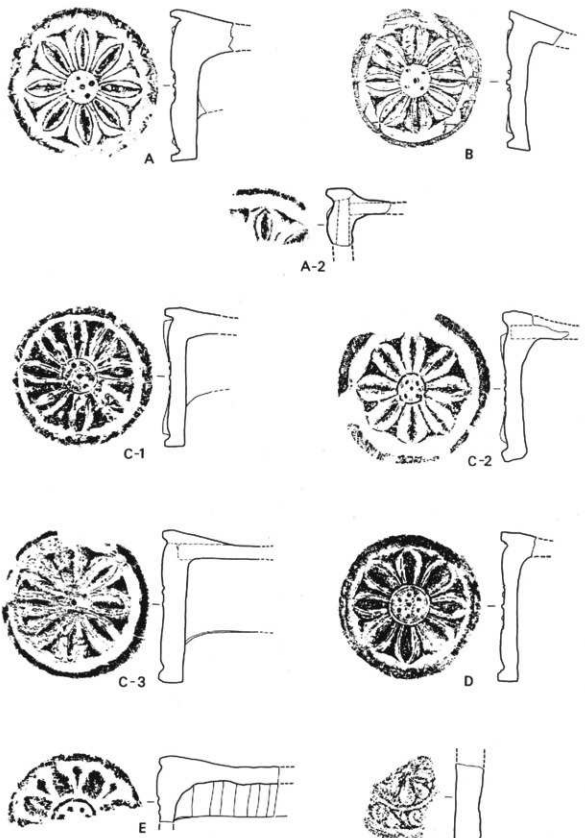
B類　線鋸歯文縁単弁8弁蓮華文で、中房の蓮子は1＋4である。A類に近似しているが、間弁がやや大きい。外縁には直立縁と斜縁とがあり、鋸歯文数も瓦当径の違いによって2種以上に細分される。

C類　素縁単弁8弁蓮華文で中房の蓮子は1＋4である。蓮弁と中房の輪郭線の有無によって3種類に細分されているが、さらに細分が可能という。

D類　線鋸歯文縁単弁8弁蓮華文で、中房の蓮子は1＋6である。直立縁にめぐらされた鋸歯文はA類より細かく、中房は円圏で区画される。

E類　素縁単弁8弁蓮華文・中房の蓮子を1＋6に復元できる。外縁は文様区より低い。丸瓦部凹面には粘土紐巻き上げの痕跡が明瞭に残っている。

F類　素縁唐草文縁単弁8弁蓮華文である。内外区は二重圏線で区画される。瓦当面全体が平板で文様が明確でない。とくに中房の文様は鮮明でない。



第43図　遠江国分寺周辺出土軒丸瓦（縮尺1／5）

第44図　遠江国分寺周辺出土軒平瓦（縮尺１／５）

軒平瓦

H類を除き瓦当部が三日月形に作られ、蕨手文様、あるいはS字文様を瓦当文様としているが、これは唐草模様の変形である。

A類　かつて「均整蕨手唐草文宇瓦」と分類されたものである[2]。上方から子葉を伴って垂下する唐草文を左右均整に配している。

B類　上方から垂下する唐草文を左右均整に配しているが、子葉が伴わず、中央の軸も失われている。

C類　唐草文がさらに変形し、S字形、逆S字形の文様、対向S字形とでもいうような文様を左右均整に配している。

D類　対向する中心葉の左右にS字形文様を配しており、文様細部の違いにより2種以上に細分される。

E類　対向する中心葉の左右に対向S字形文様を配している。文様が陰刻のものもE類に含まれている[3]。

F類　対向する中心飾りをもつとはいうものの、文様はかなり変形し、すでにS字形をもとどめていない。

G類　陰刻の連弧文を飾っており、細部の違いによって2種以上に細分される。

H類　小片のため文様の全容をつかみかねるが、外から内へ反転する唐草文を飾っているようである。

I類　三重弧文の一種とでもいうような文様であるが、上2条は瓦当面のほぼ中心で2分、下1条は4分している。さらに下に瓦当中心部にのみ山形の弧をつけている。

J類　子葉をもたない均整唐草文を飾っている。

以上の軒丸瓦・軒平瓦は次のように時期区分されている。

	軒丸瓦	軒平瓦
Ⅰ期	A	A・B
Ⅱ期	B	C・D・E
Ⅲ期	D	F・G
Ⅳ期	E・F	H・I・J

それぞれの時期に対する実年代は論文3では直接述べられてはいないが[4]、Ⅳ期の瓦の一部が清ヶ谷古窯跡群で生産されており、同古窯跡群で折戸53号窯式段階の灰釉陶器が焼成されていることから、Ⅳ期の瓦の年代が推定されている[5]。しかし、国分寺の大幅拡充と整備が行われたのがⅡ期以後であることが強調されており、文脈から、それが天平19年11月に出された国分寺造営督促詔によるものであることが知られる。したがって、Ⅰ期の年代はそれ以前にあてられることになる。Ⅰ期の瓦は大半が金堂周辺からの出土とされており、遠江国分寺では金堂が創建期の建物であり、天平13年から同19年までの間に工事が進められたことになる。

(2) 軒平瓦C・D類

Ⅱ期におかれている軒平瓦C・D類はよく似た文様構成ではあるが、各単位文がCは左右均整に配置されており、その点ではA・B類に近いといえる。Dは中心飾りに対向する中心葉をおくものの、他の単位文は均整でない。その点からはE類に近い。これらC・D類軒平瓦が静岡市宮川瓦窯跡から出土していることに注目する必要がある[6]。宮川瓦窯跡は清泉寺窪瓦窯跡と小段瓦窯跡の2か所に分かれているが、C・D類軒平瓦は清泉寺窪瓦窯跡の発掘調査の際に出土した。清泉寺窪瓦窯跡には3基の瓦窯跡があり、1・2号窯は有段式の窖窯で、3号窯は有牀式の平窯であり、調査の結果2号→1号→3号の順序で営まれたことが確認されている。そして2号窯からC・D類軒平瓦が出土した。小段瓦窯の操業

年代は８世紀末～９世紀初頃にあてられているので、宮川瓦窯での操業開始時期は８世紀中頃あたりにおかれている２号窯からということができよう。

ここで問題とすべきは軒平瓦Ｃ・Ｄ類が遠江国分寺造営のⅡ期の製品であり、その同笵品が宮川瓦窯跡ではその操業の初期に生産されていることである。宮川瓦窯でのこれら軒平瓦Ｃ・Ｄ類を除いた製品は、いうまでもなく片山廃寺、すなわち駿河国分寺に供給されている。

駿河国分寺瓦窯が、宮川地域の清泉寺窪瓦窯跡と小段瓦窯に限られるのかどうかわからないが、駿河国分寺出土軒瓦のすべての種類が宮川瓦窯跡から出土していることからすれば、ここ宮川瓦窯跡からの供給がその主要なものであったということはできよう。さきにふれたように、遠江国分寺造営のⅡ期は天平19年以降と考えられており、宮川清泉寺窪２号窯の操業が８世紀中頃という所見と矛盾しない。

一方、遠江国内の瓦窯においても国分寺所用瓦の生産が行われている。小笠郡大須賀町清ヶ谷古窯跡群の中、竜天薬師堂古窯から軒平瓦Ｃ・Ｄ３類が出土している。竜天薬師堂古窯は４基程度の窯室で構成されていたようであり、かなり大規模な瓦生産が行われていたと推定されている[7]。宮川瓦窯出土の軒平瓦Ｄ類はＤ３類ではなさそうであるが、Ｃ類はどちらも同一位置でない小破片のため、同笵品かどうかわからない。平野論文ではＣ類の細分については述べられていないが[8]、同時期に遠江と駿河で生産されたとしたならば、Ｃ類の瓦当笵は複数作られたことになる。清ヶ谷古窯跡群において宮東古窯を含めると、第Ⅱ期から第Ⅲ期までの軒瓦が出土しており、ここが天平19年以降における遠江国分寺所用瓦供給の中心地であったことが知られる。

（３）国分寺造営

さて、Ａ類軒瓦の年代比定によって、遠江国分寺の造営工事が、国分寺詔が出されて間もない頃に開始されていたことが明らかになった。このことは当時、遠江が国分寺造営に直ちに対応できる条件を備えていたことを示すものである。その条件とは、経済力に代表される力であるが、造営事業の責任者たる国守の力量ということになろう。国守は中央政府から有為の官人が派遣されるとはいえ、国守によってその力量には自ずから差があったことであろう。天皇の発願による国家的事業であることからすれば、国守の位置づけは重要である。

天平13年の国分寺造営詔では国司等にその造営を命じ、同19年の督促の詔では工事の遅れに関して国司等の怠緩を責めていることからみても、当時の国司の動向には注目すべきである。天平年間の遠江の国司の何人かは史料にその名が残されている。そのうち国守で注目すべきは百済（王）孝忠であり、彼は天平10年４月に遠江国守に任ぜられ、再び同13年８月に遠江国守に任じられている。

奈良時代における百済王一族の活躍には目ざましいものがあった。ひときわ目立つのは百済王敬福であり、最終的には従三位にまで昇っている。彼は中央政府での活躍の他、都合７か国の国守を務めており、陸奥国守在任中に小田郡から黄金の産出を見、大仏への鍍金が叶い、天皇の信任を厚くしたことはよく知られている。その時従五位上であったのが一躍従三位に叙せられたのである。注目すべきは、彼が国守として歴任した国々のうち、出雲を除く陸奥・上総・河内・常陸・伊予・讃岐の各国分寺所用瓦に平城宮系軒瓦が見られることである。在任の年からみて、そのすべてに百済敬福が関わっていたとは言えないが、中央政府と特に密接な関係をもっていたことを示すと同時に、国分寺造営工事の遅れていた国々への「てこ入れ」を示すものでもあろう。

ひるがえって百済孝忠についても、この国守のもとに、いち早く国分寺造営工事が進められたと考えることができる。このことは、遠江において、すでに先行する施設が整っていた可能性があることからも肯かれる。それは、推定寺域の外になるが、北西で検出された掘立柱建物ＳＨ０２（第52次調査）の存在である。桁行９間、梁間５間南北庇付建物であり、国分寺に先行する建物と考えられている。この

建物に対しては、このような大規模な建物が、住居として単独で建てられるとは考えられず、天平９年３月に出された「国毎に釈迦仏の像一軀、挟侍菩薩二軀を造り兼て大般若経一部を写さしめよ」とする詔に基づいて建てられた仏殿であろうとの考え方が示されている。肯んじられる考え方といえる。そのような環境にあったからこそ、遠江では国分寺造営詔が出された後、直ちに造営事業を始めることができたのであろう。

ここでさらに注目すべきは、それに先立つ天平10年４月から百済孝忠が遠江守として在任したことである。さきにふれた掘立柱建物ＳＨ０２が天平９年詔に基づいて建立された仏殿であったとしたならば、国分寺造営詔が出された時に再び遠江守として赴任してきた百済孝忠が、他国に先がけていち早く釈迦仏を安置するために、国分寺の造営にとりかかったと考えることは容易であろう。すなわち、天平10年に赴任し、国守として釈迦像と脇侍の造像に力を尽くし、大般若経の写経を行わしめ、あわせて仏殿の造営に努めた彼が、天平13年の再任によって直ちに国分寺の造営にとりかかったと考えられるのである。天平13年に再任された百済孝忠がいつまで遠江守として在任したか明らかでないが、天平16年２月には安曇江の行幸に際して百済王全福や百済王慈敬らと共に百済楽を奏しているので、その頃までには都に戻ったことが知られる。おそらく国分寺金堂建立の目途はたてていたことであろう。

このように、国守の立場に注目して国分寺の造営事業を概観した場合、百済孝忠の２度にわたる遠江国守在任は無視できず、遠江においては、天平９年から一貫した工事が行われたと考えることができるのである。

では、何故第Ⅱ期の軒瓦の一部が駿河国分寺瓦窯とでもいうべき宮川瓦窯で生産されたのであろうか。さきにふれたように、片山廃寺の発掘調査では清泉寺窪２号窯の製品が大量に出土しているにも関わらず、遠江国分寺軒平瓦Ｃ・Ｄ類は出土せず、これが駿河国分寺用のものではないことを示している。このことはとりもなおさず、それらの軒平瓦が遠江国分寺に供給するために生産されたことを示している。また、遠江国内の窯業生産地では賄うことができなかったことをも示している。おそらく遠江国内の生産地は繁忙だったのであろう。

ここで疑問に思われるのは、遠江国分寺所用瓦の生産地が、なぜ東に隣接した駿河でなければならなかったのだろうかということである。西に隣接した三河になぜ発注されなかったのであろうか。単純に直線距離を測ってみると、駿河国分寺まで約60kmであるのに対して、三河国分寺までは約45kmである。もっとも、陸路よりも水路ということになれば、駿河湾に近い位置にある宮川瓦窯が便利ではある。三河国分寺との間を水路をとるとすれば、渥美半島に沿って大回りをして豊川を遡ることになるという点も考慮されたかもしれない。しかし、瓦を中心にすればまた別の考え方もありえよう。

１つの考え方は、駿河国分寺軒平瓦の文様構成の変化過程である。駿河国分寺軒平瓦の瓦当文様は大まかに２分でき、１つは花頭形中心飾りの左右に唐草文が反転していくもの、１つは縦横の唐草文を組み合わせた、いわば「くらげ」状の中心飾りの左右に唐草文が反転していくものである。前者は明らかに平城宮系の文様である。それらの瓦当文様は平城宮6663-C型式が反転したものから、花頭形中心飾りが上下逆転したものまで何段階に変化している。この変化の最終段階の文様構成をもつもの、すなわち中心飾りが上下逆転した文様をもつ軒平瓦は、三河・尾張・飛騨・越中の各国分寺で主要なものとして使われている。したがって、これらの国々は駿河国より遅れて造営工事が開始されたことを示しているのである。そのような事情から、遠江国では不足分の瓦を駿河国に求めることになったのである。

以上述べたように、出土瓦の検討から遠江国が、国分寺造営の詔が出された天平13年からさほど時を経ずして工事が始められたことが明らかになった。遠江国分寺に関しては、冒頭に述べたように軒平瓦の形態が奈良時代一般のものと異なること、畿内系の瓦当文様が遠江国内で作られていながら、国分寺

で見られないことの２項が問題点として残る。前者に関してはさほど瓦生産に関わりが深くない工人が国衙における生産体制に組み込まれて生産活動に従事した可能性が考えられる。その工人たちは、瓦当文様の製作、瓦当笵の製作などに関与したということになれば、必ずしも瓦工ではない。異分野の工人の関わりがあったことをうかがわせる。後者に関してはそうした傾向、すなわち平城宮系の瓦が各地で見られるようになるのが天平19年以降のことであることから、すでに造営工事が進められていた遠江国では、中央政府から技術は国分寺造営に協力していた豪族達に振り向けられたと考えることもできよう。これら２項に関しては改めて検討する必要があろう。

注

1　①平野吾郎「遠江国分寺跡出土瓦と瓦屋について」(『古代探叢』２　1985年)
　②平野吾郎「遠江・駿河における屋瓦と寺院」(『静岡県史研究』６　1990年)
　③平野吾郎「遠江国分寺の造営と地方豪族の動向」(『古代』97　1994年)
2　石田茂作『遠江国分寺の研究』1962年
3　文様構成が左右逆転しており中心飾りもないので、この陰刻の軒平瓦は本来別類とすべきとも考えられる。
4　注１－③
5　折戸53号窯式は10世紀後半に位置づけられている。愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）付・猿投窯の編年について』1983年
6　中野宥「宮川瓦窯群」(静岡県教育委員会「静岡県の窯業遺跡」『静岡県文化財調査報告書42』1989年) いずれも小片であるが、第104図-13は明らかにD類である。同104-12は復元図からはC類にあてることができるが、唐草文の巻き込みの状況からD類の向かって左第１・２単位に復元できる可能性もある。小稿では、宮川瓦窯から遠江国分寺所用瓦との同笵品が出土したことに注目しているので、ここではC・D類軒平瓦としておく。
7　注１－①
8　注１－③

第Ⅵ章　ま　と　め

遠江国分寺は、静岡県磐田市見付の地にあり、南側に僧寺、北側に尼寺が配置されている。古代には東海道15国の６番目、遠江国磐田郡に所属。天竜川左岸に形成された洪積台地＝磐田原台地の南縁部の中泉丘陵東縁、標高17ｍ～19ｍの平坦部に位置する。東側には大之浦（中世～「今之浦」）という古代には湖沼であった低湿地の北端部が入り込んでいた。近年、この地域に国庁が存するとも考えるに至った。

遠江国は、東は大井川を境に駿河国、西は三河国、北は信濃国に接し、南は太平洋・遠州灘に臨む。国名は滋賀県の琵琶湖を「近淡海（ちかつおうみ）」と称したのに対して、浜名湖を「遠淡海（とおつおうみ）」と称したことに由来するといわれている。「旧事本紀」の「国造本紀」に遠淡海国とあり、成務天皇のときに伊岐美が遠淡海国造に任じられたのに始まるという。「国造本紀」にみえる遠淡海国造・久努国造・素賀国造などが支配する国が、大化改新後統合され東海道に属する一国として遠淡海国と称したと考えられている。さらに、和銅６年に国郡里の名は２文字を用い、嘉字を採用せよとの勅命に基づいて「遠江国」とされた。

律令制の時代には、各国は大国・上国・中国・小国の４つの等級にわけられていた。延喜式が編纂された10世紀には遠江国は上国であった。しかし、養老３年（719）７月には、遠江守大伴宿禰山守が駿河・伊豆・甲斐の３か国を行政監察する按察使（あぜち）となっており、遠江国がこの地域のなかで特に重要視された国であったことを示し、遠江国の役人の官職名の変遷から考えると、養老３年（719）から延暦３年（784）までの期間は大国へ格上げされていたものと思われる。しかし、それ以降の国守は、上国の守の相当位である従五位以下がほとんどであるので、８世紀末には上国に復したと考えられる（「静岡県史通史編１原始古代」第三章「国郡制の成立」）とされている。

今回までの調査によって明らかにされた主要な点を要約すると、次の通りである。

【境内地】（＝伽藍地）

七堂伽藍と呼ばれている中心施設をさし、南門からのびる塀や溝といった区画施設をともなう範囲である。

僧寺の境内地の西側を区画する築地及び溝が、北側へ延長していることが今回の第112次発掘調査で確認された。（築地＝土居，土塁）また、西側築地の内側の発掘が初めて行われ、築地の内側にも雨落ち溝が存在することを確認した。築地本体を復元すると、下端幅1.5ｍ（５尺）、高さは2.4ｍ（８尺）以上、屋根の高さを含めた総高は3.3ｍ、軒の出は2.8ｍ（９尺）ほどとされる。

南側を区画する築地の遺構として、南大門の東で築地南側の溝が検出されている。北限を区画するものとして、金堂の中心から北へ約163ｍ（543尺）で検出された東西溝２条と築地基底部が、築地の痕跡だとすれば、境内地の南北の規模は約253ｍ（843尺）に復元される。東限の施設は未発見であるが、地形等から３種類の案が提示され、そのうちＡ案が有力とされて、境内地の東西の規模は約180ｍと推定される。

【寺院地】

「境内地」を囲む外側に、寺の運営に必要な付属施設が設けられ「付属院地」として分けるが、それを含めた広い寺域をさして寺院地とする。

諸国国分二寺と比較すると、遠江は大国であり、この寺院地を区画する施設に関する手がかりが少ないが、国分僧寺とその北に位置する尼寺を有機的に結ぶ広大な寺院地の存在が想定される。北側と東側は地形上、磐田原台地中央丘陵の崖線まで広がっていた可能性が高い。西側は第40次、第52次調査で発見された南北溝が注目され、寺関係の小字名の分布の西限や内側に掘立柱建物等の関連施設が発見されている状況からも、寺院地の西側を区画するものであることが裏付けられるだろう。尼寺を併せた寺院地は南北およそ700m、東西は南の方で約400m、北の方では約250～300mと推定される。

【伽藍配置】

僧寺の伽藍配置は金堂と中門を結ぶ回廊によって作られた金堂院の西南方に塔を配置し、北側に講堂を配置している。国分僧寺の代表ともいえる東大寺の伽藍配置から東塔院を省略し、さらに西塔の塔院を省略した形式とみなされる。

【国分寺造営】

遠江国分僧寺の造営工事は、A類軒瓦の年代比定によって天平13年（741）の国分寺詔が出されてまもない頃開始されたことが明らかになった。大国の時代に造営されたのである。当時の遠江国守百済孝忠のもとに、他国にさきがけていち早く国分寺造営が進められたとすれば、すでに遠江においては、先行する施設が整っていた可能性があることが考えられる。それは、僧寺北西で検出された掘立柱建物SH02（第52次調査）の存在であり、桁行9間、梁間5間南北庇付き建物という大きさと年代感から、天平9年（736）の国毎に丈六釈迦像を造り大般若経を写せという詔に基づいて建てられた仏殿の可能性が示される。

【磐田南高等学校校地内の遺構について】

現在、校舎の建っている南側の区域には、遠江国分僧寺の伽藍地内と考えられる遺構が残存している。さらに、遠江国分寺の寺院地は、遠江国分僧寺の伽藍地と、グランドの北側に存在する遠江国分尼寺の伽藍を含めた範囲とされ、磐田南高等学校の校地はすべて寺院地に含まれることになる。実際に、校舎の西側のプール周辺は寺院地の中の関連施設が存在する。

今回の調査では直接グランド部分を発掘調査する事はできなかった。しかし、今までのグランド周辺における発掘調査の成果等から、グランド部分の遺構・遺物包含層の残存状況を検討（第40図）したところ、グランドの区域の旧地形は、北から南へ傾斜しており、学校用地造成工事の時土手状に残された北側・西側部分以外は、かなり削平されているものと考えられる。ところが、断面図によると、グランドの南側及び東側には遺物包含層が残存していると推定される状況である。グランドには、暗渠排水の溝が碁盤の目状に掘削され破壊が及んでいる部分もあるだろうが、グランドにおける遺構残存状況については、今後も発掘調査による詳細な確認が必要と考えられる。

付編1　遠江国分寺周辺の主な発掘調査一覧表

調査次	調査期間	所在地	調査面積	調査の起因・目的	調査主体（担当者）	主な検出遺構・遺物
第1次	昭和26年 9/17～9/30	国府台	700㎡？	都市計画	市教委（石田茂作・斎藤忠・黒板昌夫・三宅敏之）	塔・金堂・講堂・回廊・中門・南門
第2次 (尼寺)	昭和40年 3/4～3/20	国府台			市教委 （斎藤忠・平野和男）	国分尼寺の基壇4基（中央及び第1～3基壇）
第3次	昭和57年 5/			個人住宅の建築	市教委	土塁に平行して走る一条の溝
第4次	昭和57年 8/21～9/21	見付3,066	60㎡	磐田南高グランド東側拡張工事	市教委 （山崎克巳）	溝・小穴
第5次	昭和58年 1/5～3/1	磐田南高校敷地内		はぐま会館建設	市教委 （山崎克巳）	掘立柱建物跡（3間×8間以上） 土坑32・溝18・小穴42
第6次	昭和58年 4/26～4/27	見付3,049-1	5㎡	排水溝改修工事	市教委 （山崎克巳）	溝と考えられる落ち込み・土坑・不整形の浅い落ち込み・小穴
第7次	昭和58年 5/13～5/20	見付3,056	21㎡	住宅増築工事	市教委 （山崎克巳）	〃
第8次	昭和58年 6/22～7/20	国府台32-1		確認調査	市教委 （鈴木敬司）	北西から南にかけて地積図に見られる土地区画整理事業以前の水路
第9次	昭和59年 1/11～3/30	国府台国分寺西41-7及び41-8	380㎡		市教委 （山崎克巳）	土墓西側の大溝（堀）・土抗
第10次	昭和60年 9/					遺構なし　瓦・灰釉陶器
第11次	昭和60年 9/	見付3,293-4	100㎡	住宅建設	市教委 （中嶋郁夫）	
第12次	昭和60年 10/11～10/16	国府台43-3	30㎡	住宅建設	市教委 （中嶋郁夫）	遺構なし　須恵器 黒色土器「大十日」
第13次	昭和60年	見付3,084		南高校駐車場建設	県教委	
第14次	昭和60年 11/18～11/29	国府台44-3	20㎡	住宅建設	市教委 （中嶋郁夫）	遺構なし　瓦・灰釉陶器
第15次	昭和60年 12/24～12/25	国府台38-6	150㎡	個人商店建設	市教委 （中嶋郁夫）	遺構・遺物なし
第16次	昭和60年 12/12～12/13	国府台35-8	30㎡	住宅兼店舗建設	市教委 （中嶋郁夫）	遺構・遺物なし
第17次	昭和60年	指定地内（塔・金堂）		説明板付け替え	市教委	瓦
第18次	昭和61年 4/4～4/22	国府台49-7及び49-9	32㎡	客土工事	市教委 （山崎克巳）	
第19次	昭和61年 4/16～4/19	国府台44-11	4㎡	住宅建設	市教委 （山崎克巳）	遺構・遺物なし
第20次	昭和61年 4/22～5/8	見付3,044-1	15㎡	住宅建設	市教委 （安藤　寛）	井戸跡・瓦・灰釉陶器
第21次 (尼寺)	昭和61年 7/28～8/13	国府台44-9	170㎡	住宅建設	市教委 （山崎克巳）	大溝・土抗
第22次	昭和61年 7/28～8/30	国府台45-1	276㎡	確認調査	市教委 （山崎克巳）	
第23次	昭和61年 8/23～8/29	国府台55-10	22㎡	住宅建設	市教委 （安藤　寛）	
第24次	昭和61年 8/20～9/16	国府台41-28及び41-30、41-31	180㎡	確認調査	市教委 （安藤　寛・山口卓也）	国分寺時期の遺構なし 小柱穴群と土抗1基（時期不詳）
第25次	昭和61年 4/22～5/8 12/6～12/26	見付3,044-1	162㎡	住宅建設	市教委　（近藤晴司・山口英正・桑原郁代）	
第26次	昭和62年 1/20～1/27	国府台48-12、48-13	20㎡	住宅建設	市教委 （佐口節司）	溝・瓦
第27次	昭和62年 2/2～2/3	国府台40-16	20㎡	試掘調査	市教委 （佐口節司）	遺構・遺物なし
第28次	昭和62年 2/4～2/9	見付3,037	70㎡	下水道設置工事	市教委 （佐口節司）	築地南側大溝
第29次	昭和62年 2/10～2/28	国府台172、186	70㎡	下水道設置工事	市教委 （佐口節司）	溝
第30次	昭和62年 2/16～2/21	国府台49-7及び49-9	40㎡	住宅建設	市教委 （安藤　寛・佐口節司）	溝・瓦

備　　考	文　　献　　名	調査次
初の国分寺調査（トレンチ）僧寺主要伽藍の配置を確認	『遠江国分寺の研究』　石田茂作・福田恵正	第1次
尼寺の金堂・講堂付近にトレンチ（遺構の把握に関連い）	「昭和63年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡 ―第57次発掘調査報告書―」　木村弘之	第2次 (尼寺)
	「遠江国分寺跡周辺遺跡（国分寺西遺跡）発掘調査報告書」付 篇　山崎克巳	第3次
	なし	第4次
磐田南高校内で初の遺構確認　寺域の広がりを初めて示唆	「国分寺・国府台遺跡　第5次地点」県立磐田南高等学校ぜ ま会館建設に伴う発掘調査報告書　山崎克巳	第5次
神道大成教唯一教協会内 旧東海道に平行して走る溝	「匂坂上2号遺跡・遠江国分寺跡周辺発掘調査概報」 山崎克巳・鈴木節可	第6次
鈴木富由氏宅地内 旧東海道に平行して走る溝	〃	第7次
	〃	第8次
「門塁」が築地であった可能性を示唆	「遠江国分寺跡周辺遺跡（国分寺西遺跡）発掘調査報告書」 山崎克巳	第9次
	〃	第10次
		第11次
		第12次
		第13次
		第14次
		第15次
		第16次
		第17次
遺構は完掘したものがなく、全容を把握できるものはない	「昭和61年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調 査報告書」　山崎克巳	第18次
		第19次
		第20次
「土塁」の延長上に位置する溝（国分尼寺の西の端か？）	「昭和61年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調 査報告書」　山崎克巳	第21次 (尼寺)
	〃	第22次
	山崎克巳	第23次
	安藤　寛	第24次
	〃	第25次
	安藤　寛・山口卓也	第26次
	近藤康司・山口英正・藤原郁代	第27次
		第28次
		第29次
		第30次

調査次	調査期間	所在地	調査面積	調査の起因・目的	調査主体（担当者）	主な検出遺構・遺物
第31次	昭和62年 2/28～3/5	国府台44-5及び44-6	26㎡	住宅増築	市教委（安藤　寛）	土坑・瓦・灰釉陶器・山茶碗
第32次	昭和62年 3/3～3/5	国府台35-7	40㎡	住宅建設	市教委（佐口節司）	遺構・遺物なし
第33次	昭和62年 3/12	見付3,084	20㎡	市営校弓道場建設	市教委（佐口節司）	遺構・遺物なし
第34次	昭和62年 3/25	国府台41-4	10㎡	試掘調査（住宅増築）	市教委（佐口節司）	溝
第35次	昭和62年 5/27～5/28	国府台41-4	4㎡	住宅増築	市教委（安藤　寛）	南北方向に走る2条の溝状遺構
第36次	昭和62年 7/20～9/30	見付3,050	160㎡	住宅新築	市教委（安藤　寛）	遠江国分寺周辺では出土例が少ない奈良時代の遺構と遺物を検出
第37次				公共下水道工事及び側溝工事に伴う立ち会い		
第38次	昭和62年 10/23～12/11	見付3,051	80㎡	住宅新築		
第39次				宅地造成に伴う確認調査	市教委（安藤　寛）	国分寺の瓦の廃棄遺構
第40次	昭和62・63年 12/23～1/14	国府台40-6及び40-14	206㎡	確認調査	市教委（安藤　寛）	トレンチ内で土坑1基・溝状遺構1条・ピット4基
第41次	昭和63年 3/30	国府台44-7		住宅増築	市教委（安藤　寛）	
第42次	昭和63年 5/25	指定地内		園路内整備	市教委	
第43次	昭和63年 4/20～6/29	国府台41-20	150㎡	住宅新築	市教委（安藤　寛）	土壇西側の大溝・土坑
第44次	昭和63年 5/9～5/20	見付3,054-1	84㎡	店舗新築	市教委（中嶋郁夫・竹内直文）	掘立柱建物跡　2棟
第45次	昭和63年 5/9～5/11	国府台43-14	7㎡	倉庫新築確認調査	市教委	遺構・遺物なし
第46次	昭和63年 5/23～5/24	国府台55-1	340㎡	病院駐車場確認調査	市教委	遺構・遺物なし
第47次	昭和63年 6/13～6/29	国府台50-18	260㎡	住宅新築	市教委（安藤　寛）	土坑1基
第48次	昭和63年 6/14～6/28	国府台50-15	116㎡	住宅新築	市教委（安藤　寛・竹内直文）	土坑群
第49次	昭和63年 7/11～7/27	見付3,080-2	33㎡	倉庫新築	市教委	瓦散点・遺構なし
第50次	昭和63年 8/1～10/11	国府台48-14他	320㎡	下水道工事	市教委（安藤　寛・竹内直文）	築堤？、土坑、溝状遺構他
第51次	昭和63年 8/10～10/30	見付3,084	170㎡	南高校仮設校舎	県教委（五島康司・加藤真澄・及川　司）	溝2条
第52次	昭和63年 8/10～10/30	見付3,084	1,400㎡	プール・食堂の建設	県教委（五島康司・加藤真澄・及川　司）	掘立柱建物跡1棟（9間×3間、.廂脱）・柵列・大溝
第53次	昭和63年 9/7	見付3,050 1他	100㎡	駐車場造成（盛土）立合	市教委	遺構・遺物なし
第54次	昭和63年 9/21～10/13	見付3,077-1	50㎡	防災倉庫建設	市教委	溝の一部？
第55次	昭和63年 10/14～10/27	国府台50-33他	58㎡	土留擁壁工事	市教委	包含層、谷状の凹み
第56次	昭和63年 10/15～12/6	見付3,292他	400㎡	住宅新築	市教委（安藤　寛）	土坑（群）、柱穴、溝
第57次（尼寺）	平成元年 1/9～3/4	国府台50-3及び50-4	444㎡	第2次調査時所見を基に学術調査	市教委（木村弘之）	基壇跡（布掘り粂積構）地境溝
第58次	平成元年 1/10～1/11	見付3,084		歩道設置	市教委（中嶋郁夫・安藤　寛）	溝・瓦・須恵器
第59次	平成元年 2/1～2/28	国府台地内	254㎡	下水道設置工事	市教委	遺構・遺物なし
第60次	平成元年 6/1～8/23	国府台41-26他	320㎡	住宅新築	市教委（安藤　寛）	土壇西側の大溝（堀）・土坑

備　　考	文　　献　　名	調査次
		第31次
		第32次
		第33次
		第34次
	「昭和62年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第35次
比較的規模の大きい建物跡と推定される遺構	〃	第36次
	〃	第37次
	〃	第38次
	〃	第39次
第9次検出の大溝よりも内に位置する溝（寺域の西への広がりを示唆）	〃	第40次
		第41次
		第42次
大溝の重複を確認（掘りなおし）	「昭和63年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第43次
1棟は第101次と同じ建物　1棟は不明瞭	〃 中嶋郁夫・竹中康文	第44次
	〃	第45次
	〃	第46次
	〃 安藤　寛	第47次
	〃 安藤　寛・竹中康文	第48次
	〃	第49次
	〃 安藤　寛・竹中康文	第50次
僧寺北側の堀を示す溝か？	「国分寺・国府台遺跡」県立磐田南高等学校仮設校舎およびプール・給食棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　　及川　司	第51次
掘立柱建物跡柱穴・大溝からは瓦の出土なし（創建以前の建物とする説あり）	〃	第52次
	「昭和63年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」	第53次
	〃	第54次
	〃	第55次
	〃 安藤　寛	第56次
国分尼寺の講堂と推定（木製基壇外装か？）	「昭和63年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡 第57次発掘調査報告書一」　　木村弘之	第57次 （尼寺）
		第58次
		第59次
最も残りのよかった溝（新旧を確認、大量の瓦出土）	「平成元年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第60次

調査次	調査期間	所在地	調査面積	調査の起因・目的	調査主体（担当者）	主な検出遺構・遺物
第61次	平成元年 6/26～7/6	国府台35-9	26㎡	住宅新築 確認調査	市教委 （安藤　寛）	国分寺時期の遺構なし
第62次	平成元年 7/26	国府台33-7	5㎡	住宅新築 確認調査	市教委 （安藤　寛）	遺構・遺物なし
第63次	平成元年 8/22～10/23	国府台50-33	370㎡	倉庫建設	市教委 （安藤　寛）	瓦集積・土坑等
第64次	平成元年 9/8～9/30	国府台50-8他	80.5㎡	道路側溝工事立ち会い	市教委 （安藤　寛）	立合調査　溝・ピット
第65次	平成元年 9/18～9/29	国府台50-16	92㎡	住宅新築	市教委 （竹内直文）	ピット・溝・土坑
第66次	平成元年 10/11～12/5	国府台44-15	488㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	溝・土坑等
第67次	平成元年 11/10～11/30	見付3.035他	365㎡	下水道工事	市教委	遺構・遺物は残存せず
第68次	平成元年 11/27～11/30	国府台49-4	12㎡	車庫・物置建設	市教委 （安藤　寛）	瓦出土、遺構は残存せず
第69次	平成元年 12/4～12/12	見付3.037他	240㎡	確認調査	市教委	瓦等出土、遺構は残存せず
第70次	平成元年 3/	国府台地内		水道立会い		
第71次	平成2年 5/10～6/10	国府台47-2	15㎡	車庫増築 立ち合い	市教委	遺物なし
第72次	平成2年 5/28～7/18	国府台49-1他	180㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	溝・土坑等
第73次	平成2年 6/25～7/2	国府台50-8及び50-9	8㎡	倉庫新築 確認調査	市教委 （安藤　寛）	谷・瓦
第74次	平成2年 6/29～7/17	国府台46-12	15㎡	車庫建設 立ち会い	市教委	遺物なし
第75次	平成2年 6/1～7/30	国府台44-8	6.6㎡	住宅増築 立ち会い	市教委	遺物なし
第76次	平成2年 6/1～	国府台や中央町の各家庭		下水管付設 立ち会い	市教委	一括して76次とする
第77次	平成2年 9/5～9/6	国府台45-5	10㎡	住宅新築 確認調査	市教委	遺構・遺物なし
第78次	平成2年 9/5～9/6	見付3.084	50㎡	高校部室建設	県教委	遺構・遺物は残存せず
第79次	平成2年 10/15～10/18	国府台55-2	45㎡	住宅新築 確認調査	市教委 （木村弘之）	溝状遺構2条
第80次	平成2年 10/31～12/18	国府台48-9	150㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	柱穴列・溝状遺構・土坑
第81次	平成2年 12/15～12/28	見付3.078-1他	105㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	溝4条
第82次	平成3年 2/4	国府台46-1	10㎡	住宅増築 立ち会い	市教委	遺物なし
第83次	平成3年 4/8～5/31	見付3.079-1他	350㎡	アパート建設	市教委 （木村弘之）	横列・土坑等
第84次	平成3年 4/23～4/26	国府台55-18他	5㎡	事務所及び倉庫増築確認調査	市教委	遺構・遺物なし
第85次	平成3年 5/20～6/12	見付3.080-2他	150㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	柱穴・溝・土坑
第86次	平成3年 6/17～6/19	国府台43-11	7㎡	住宅改築 確認調査	市教委 （安藤　寛）	瓦
第87次	平成3年 随時	国府台や中央町の各家庭		下水管付設 立ち会い	市教委 （安藤　寛）	一括して87次とする
第88次	平成3年 8/26～10/15 平成3年 8/26～10/15	国府台5-7～13 中泉3.366及び3.367	673㎡ 174㎡	市庁舎別館建設 確認調査 建物基礎撤去ほか 確認調査	市教委 （安藤　寛） 市教委 （安藤　寛）	近世墓 溝・土坑等
第89次	平成3年 10/16～11/14	国府台5-8	340㎡	市庁舎別館建設	市教委 （安藤　寛）	近世墓群関連遺構
第90次	平成3年	国府台55-2	100㎡	住宅新築	市教委	溝状遺構2条ほか

備　考	文　献　名	調査次
	「平成元年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第61次
	〃	第62次
北関部分に、北に関折する谷の存在を確認　国分寺・国府台遺跡建物立地の北限の可能性	安藤　寛	第63次
	〃	第64次
	竹内直文	第65次
	安藤　寛	第66次
		第67次
	〃	第68次
		第69次
		第70次
	「平成２年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」	第71次
	〃	第72次
	安藤　寛	第73次
	〃	第74次
	〃	第75次
	〃	第76次
	〃	第77次
	〃	第78次
	〃	第79次
	木村弘之	第80次
	〃	第81次
	安藤　寛	第82次
近代の畑作跡（イモ又はソバ）	「平成３年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡―第83次発掘調査報告書―」　木村弘之	第83次
	「平成３年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第84次
	〃	第85次
	〃	第86次
	〃	第87次
	〃	第88次
	〃	第89次
	〃	第90次

調査次	調査期間	所在地	調査面積	調査の起因・目的	調査主体（担当者）	主な検出遺構・遺物
第91次	平成3年 10/31	国府台48-6	2㎡	住宅増築	市教委 （安藤　寛）	瓦・土師器
第92次	平成3年 11/20～12/9	国府台48-11	272㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	溝状遺構・土坑・小穴
第93次	平成3年 12/9～12/10	国府台40-13	18㎡	店舗兼用住宅新築 確認調査	市教委 （安藤　寛）	遺構・遺物なし
第94次	平成3年 12/20～12/21	見付3,071-7	8㎡	家族葬園造成 確認調査	市教委 （安藤　寛）	丸
第95次	平成3年 12/20～1/31	見付3,071-6他	58㎡	物置設置場所造成	市教委 （安藤　寛）	中世溝状遺構
第96次	平成3年 12/24～12/26	国府台40-2	28㎡	駐車場造成 確認調査	市教委 （安藤　寛）	土師質土器
第97次	平成4年 5/10～6/3	国府台41-6		砕石敷駐車場造成 立ち会い	市教委 （安藤　寛）	
第98次	平成4年 随時	国府台や中央町の各家庭		浄水設備工事 立ち会い	市教委	
第99次 （記寺）	平成4年 8/27～10/12	国府台49-6	75㎡	砕石敷駐車場造成	市教委 （安藤　寛）	基壇・溝跡（版築をともなう布掘り状遺構）
第100次	平成4年 9/17	国府台50-23及び50-23	11㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	白然遺構の落ち込み
第101次	平成5年 5/24～7/15	見付3,054-1	75㎡	住宅兼倉庫新築	市教委 （安藤　寛）	掘立柱建物跡1棟（4間×2間以上）ほか柱穴25基
第102次	平成5年 6/10～6/22	国府台55-12～55-14	39㎡	住宅新築	市教委 （安藤　寛）	溝状遺構1条
第103次	平成5年 10/12	国府台35-4	5㎡	倉庫兼車庫新築 確認調査	市教委 （安藤　寛）	奈良・平安時代の遺構はなし
第104次	平成6年 2/10～2/28	見付3,039-2	83㎡	住宅新築	市教委	土壇南側の入溝・土坑・掘建遺構
第105次	平成6年 3/10～3/11	国府台43-10	5㎡	住宅新築 確認調査	市教委	遺構・遺物なし
第106次	平成6年 3/10～3/11	国府台35-4	25㎡	住宅改築 確認調査	市教委	近世の溝状遺構
第107次	年間	国府台や見付の各家庭等		下水道配管工事 立ち会い（平成5年度分）	市教委	
第108次	平成6年 6/6	国府台47-3	4㎡	住宅兼倉庫新築 確認調査	市教委	近世～近代の溝
第109次	平成6年 7/20	国府台50-24	20㎡	共同住宅新築 確認調査	市教委	遺構・遺物なし
第110次	平成6年 8/9～8/11	国府台46-2	133㎡	住宅新築	市教委	土坑、瓦・灰釉陶器
第111次	平成6年 9/1～9/2	国府台48-3	4㎡	住宅増築 確認調査	市教委	瓦・灰釉陶器
第112次	平成6年 8/19～8/29	見付3,084	85㎡	校舎建て替え計画に伴う基礎資料収集	県埋文研	築地にともなう入溝、丸

備　考	文　献　名	調査次
	「平成3年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第91次
	〃　安藤　寛	第92次
	〃　安藤　寛	第93次
	〃　安藤　寛	第94次
	〃　安藤　寛	第95次
	〃　安藤　寛	第96次
	「平成4年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第97次
	〃　安藤　寛	第98次
国分尼寺の金堂と推定（僧寺と中心線が同じ）	〃　安藤　寛	第99次（尼寺）
	〃　安藤　寛	第100次
第44次とつながる建物跡　隅木蓋瓦出土	「平成5年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第101次
	〃　安藤　寛	第102次
	〃　安藤　寛	第103次
大溝の改修を平面的に確認	「平成6年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第104次
	〃　木村弘之	第105次
	〃　木村弘之	第106次
		第107次
	「平成6年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書」　安藤　寛	第108次
	〃　木村弘之	第109次
	〃　竹内直文	第110次
	〃　竹内直文	第111次
寺域の検討・確認調査	「遠江国分寺跡の調査」	第112次

（編集：栗野）

付編２　発掘調査遺構図集成

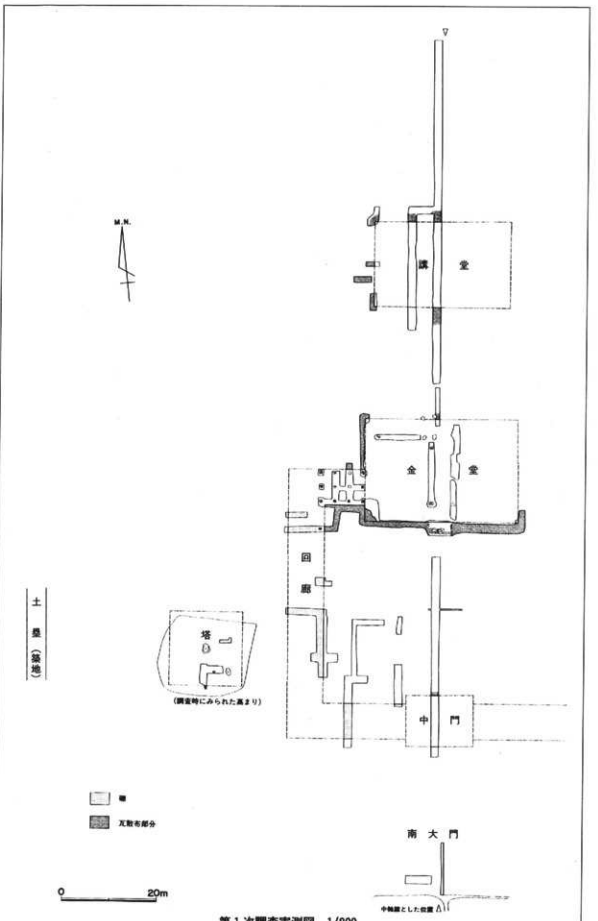
1）　使用した図版は、現在までに発行された遠江国分寺・国府台遺跡に関する調査報告書等より抜粋したものである。（立ち会い・確認調査等により、遺構図のないものもある。）

2）　遺構図の縮尺は、1/100、1/200、1/400、1/800に統一した。

第１次調査実測図 …… 1
第１次調査金堂址平面実測図・正面石階実測図 …… 2
第１次調査塔址平面実測図・心礎実測図 …… 3
第２次調査 …… 30
第３次調査　（な　し）
第４次調査　（な　し）
第５次調査遺構全体図 …… 4
第６次調査　（な　し）
第７次調査　（な　し）
第８次調査　（な　し）
第９次調査遺構配置図 …… 4
第10次調査　（な　し）
第11次調査　（な　し）
第12次調査　（な　し）
第13次調査　（な　し）
第14次調査　（な　し）
第15次調査　（な　し）
第16次調査　（な　し）
第17次調査　（な　し）
第18次調査トレンチ配置図 …… 5･30
第19次調査　（な　し）
第20次調査　（な　し）
第21次調査溝1･2･3、土坑2実測図 …… 6
第22次調査トレンチ配置図 …… 5
第23次調査区実測図 …… 7
第24次調査先土器時代遺構・遺物分布図 …… 7
第25次調査区平面図・南壁断面図 …… 8
第26次調査　（な　し）
第27次調査　（な　し）
第28次調査　（な　し）
第29次調査　（な　し）
第30次調査 …… 30
第31次調査　（な　し）

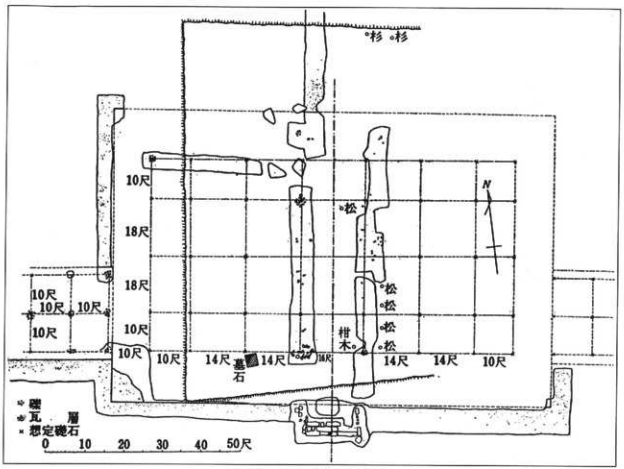
第32次調査　（な　し）
第33次調査　（な　し）
第34次調査　（な　し）
第35次調査区平面図 …… 9
第36次調査地点遺構全体図　（第36・38次調査地点遺構全体図） …… 10
第37次調査　（な　し）
第38次調査地点遺構全体図　（第36・38次調査地点遺構全体図） …… 10
第39次調査　（な　し）
第40次調査区実測図 …… 9
第41次調査　（な　し）
第42次調査　（な　し）
第43次調査地点全体図 …… 11
第44次調査地点全体図 …… 12
第45次調査　（な　し）
第46次調査　（な　し）
第47次調査地点全体図 …… 12
第48次調査地点全体図 …… 13
第49次調査　（な　し）
第50次調査 …… 30
第51次調査遺構全体図 …… 14
第52次調査発掘区全体図 …… 15
第53次調査　（な　し）
第54次調査　（な　し）
第55次調査全体図　（第55・63・73次調査全体図および谷分布図） …… 16
第56次調査地点遺構分布図（完掘状態） …… 17
第57次調査地点全体図　（国家座標の数値を今回修正した） …… 17・30
第58次調査遺構実測図 …… 18
第59次調査　（な　し）
第60次調査地点全体図 …… 18
第61次調査地点全体図 …… 19
第62次調査地点全体図 …… 20
第63次調査全体図　（第55・63・73次調査全体図および谷分布図） …… 16
第64次調査 …… 30
第65次調査地点全体図 …… 20
第66次調査地点全体図 …… 21
第67次調査　（な　し）
第68次調査地点平面図 …… 21
第69次調査　（な　し）
第70次調査　（な　し）
第71次調査　（な　し）
第72次調査地点全体図　（第72・81次調査地点全体図） …… 22

第73次調査全体図　（第55・63・73次調査全体図および谷分布図）…… 16
第74次調査　（な　し）
第75次調査　（な　し）
第76次調査　（な　し）
第77次調査　（な　し）
第78次調査　（な　し）
第79次調査遺構平面図　（第102次および第79・90次調査遺構平面図）…… 32
第80次調査地点全体図　…… 23
第81次調査地点全体図　（第72・81次調査地点全体図）…… 22
第82次調査　（な　し）
第83次調査地点全体図　…… 23
第84次調査　（な　し）
第85次調査地点全体図　…… 24
第86次調査地点全体図　…… 25
第87次調査　（な　し）
第88次調査地点全体図　（第88・89次調査地点全体図）…… 26
第89次調査地点全体図　（第88・89次調査地点全体図）…… 26
第90次調査地点全体図　……19・32
第91次調査　（な　し）
第92次調査地点全体図　…… 27
第93次調査地点全体図　…… 28
第94次調査地点全体図　（第94・95次調査地点全体図）…… 29
第95次調査地点全体図　（第94・95次調査地点全体図）…… 29
第96次調査地点全体図　…… 28
第97次調査　（な　し）
第98次調査　（な　し）
第99次調査地点全体図　（第2次・18次・30次・50次・57次・64次を今回合成した）…… 30
第100次調査地点全体図　…… 31
第101次調査地点全体図　…… 31
第102次調査地点全体図　（第102次および第79・90次調査遺構平面図）…… 32
第103次調査地点全体図　…… 32
第104次調査地点全体図　…… 33
第105次調査地点実測図　…… 34
第106次調査地点実測図　…… 35
第107次調査　（な　し）
第108次調査地点実測図　…… 36
第109次調査地点実測図　…… 35
第110次調査地点全体図　…… 37
第111次調査地点実測図　…… 37

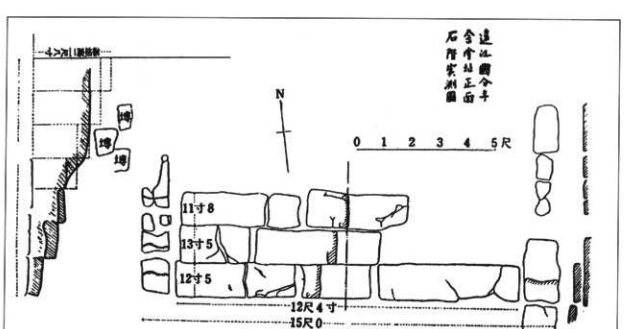


第1次調査実測図　1/800

集成図1

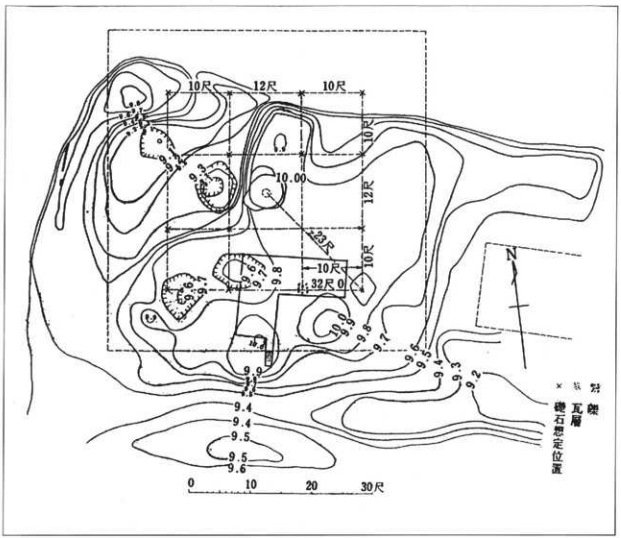


第1次調査金堂址平面実測図

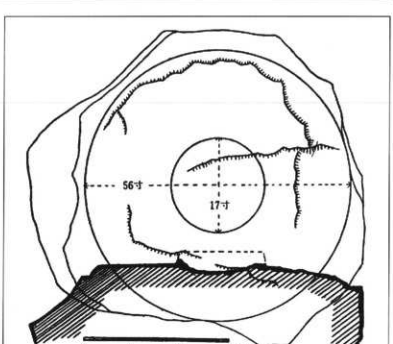


第1次調査金堂址正面石階実測図

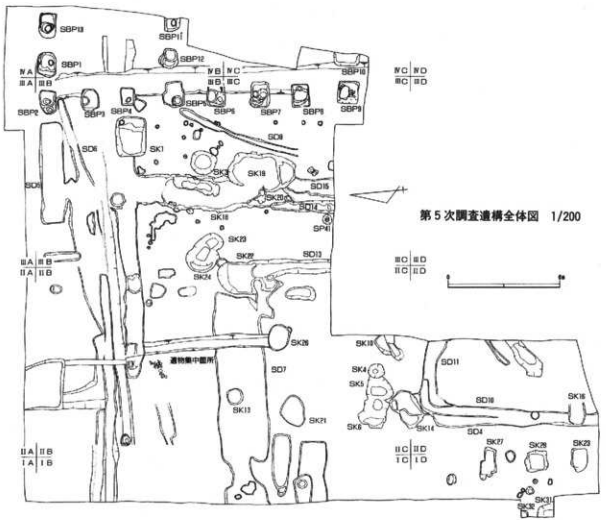
集成図2

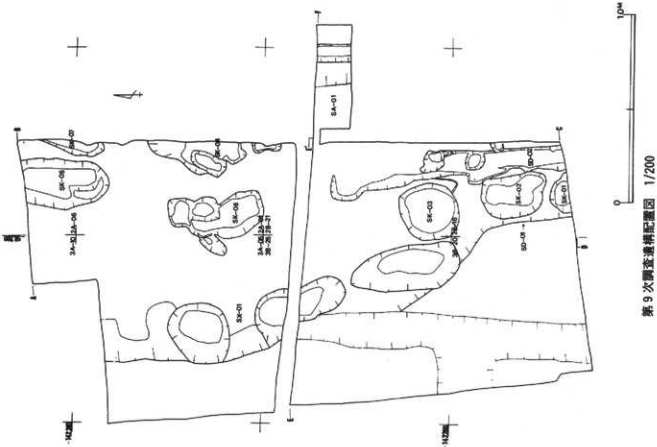


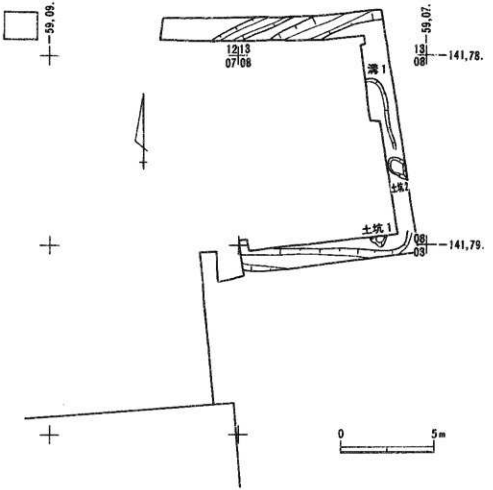
第1次調査塔址平面実測図



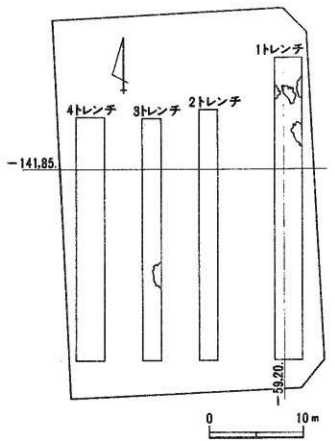
第1次調査塔心礎実測図


SBP10
SBP11
SBP1
SBP12
SBP2
SBP3
SBP4
SBP5
SBP6
SBP7
SBP8
SBP9
SD6
SK1
SK3
SK18
SD15
SK20
SD14
SP41
SK19
SD13
SK24
SK26
SD7
SK13
SK21
SK10
SD11
SK4
SK5
SD16
SK16
SK6
SK14
SD4
SK27
SK28
SK29
SK31
SK32
遺物集中箇所
第５次調査遺構全体図　1/200


SA-01
SK-09
SK-08
SK-07
SK-06
SK-05
SK-04
SK-03
SK-02
SK-01
SD-01
SD-02
SD-03
SD-04
SD-05
SD-06
SD-07
SD-08
SD-09
SD-10
SD-11
SD-12
SD-13
SD-14
SD-15
SD-16
SD-17
SD-18
SD-19
SD-20
SD-21
SD-22
SD-23
SD-24
SD-25
SD-26
SD-27
SD-28
SD-29
SD-30
SD-31
SD-32
SD-33
SD-34
SD-35
SD-36
SD-37
SD-38
SD-39
SD-40

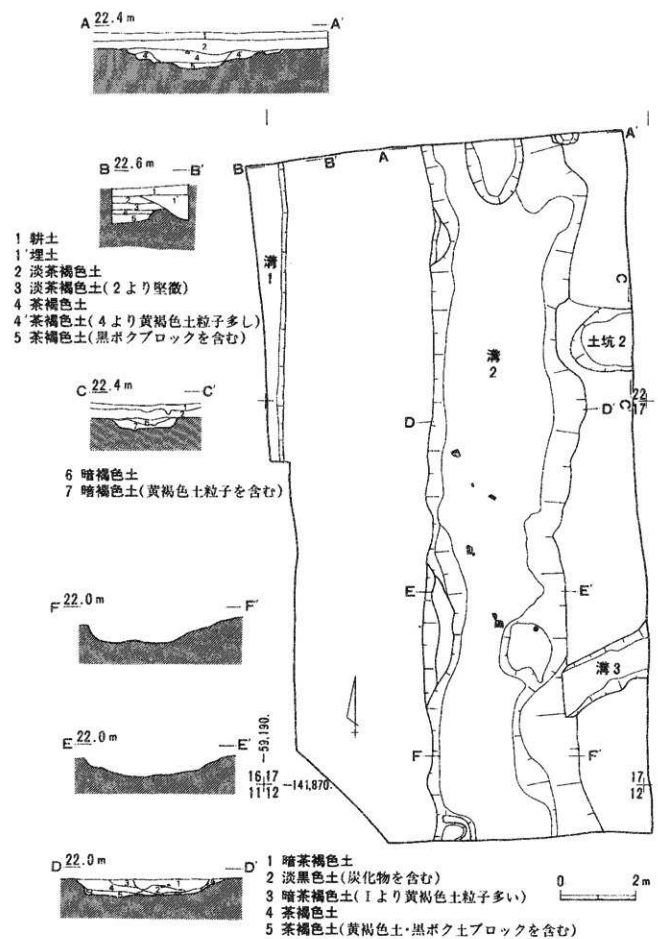


第18次調査トレンチ配置図　1/200



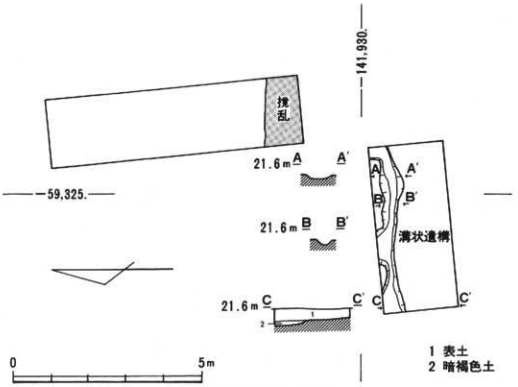
第22次調査トレンチ配置図　1/400

集成図5

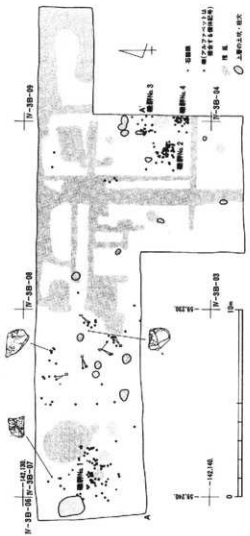


第21次調査溝1・2・3、土坑2実測図 1/100

集成図6

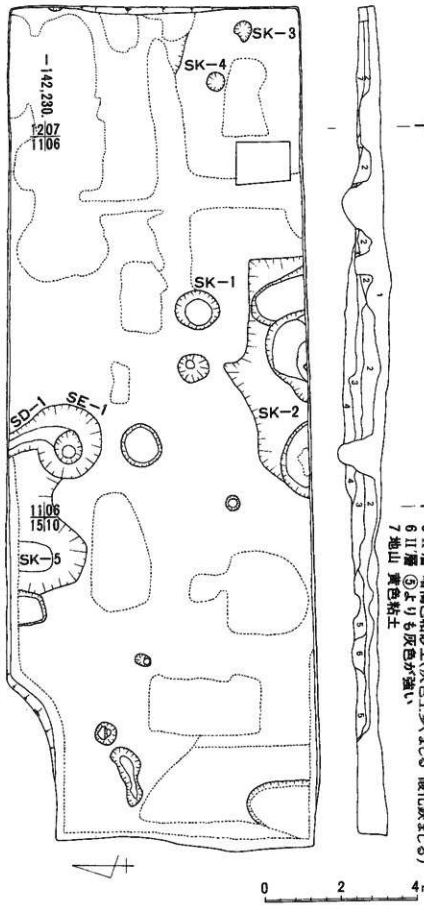


第23次調査実測図　1/100

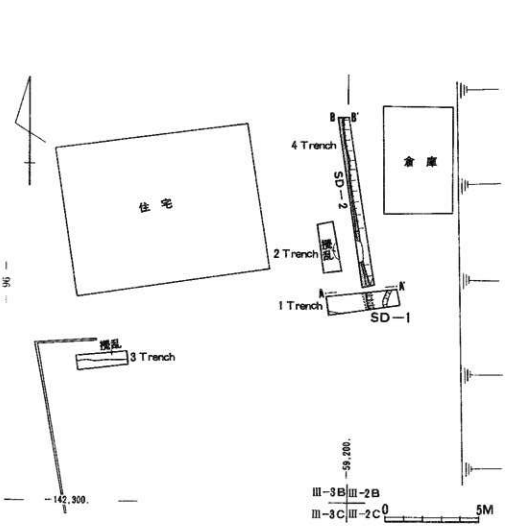


第24次調査先土器時代遺構・遺物分布図　1/200

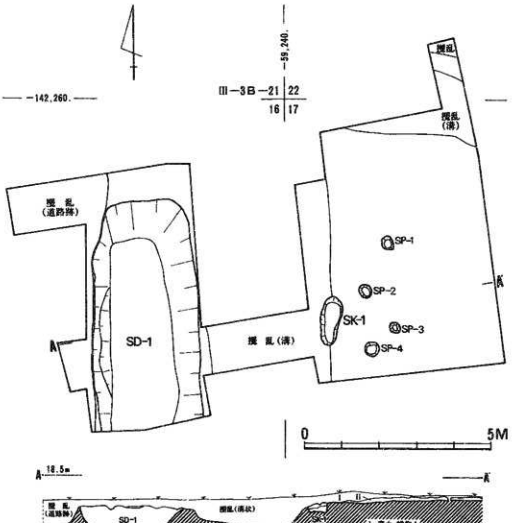
集成図7



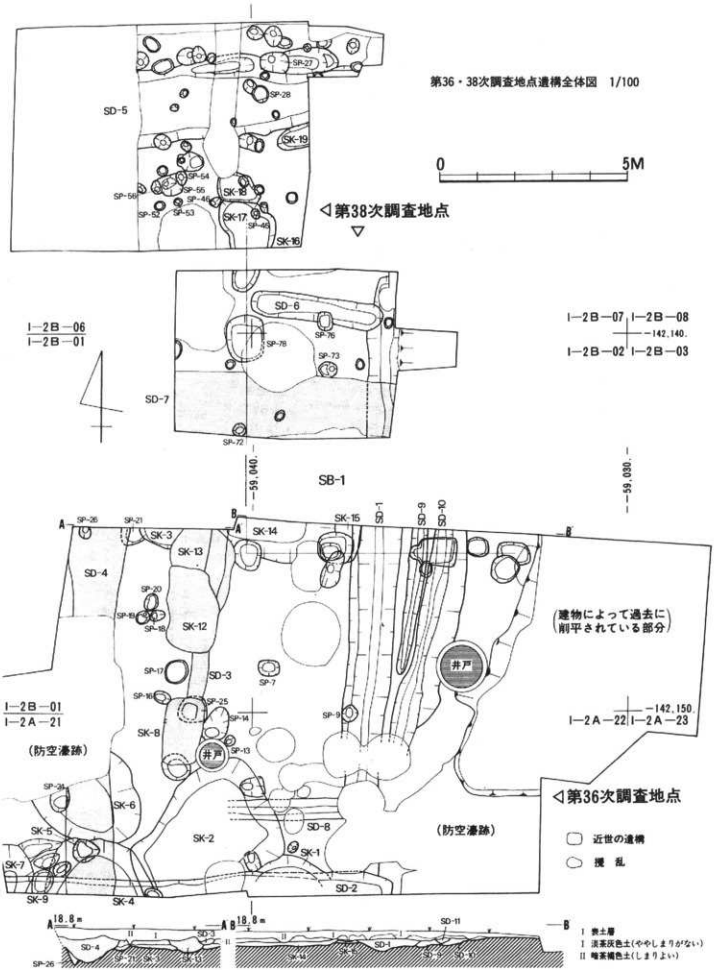
第25次調査区平面図・南壁断面図　1/100



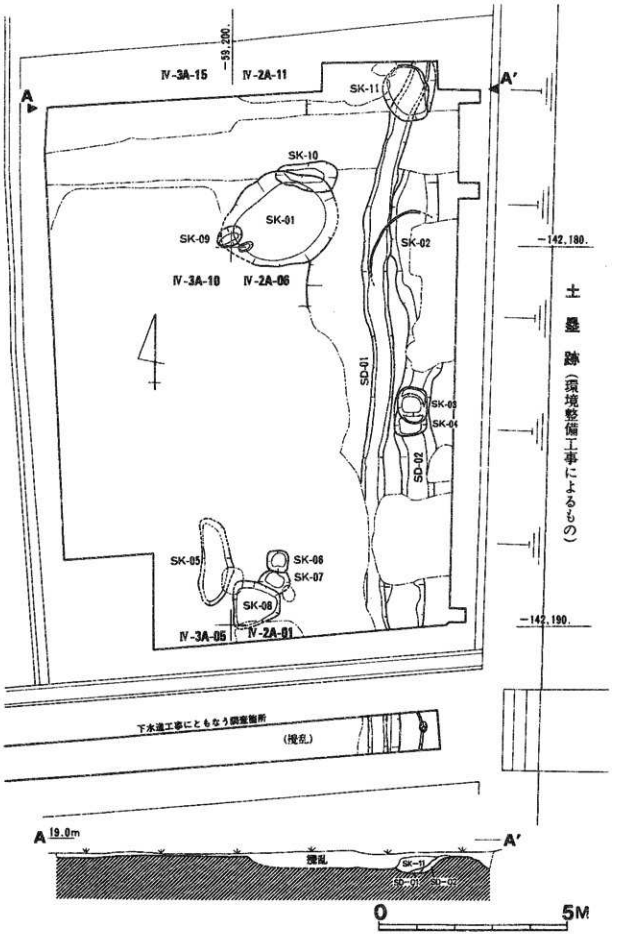
第35次調査区平面図　1/200



第40次調査区実測図　1/100

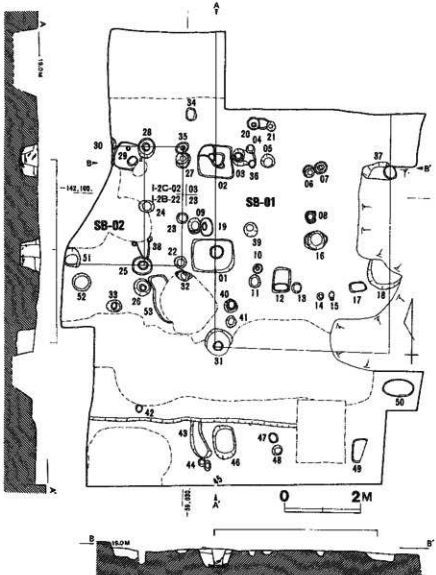

第36・38次調査地点遺構全体図 1/100
0
5M
◁第38次調査地点
SD-5
SD-6
SD-7
SB-1
SK-1
SK-2
SK-3
SK-4
SK-5
SK-6
SK-7
SK-8
SK-9
SK-10
SK-11
SK-12
SK-13
SK-14
SK-15
SK-16
SK-17
SK-18
SK-19
井戸
(防空壕跡)
(建物によって過去に削平されている部分)
◁第36次調査地点
近世の遺構
撹 乱
I 表土層
I 淡茶灰色土(ややしまりがない)
II 暗茶褐色土(しまりよい)

集成図10

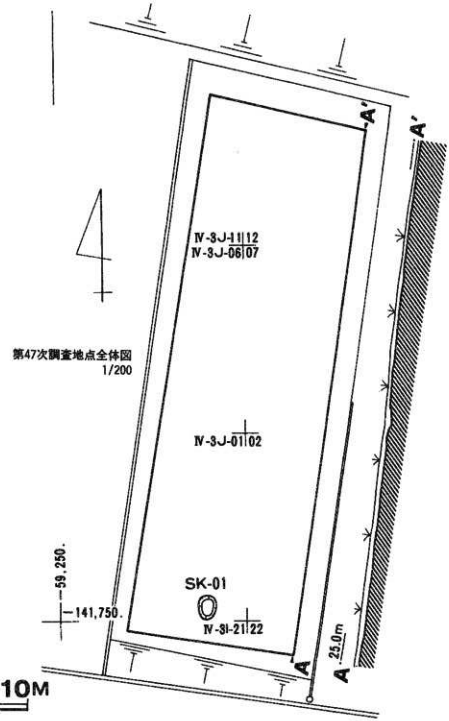


第43次調査地点全体図　1/100

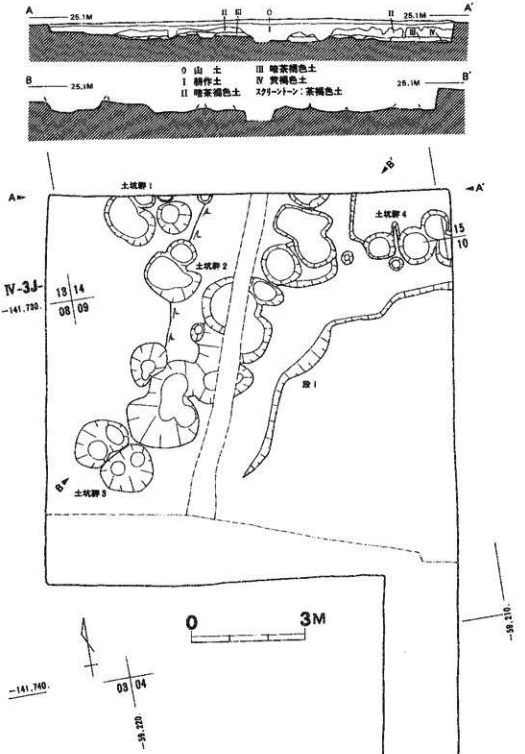
集成図11



第44次調査地点全体図　1/100

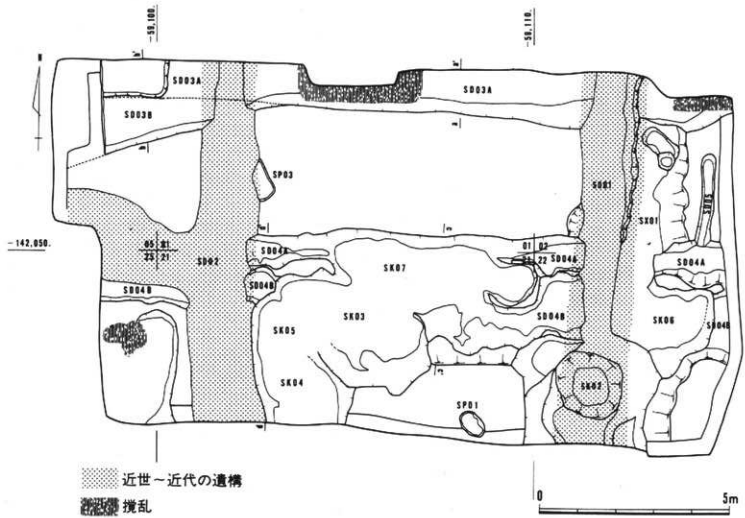


第47次調査地点全体図
1/200

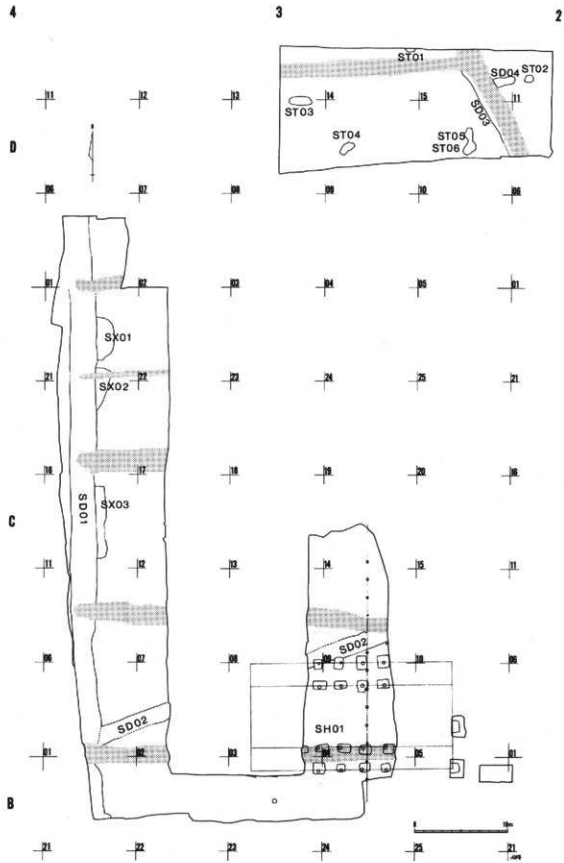


第48次調査地点全体図　1/100

集成図13

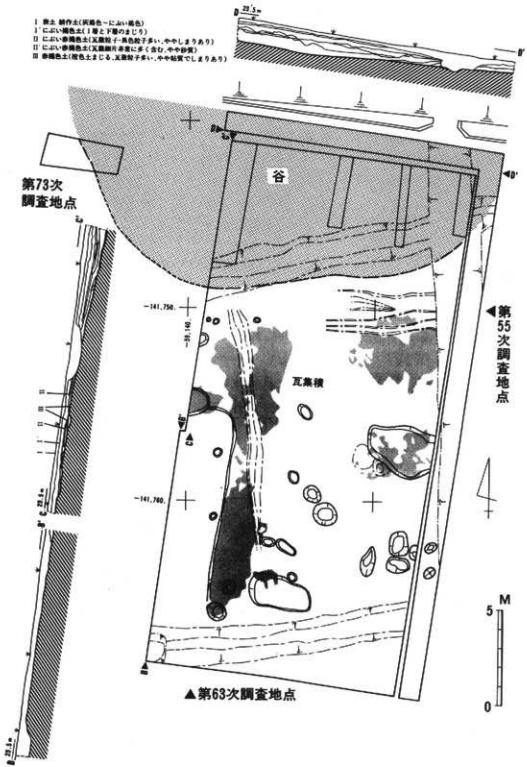


第51次調査遺構全体図　1/100



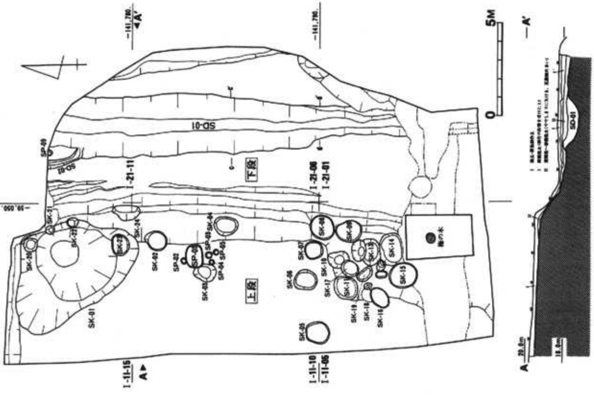
第52次調査発掘区全体図　1/400

集成図15

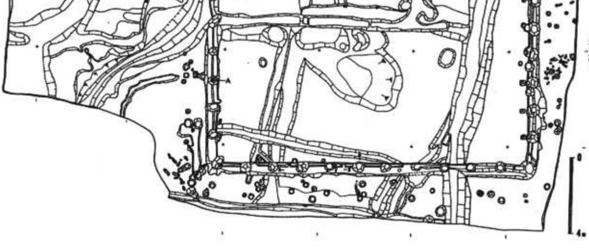


第55・63・73次調査全体図および谷分布図　1/200

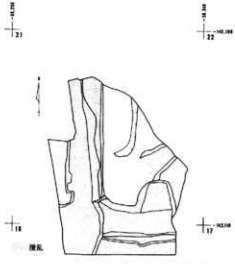
集成図16



第56次調査地点遺構分布図 （完掘状態） 1/200

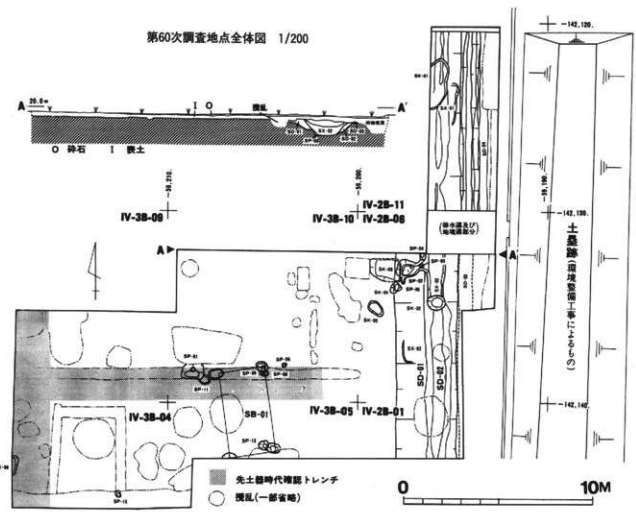


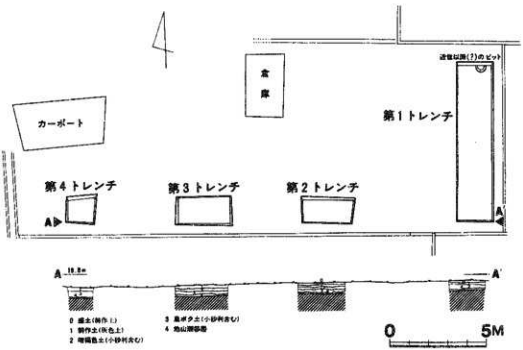
第57次調査地点全体図 1/200



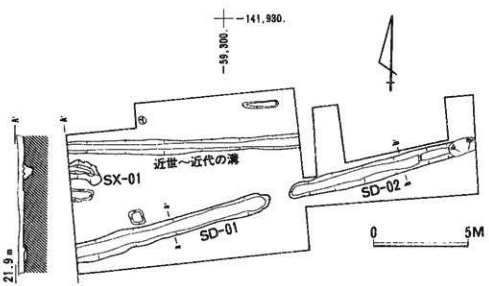
第58次調査遺構実測図　1/200

第60次調査地点全体図　1/200

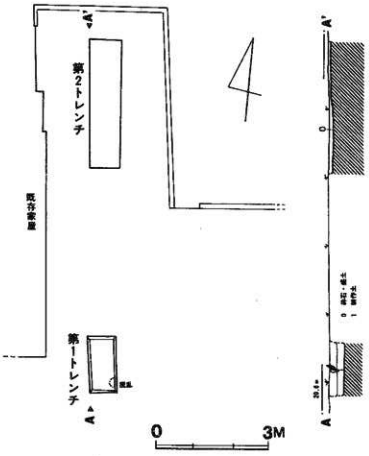




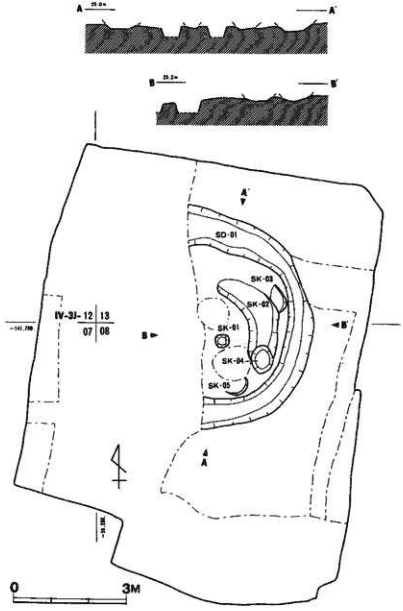
第61次調査地点全体図　1/200



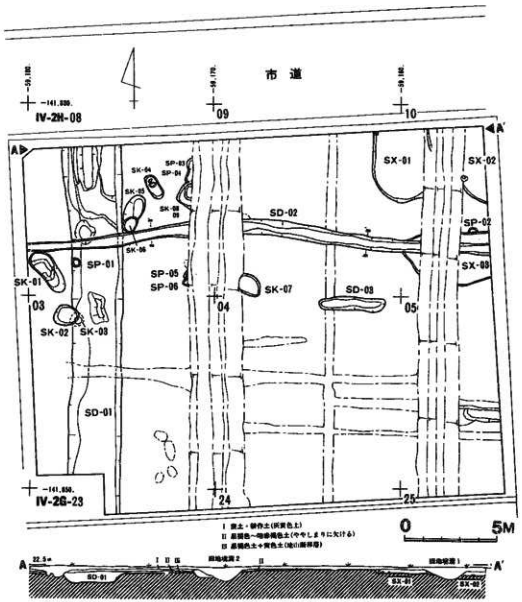
第90次調査地点全体図　1/200



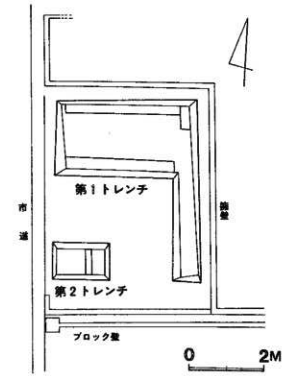
第62次調査地点全体図　1/100



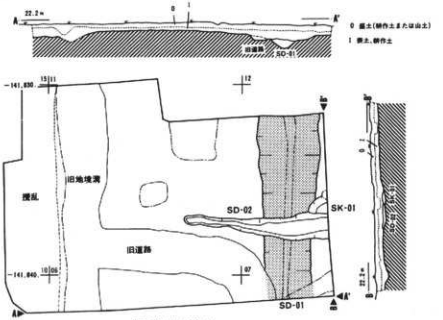
第65次調査地点全体図　1/100



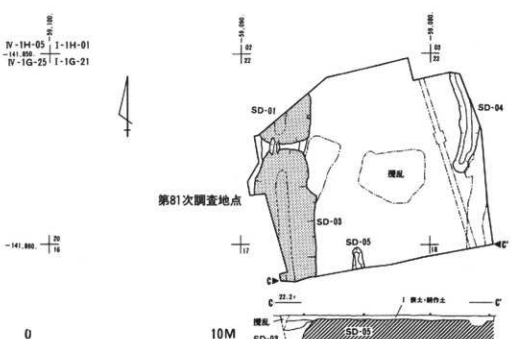
第66次調査地点全体図　1/200



第68次調査地点平面図　1/100

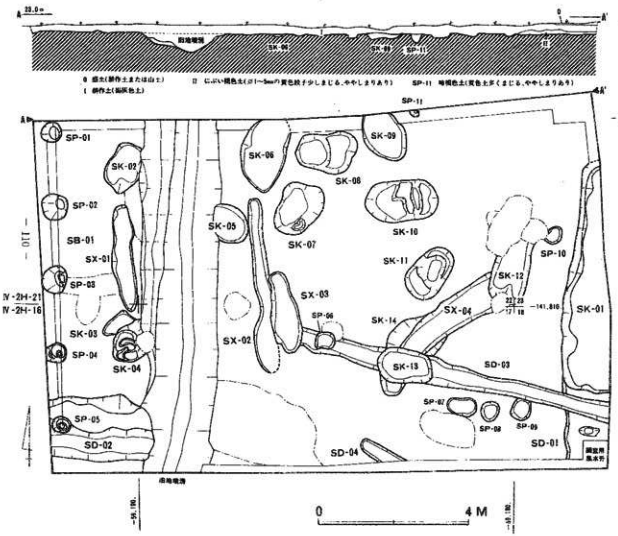


第72次調査地点

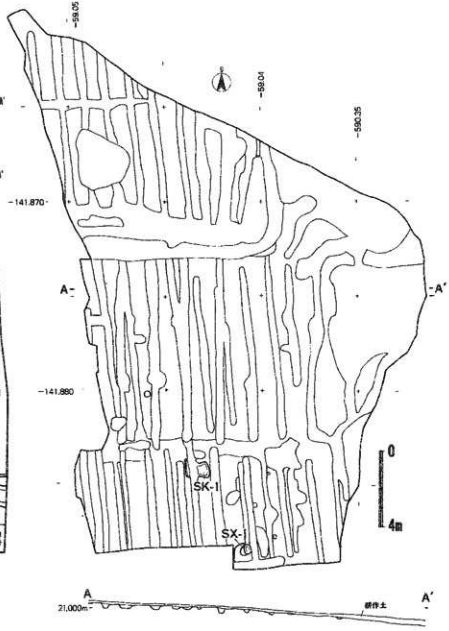


第72・81次調査地点全体図　1/200

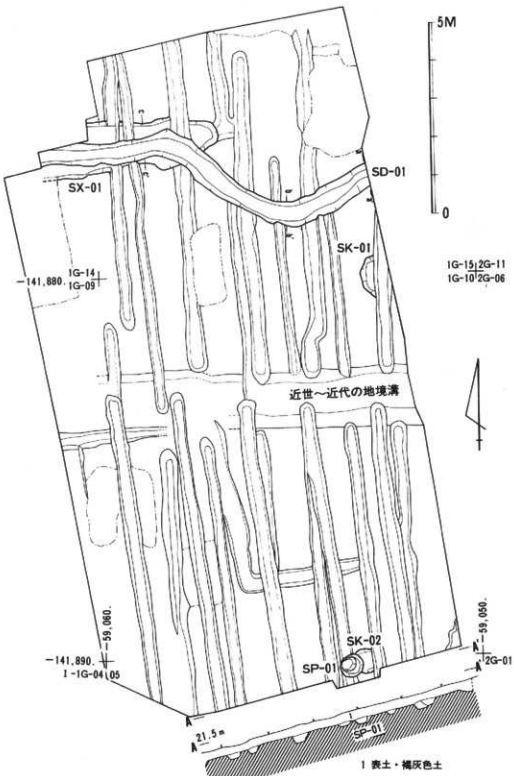
集成図22



第80次調査地点全体図　1/100

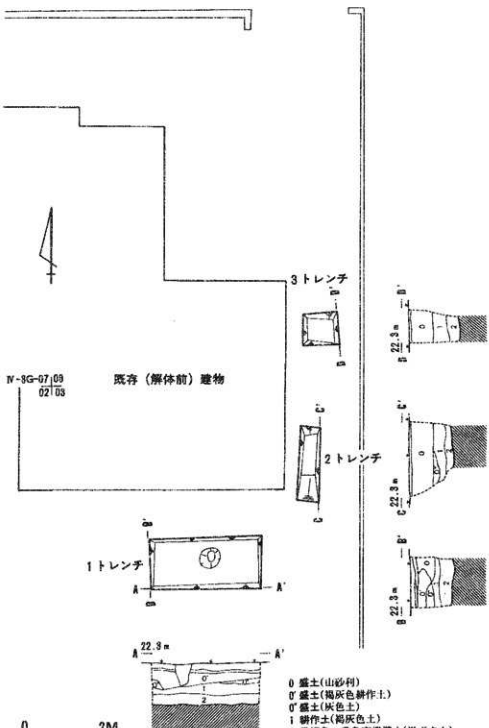


第83次調査地点全体図　1/200



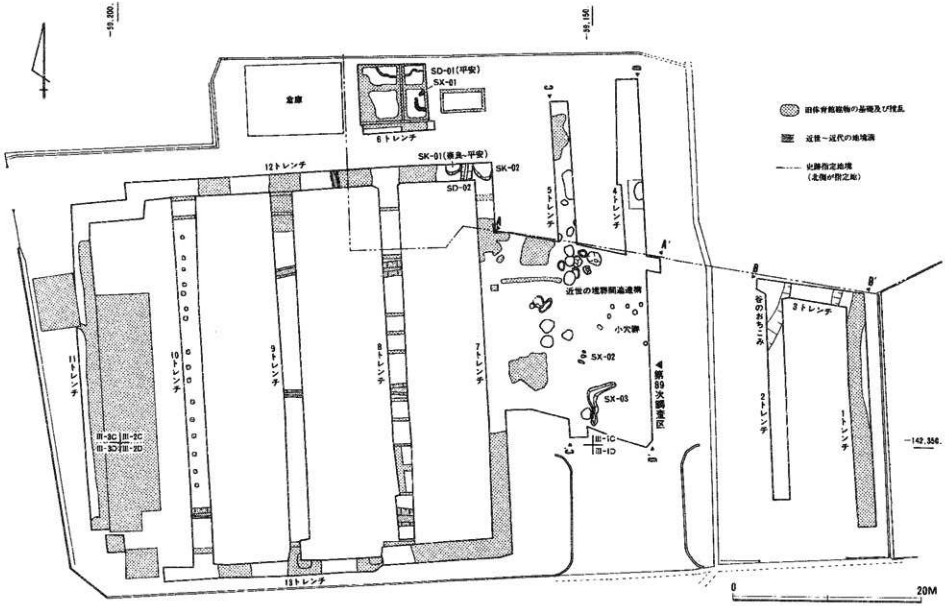
第85次調査地点全体図　1/100

集成図24

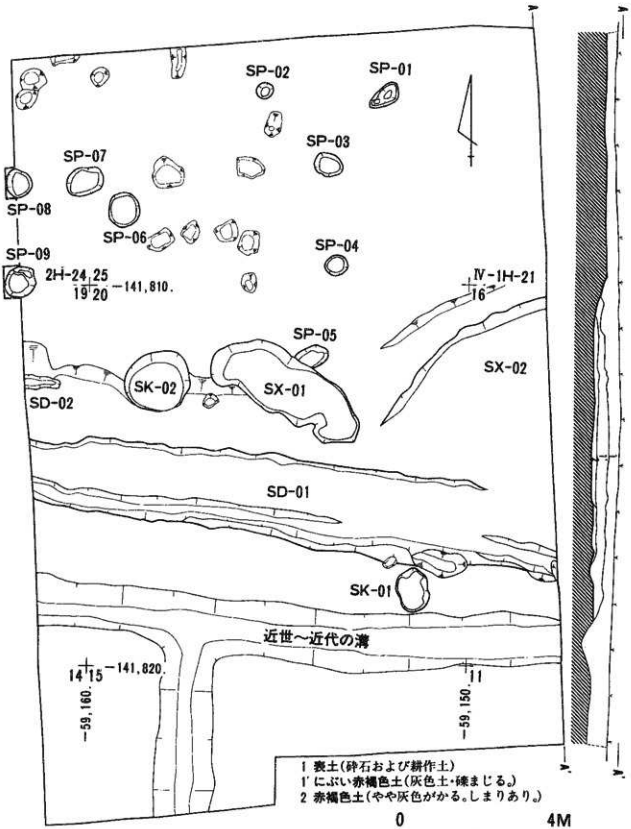


第86次調査地点全体図　1/100

集成図25

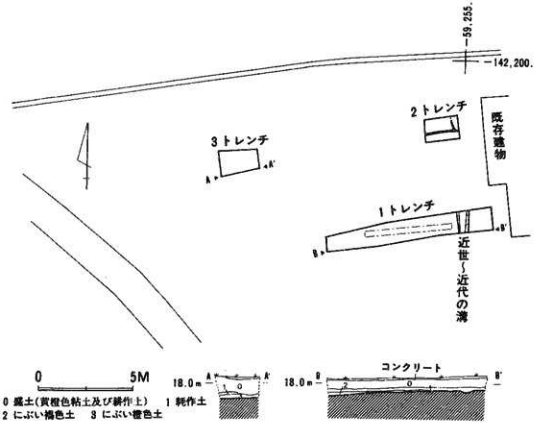


第88・89次調査地点全体図　1/400

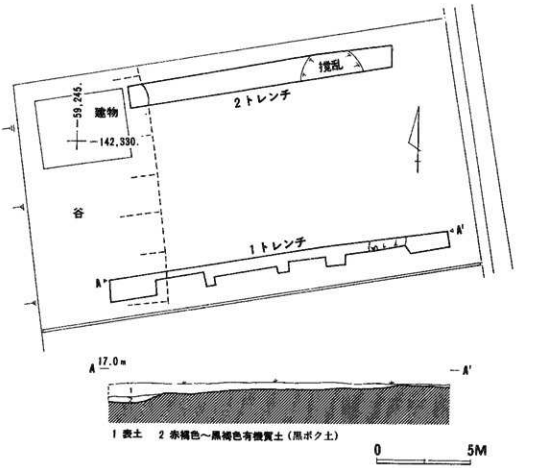


第92次調査地点全体図　1/100

集成図27

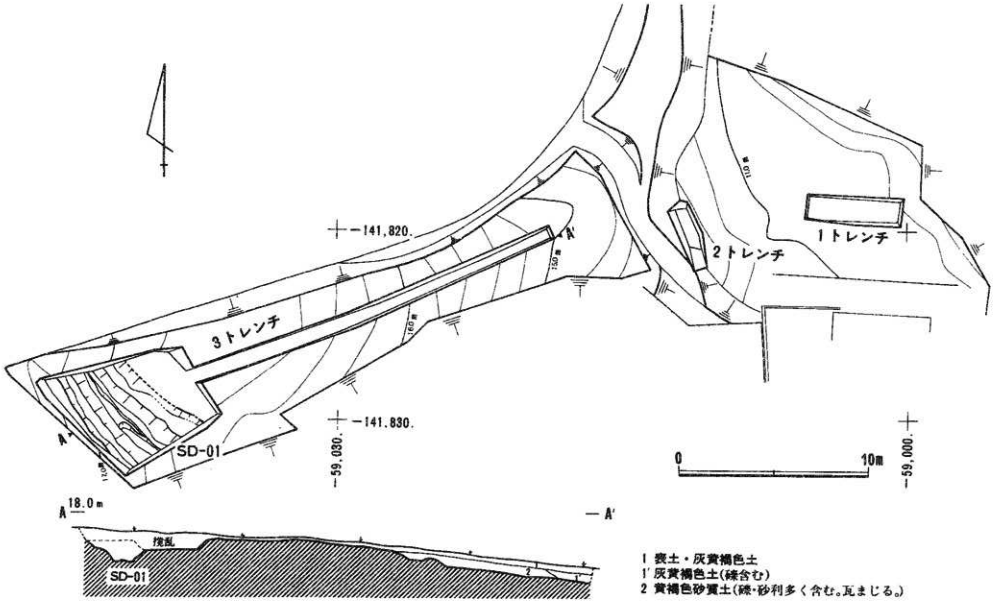


第93次調査地点全体図 1/200

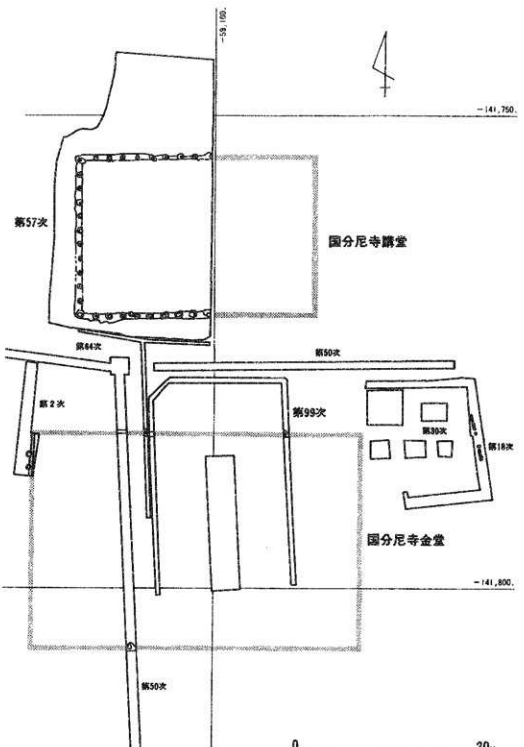


第96次調査地点全体図 1/200

集成図28

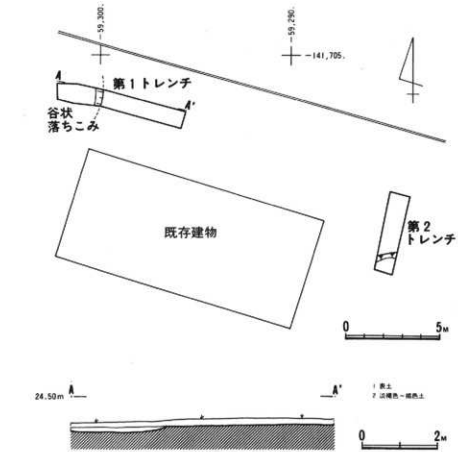


第94・95次調査地点全体図 1/200

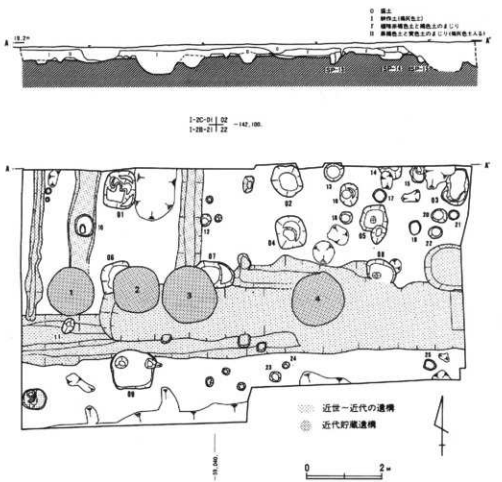


第99次調査地点全体図　1/400

集成図30

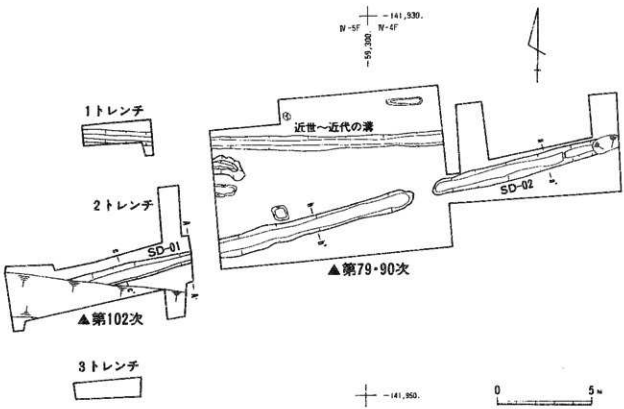


第100次調査地点全体図　1/200

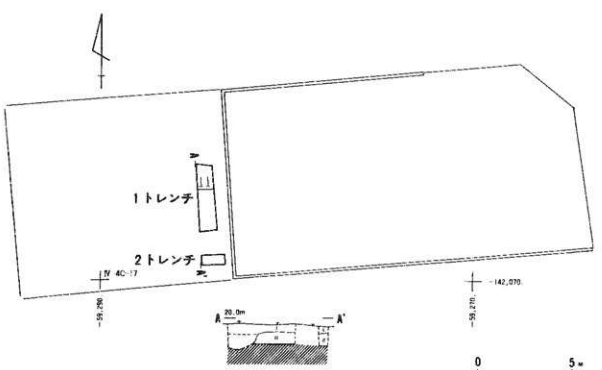


第101次調査地点全体図　1/100

集成図31

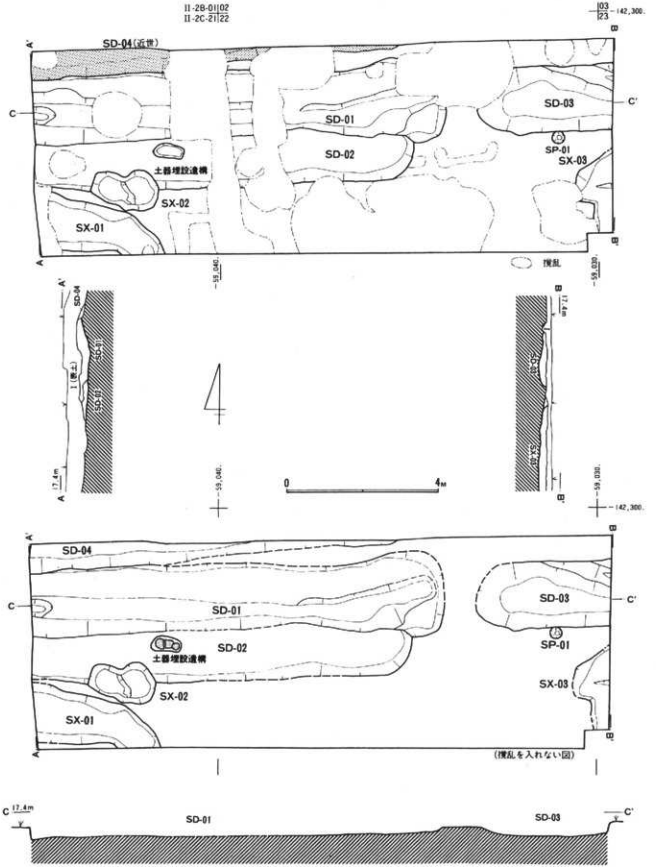


第102次および第79・90次調査遺構平面図　1/200



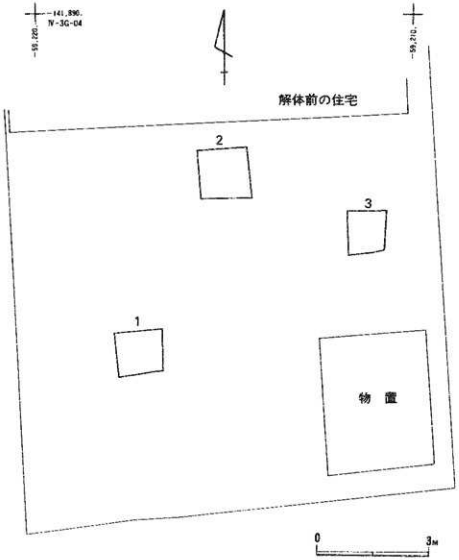
第103次調査地点全体図　1/200

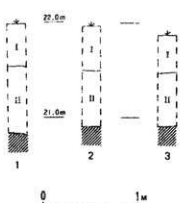
集成図32



第104次調査地点全体図　1/100

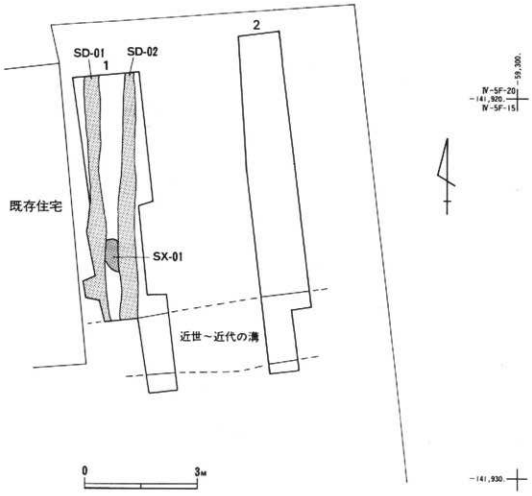
集成図33



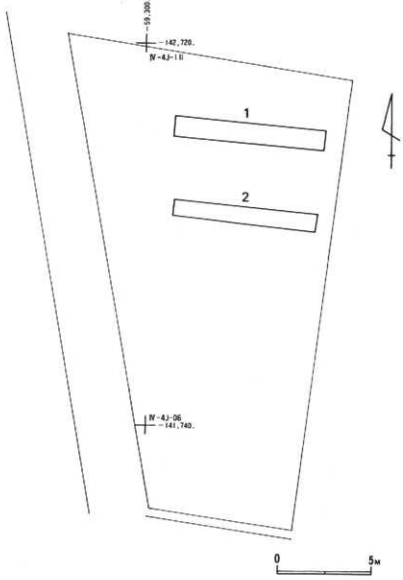


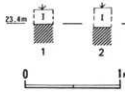
第105次調査地点実測図 1/100

集成図34

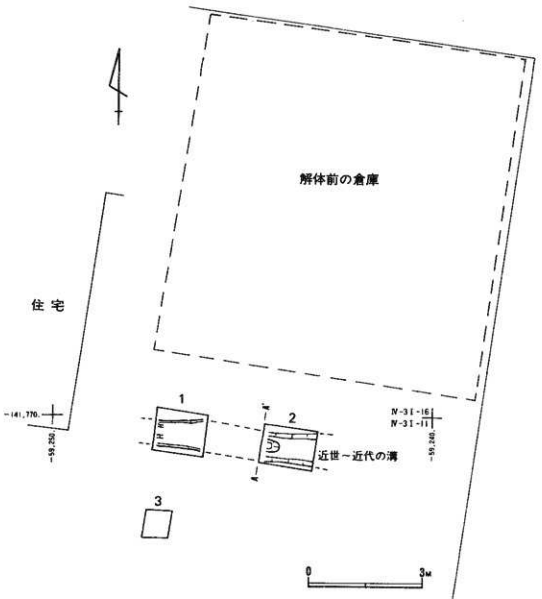


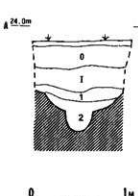
第106次調査地点実測図　1/100





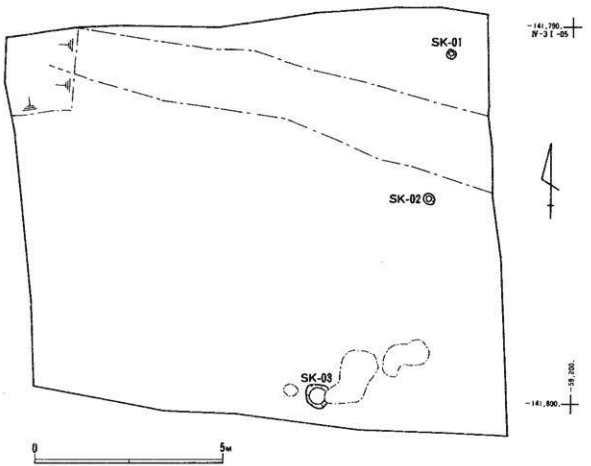
第109次調査地点実測図　1/200



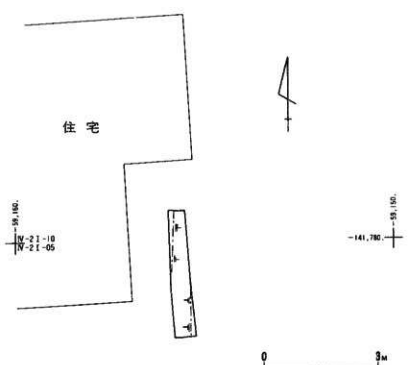


第108次調査地点実測図　1/100

集成図36



第110次調査地点全体図　1/100



第111次調査地点実測図　1/100

集成図37

付編3　参考文献

①静岡県　1930年　『静岡県史』第一巻
②静岡県　1931年　『静岡県史』第二巻
③鴇田忠正　1938年　「遠江国分寺」『国分寺の研究』京都考古学研究会　(1978年に復刻)
④石田茂作　1962年　『遠江国分寺の研究』磐田市教育委員会　(1978年に復刻)
⑤磐田南高校歴史部　1964年　『(四)国分尼寺発掘の記録』『古麗』5
⑥石田茂作・鴇田忠正　1978年　『遠江国分寺』磐田市誌編纂委員会　(石田1962年、鴇田1938年の復刻)
⑦㈱大林組広報室　1980年　「遠江国分寺復元」『季刊大林』No8（特集TEMPLE・寺）
⑧奈良国立博物館　1980年　「特別展　国分寺」
⑨角田文衛ほか　1981年　「特集・遠江国分寺とその復元」
『月刊考古学ジャーナル』No193　ニュー・サイエンス社
⑩浜松市博物館　1982年　『静岡県浜名郡可美村　城山遺跡調査報告書』可美村教育委員会
⑪斎藤孝正　1982年　「猿投窯における灰釉陶の展開」
『月刊考古学ジャーナル』No211　ニュー・サイエンス社
⑫竹内理三　1982年　『角川日本地名大辞典』
⑬石田茂作　他　1984年　『新版仏教考古学講座　第二巻　寺院』雄山閣
⑭平野吾郎　1985年　「遠江国分寺跡出土瓦と瓦屋について」
『古代探叢　2　早稲田大学出版部
⑮角田文衛　1986年～　『国分寺の研究』第1巻～第5巻
⑯森　郁夫　1986年　『瓦』考古学ライブラリー43　ニュー・サイエンス社
⑰木下　良　1988年　『国府』教育社
⑱(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
1988年　「9．遠江国分寺周辺遺跡」『静岡県の原像をさぐる』
⑲静岡県　1990年　『静岡県史』資料編2　考古二
⑳平野吾郎　1990年　「遠江・駿河における屋瓦と寺院」『静岡県史研究』第6号
㉑静岡県　1992年　『静岡県史』資料編3　考古三
㉒平野吾郎　1994年　「遠江国分寺の造営と地方豪族の動向」『古代』第97号　早稲田大学考古学会
㉓斎藤　忠　『国分寺の研究　第6　第5　国分寺跡の規模と建物』　平成5年12月14日初校
㉔静岡県　1994年　『静岡県史』通史編1　原始・古代
㉕関東古瓦研究会　1994年　『関東の国分寺』国分寺シンポジウム資料編
㉖栃木県しもつけ風土記の丘資料館
1994年　『東海道の国分寺』
㉗静岡県教育委員会　1963年　『静岡県の古代文化』
㉘磐田市教育委員会　1981年　『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』
㉙磐田市教育委員会　1984年　『旬坂上2号遺跡・遠江国分寺周辺発掘調査概報』
㉚磐田市教育委員会　1986年　『遠江国分寺跡周辺遺跡(国分寺西遺跡)発掘調査報告書』
㉛磐田市教育委員会　1987年　『昭和61年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㉜磐田市教育委員会　1987年　『鎌田・鍬影遺跡発掘調査報告書』
㉝磐田市教育委員会　1988年　『昭和62年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㉞磐田市教育委員会　1989年　『昭和63年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㉟静岡県教育委員会　1989年　『静岡県の窯業遺跡』(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)
㊱静岡県教育委員会　1989年　『静岡県文化財地図・地名表Ⅱ（焼津以西）』

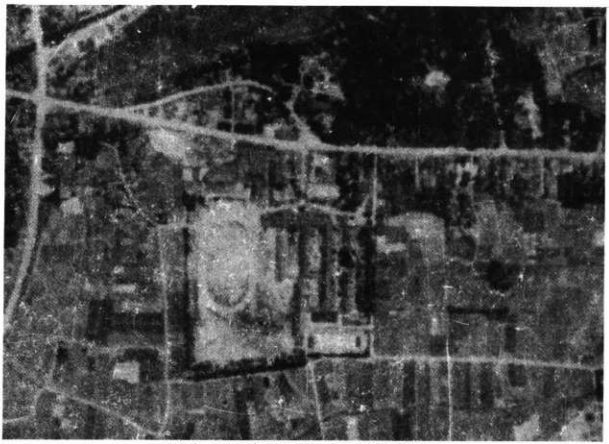
㊲磐田市教育委員会　1990年　『平成元年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㊳静岡県教育委員会　1990年　『国分寺・国府台遺跡』静岡県文化財調査報告書第43集
㊴磐田市教育委員会　1991年　『昭和63年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡　第57次発掘調査報告』
㊵磐田市教育委員会　1991年　『平成２年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㊶磐田市教育委員会　1991年　『平成３年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡　第83次発掘調査報告』
㊷磐田市教育委員会　1992年　『平成３年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㊸磐田市教育委員会　1992年　『国分寺・国府台遺跡　第5次地点　県立磐田南高等学校　はぐま会館建設に伴う発掘調査報告書』
㊹磐田市教育委員会　1993年　『平成４年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㊺磐田市教育委員会　1994年　『平成５年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㊻磐田市教育委員会　1995年　『平成６年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』
㊼磐田市誌編纂委員会　1954年　『磐田市誌　上巻　磐田市
㊽磐田市誌編纂委員会　1976年　『磐田の古代史』
㊾磐田市誌編纂委員会　1979年　『磐田の自然』
㊿磐田市史編纂委員会　1984年　『磐田市誌シリーズ第7冊・磐田の民俗』磐田市
(51)磐田市史編纂委員会　1992年　『磐田市史　史料編1　考古・古代・中世』磐田市
(52)磐田市史編纂委員会　1993年　『磐田市史　通史編上巻　原始・古代・中世』磐田市

〈関連参考文献〉

㊱佐原　真　1972年　「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻 第2号 日本考古学会
(50)中鳴郁夫　1978年　「磐山市寺谷瓦窯の調査」『静岡県考古学研究』3 静岡県考古学会
(53)静岡県考古学会　1979年　『静岡県考古学会シンポジューム2 須恵器－古代陶質土器－の編年』
(54)大須賀町教育委員会　1979年　『清ヶ谷古窯跡群自山窯跡－1978年度の発掘調査－』
(55)武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会　1981年　「武蔵国分寺遺跡発掘調査概報　V」
(56)前川　要　1982年　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』瀬戸市歴史民俗資料館
(57)藤澤良祐　1982年　「瀬戸古窯址群１」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要１』瀬戸市歴史民俗資料館
(58)湖西市教育委員会　1983年　『静岡県湖西市　東笠了遺跡群発掘調査概報　昭和57年度』
(59)稲垣晋也　1983年　「古代の隅木蓋瓦」『藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢』同刊行会
(60)群馬県教育委員会　1983年　『史跡上野国分寺跡発掘調査概要　4』
(61)愛知県教育委員会　1983年　『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）付・猿投窯の編年について』
(62)豊川市教育委員会　1989年　『三河国分寺跡（史跡三河国分寺跡伽藍・寺域の確認発掘調査報告書）』
(63)松井一明 他　1992年　「静岡の瓦窯」『古代仏教東へ－寺と窯－ 2．窯編　第9回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会資料集2』同実行委員会
(64)磐田市教育委員会　1993年　『見付端城遺跡発掘調査報告書』
(65)古代城柵官衙遺跡検討会　1994年　『第20回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』

図　版

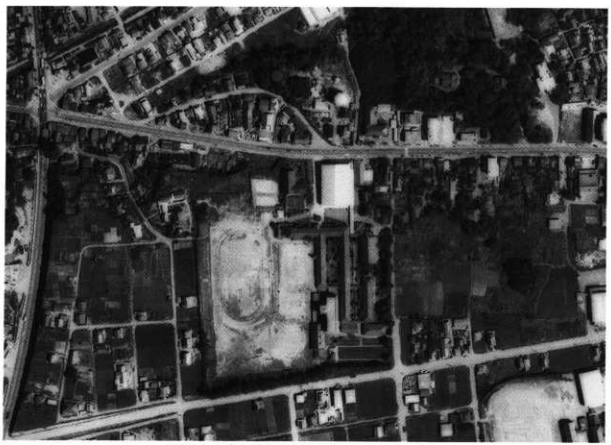
北



南

国分寺・国分尼寺跡周辺航空写真（昭和21年撮影）

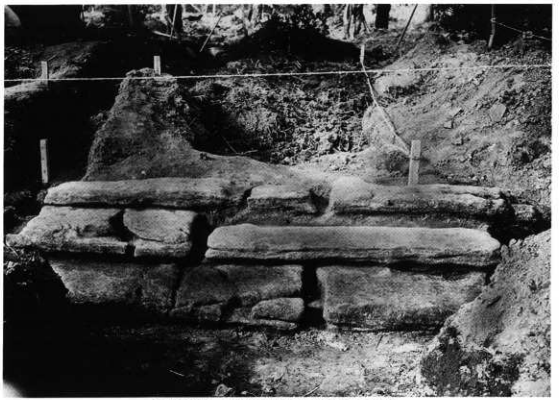
北



南

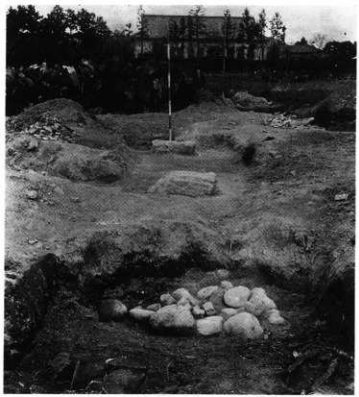
国分寺・国分尼寺跡周辺航空写真（昭和41年撮影）

図版 2

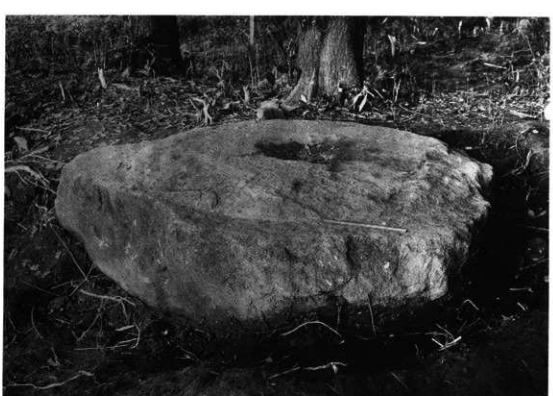


第 1 次調査　金堂跡正面石段（昭和26年調査）

第 1 次調査　回廊跡礎石と根石（昭和26年調査）



第 1 次調査　回廊跡礎石と根石（昭和26年調査）



第 1 次調査　塔跡中心礎石（昭和26年調査）

図版4

第1次調査　金堂跡基壇西北隅瓦出土状態（昭和26年調査）

第1次調査　金堂跡礎石（昭和26年調査）

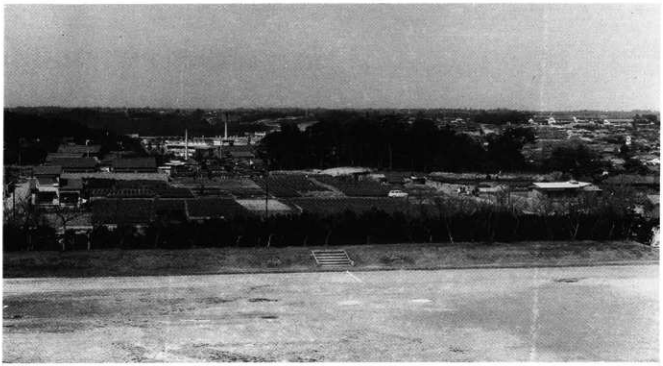
第1次調査　金堂跡正面石段東側地覆石（昭和26年調査）

第1次調査　金堂跡正面石段西側地覆石（昭和26年調査）

図版 6

第１次調査　西側土塁近景（昭和26年調査）

第１次調査　塔跡遠景（昭和26年調査）



第 2 次調査　調査地遠景（昭和40年調査）

第 2 次調査　調査風景（昭和40年調査）

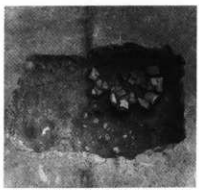
図版8

第5次調査　調査地遠景（昭和57年調査）

第5次調査　溝5遺物出土状態（昭和57年調査）

第５次調査　掘立柱建物跡柱穴２
遺物出土状態（昭和57年調査）

第５次調査　掘立柱建物跡柱穴５
遺物出土状態（昭和57年調査）

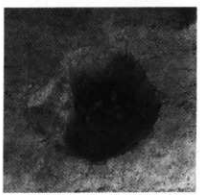


第５次調査　掘立柱建物跡柱穴６
遺物出土状態（昭和57年調査）

第５次調査　掘立柱建物跡柱穴７
遺物出土状態（昭和57年調査）

第５次調査　掘立柱建物跡柱穴８
遺物出土状態（昭和57年調査）

第５次調査　掘立柱建物跡柱穴10
土層断面（昭和57年調査）



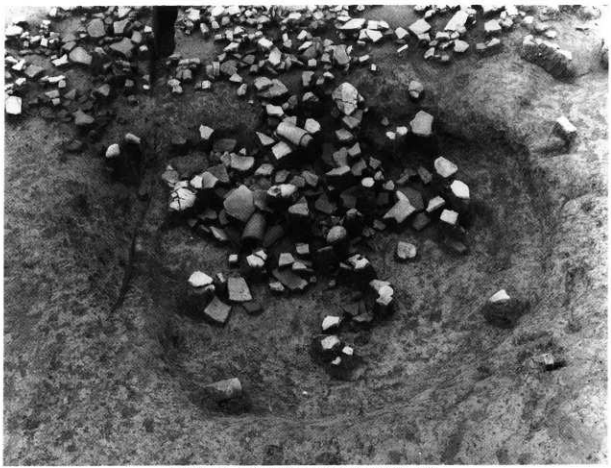
第５次調査　掘立柱建物跡柱穴12
礫出土状態（昭和57年調査）

第５次調査　掘立柱建物跡柱穴９
礫石出土状態（昭和57年調査）

図版10

第９次調査　溝１・２完掘状態（昭和59年調査）

第９次調査　土塁土層断面（昭和59年調査）



第9次調査　土坑3遺物出土状態（昭和59年調査）

第9次調査　土坑4遺物出土状態（昭和59年調査）

図版12

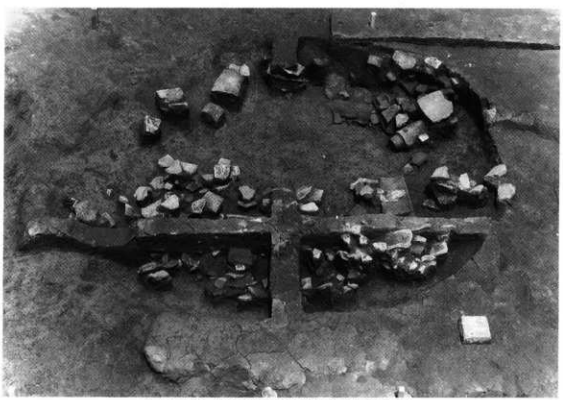
第18次調査　石列検出状態（昭和61年調査）

第21次調査　溝２完掘状態（昭和61年調査）

第38次調査　調査地北側全景（昭和62年調査）

第40次調査　溝１完掘状態（昭和63年調査）

第43次調査　調査地全景（昭和63年調査）



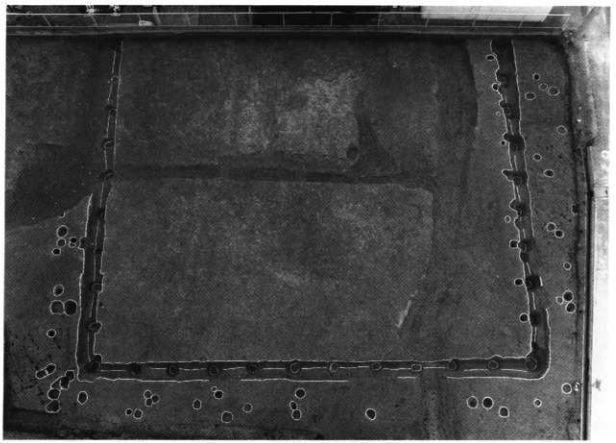
第43次調査　土坑１遺物出土状態（昭和63年調査）

第44次調査　調査地全景（昭和63年調査）

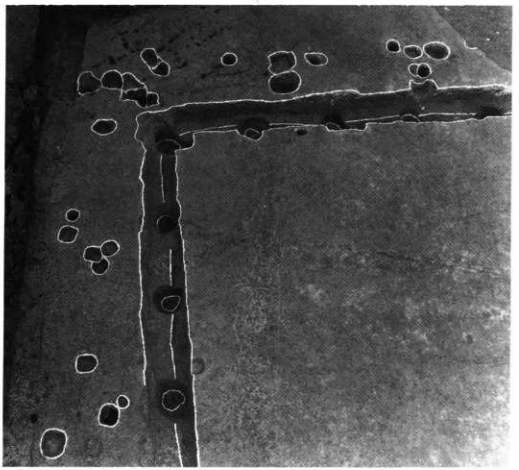
第44次調査　掘立柱建物跡柱穴２
遺物出土状態（昭和63年調査）

第44次調査　掘立柱建物跡柱穴１
遺物出土状態（昭和63年調査）

図版16



第57次調査　調査地全景（平成元年調査）



第57次調査　基壇基礎北西コーナー近景（平成元年調査）

第60次調査　溝１遺物出土状態（平成元年調査）

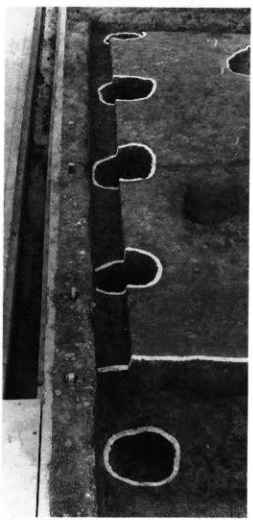
第60次調査　溝１・２完掘状態（平成元年調査）

図版18

第60次調査　溝１・２土層断面（平成元年調査）

第63次調査　瓦検出状態（平成元年調査）

第72次調査　溝１土層断面（平成２年調査）



第80次調査　掘立柱建物跡柱列（平成２年調査）

第99次調査　調査地全景（平成４年調査）

第99次調査　土坑１遺物出土状態（平成４年調査）

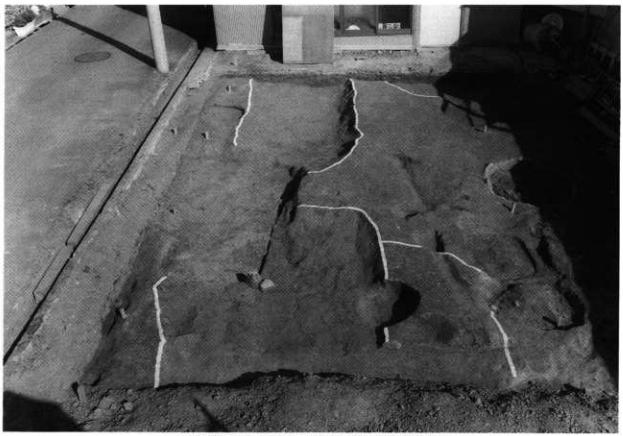
第101次調査　調査地東側全景（平成５年調査）

第101次調査　掘立柱建物跡柱穴１
掘方半截状態（平成５年調査）

第101次調査　掘立柱建物跡柱穴１
遺物出土状態（平成５年調査）

第101次調査　掘立柱建物跡柱穴２
遺物出土状態（平成５年調査）

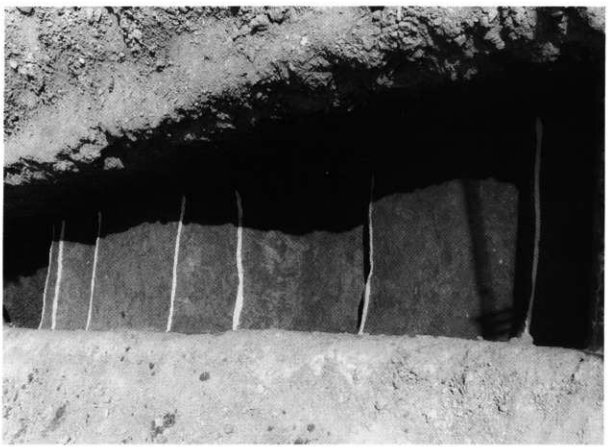
第101次調査　掘立柱建物跡柱穴４
遺物出土状態（平成５年調査）



第104次調査　調査地東側全景（平成６年調査）

第104次調査　土器埋設遺構検出状態（平成６年調査）

第112次調査　第１トレンチ遺物出土状態（西より）



第112次調査　第１トレンチ完掘状態（西より）

第112次調査　第２トレンチ遺物出土状態（東より）

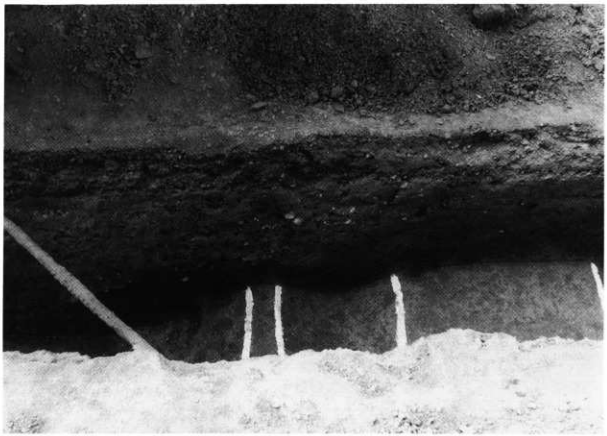
第112次調査　第２トレンチ完掘状態（東より）

第112次調査　第５トレンチ完掘状態（西より）

第112次調査　第６トレンチ完掘状態（西より）

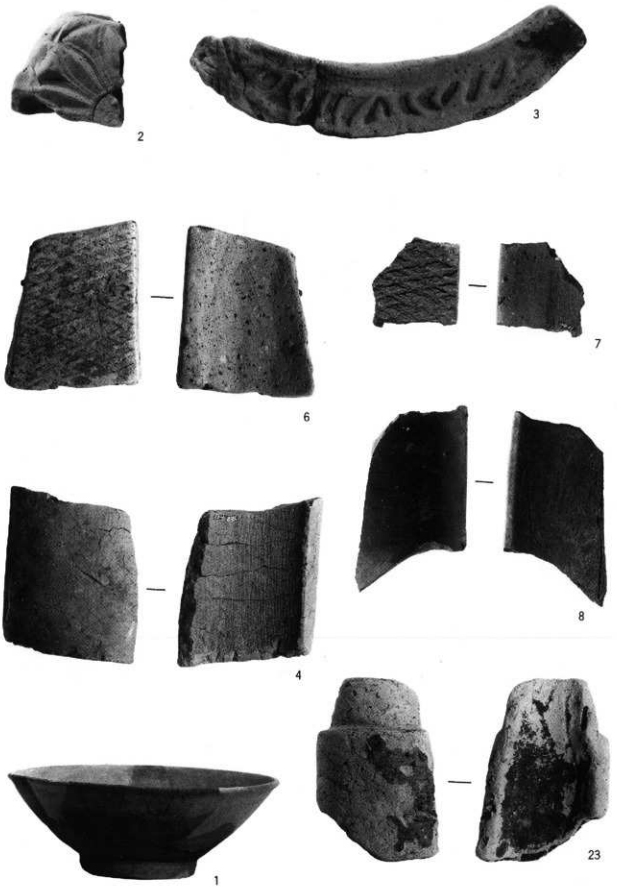
第112次調査　第１トレンチＳＤ１瓦出土状態

第112次調査　第２トレンチＳＤ１瓦出土状態



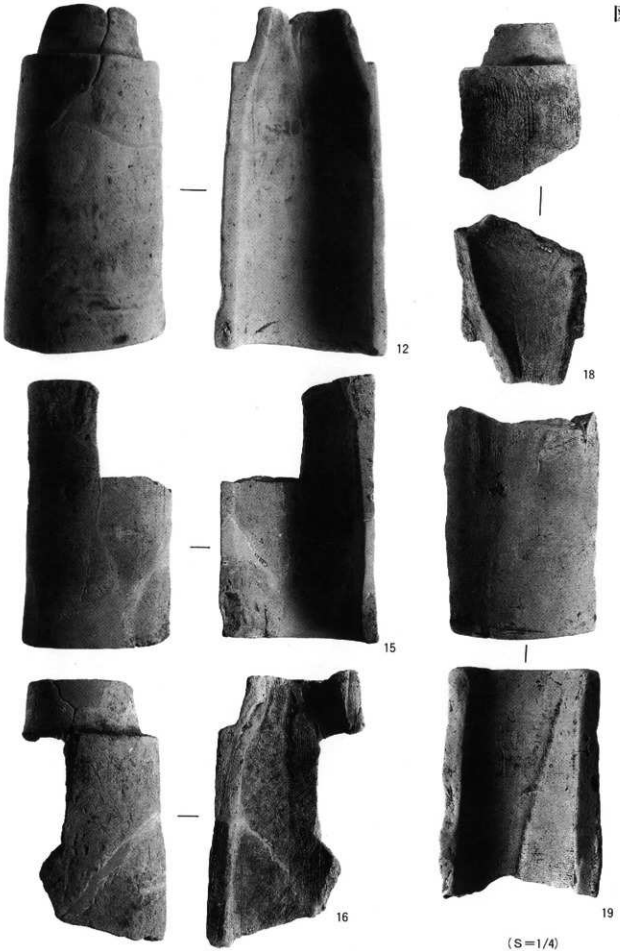
第112次調査　第１トレンチ築地、ＳＤ２・３土層断面

第112次調査　委員会による現地指導風景



第112次調査　出土遺物（1）

(23は1/4、他は1/3)
※番号は実測図番号



(S=1/4)

第112次調査　出土遺物（2）

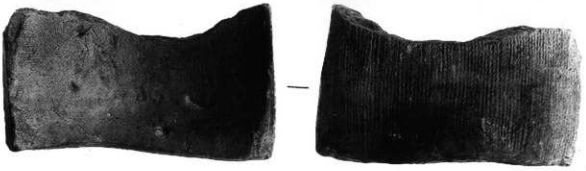
図版30

14

13

28

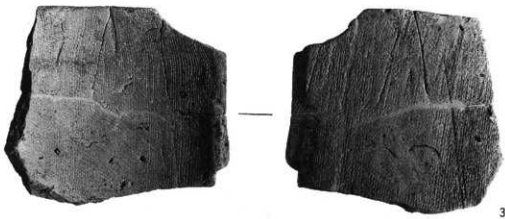
22

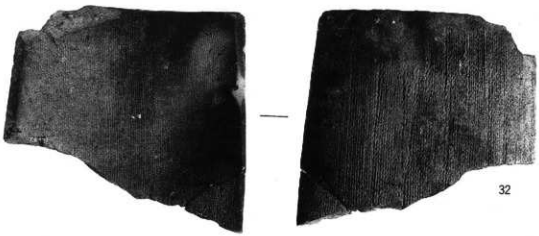


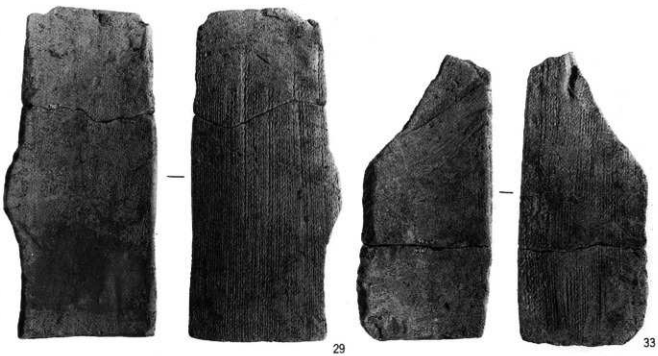
34

第112次調査　出土遺物（3）

（S＝1/4）







第112次調査　出土遺物（4）　（S＝1/4）

報告書抄録

ふりがな	とおとうみこくぶんじあと　ちょうさ
書名	遠江国分寺跡の調査
副書名	平成6年度県立磐田南高等学校埋蔵文化財調査
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第65集
編著者名	斎藤　忠・森　郁夫・大脇　潔・佐藤達雄・柴野克巳・及川　司・加藤理文・山崎克巳・安藤　寛
編集発行機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424　静岡県清水市江尻台町18－5　TEL0543－67－1171㈹
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
国分寺・国府台 （遠江国分寺跡および遠江国分尼寺跡を含む）	静岡県磐田市見付3084（県立磐田南高等学校地内）			34度43分6秒	137度51分14秒	940819～940829	85㎡	校舎建替え計画に伴う基礎資料収集

調査次	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
112次	寺院跡	中世～近世 奈良～平安	溝状遺構 遠江国分寺に伴うと考えられる築地跡、及び溝状遺構	灰釉陶器 軒丸瓦 軒平瓦 丸瓦 平瓦	遠江国分寺伽藍地西端を確認
これまでの調査	寺院跡周辺	奈良～平安 近世～近代	遠江国分寺に伴う遺構 溝状遺構等	瓦（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、隅木蓋瓦） 土器（灰釉陶器、須恵器、土師器） 瓢壺土器 カワラケ 陶硯 鉄製品（鉄釘、鉄金具）	資料集成

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第65集

遠江国分寺跡の調査

— 平成6年度県立磐田南高等学校埋蔵文化財調査 —

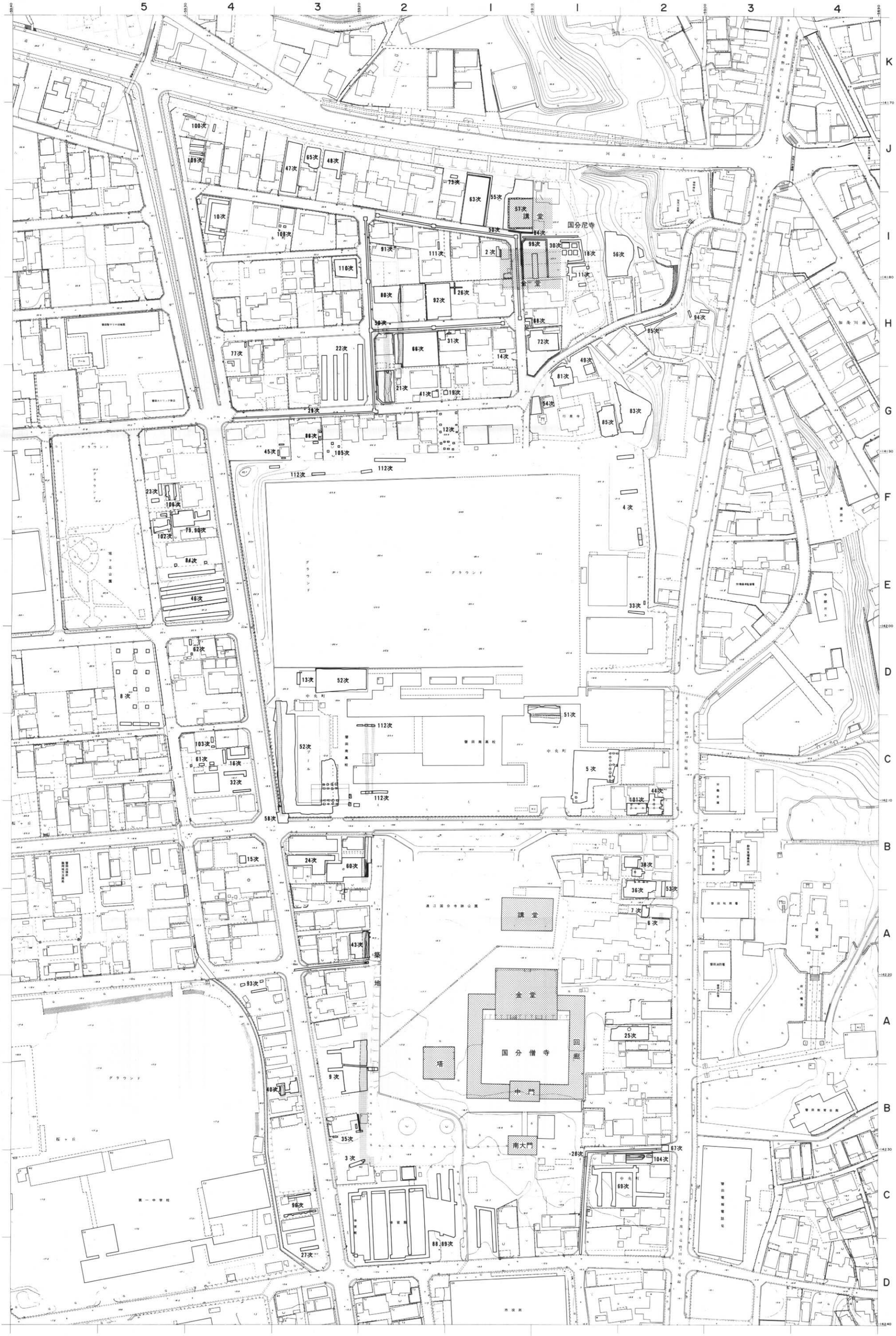
1995年3月31日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　株式会社ニシガイ
清水市本町12番6号
TEL 0543(52)2188

遠江国分僧寺・尼寺周辺遺構分布図

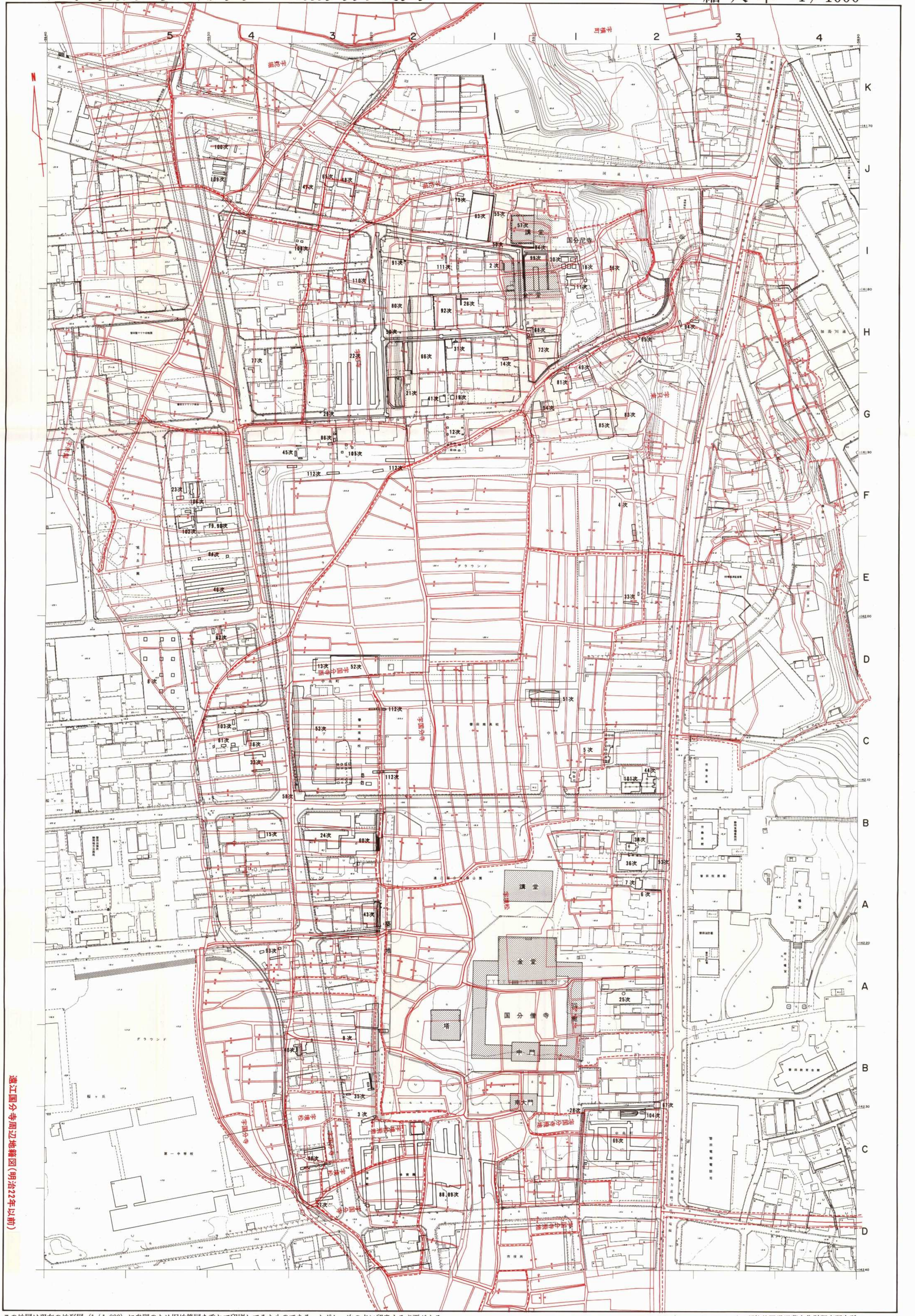
縮尺率　1／1000



(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

遠江国分寺地形図・地籍図合成図

縮尺率　1／1000



この地図は現在の地形図（1／1,000）に参照のため旧地籍図を重ねて印刷してみたものである。ただし、次の点に留意する必要がある。

旧地籍図は切絵図であり、精度が低く貼り合せであるため、ズレている部分がある。ズレがあることを前提に参照していただきたいが、遺跡・遺構配置を検討する上の参考資料となるであろう。

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所